

京都府埋蔵文化財情報

第144号

京都府南部における古墳埋葬施設主軸方位の地域性（下）	古川 匠	1
研究ノート 畿内横穴式石室導入期における須恵器高杯の器形変化とその背景（上）	野島悠之	15
京都府内における出土和鏡について	濱 喜和子	29
稲荷狐（眷属）の分類案－18世紀の資料を中心に－	加藤雄太	37
資料紹介 京丹後市佐屋利遺跡出土の大形石包丁	肥後弘幸	45
京丹波町の埴輪表採資料	北山大熙	51
令和4年度発掘調査略報		57
1. 法貴北古墳群1・2次	2. 小樋尻遺跡第14次	
3. 木津川河床遺跡第40次	4. 宇治市街遺跡第35次（川西地区）	
5. 長岡京跡右京第1260次・開田遺跡ほか		
6. 犬飼遺跡第12次	7. 平遺跡	
8. 岡ノ宮城跡	9. 春日部遺跡第6次	
長岡京跡調査だより・140		68
現地公開・普及啓発事業（令和4年7月～令和4年12月）		70
センターの動向（令和4年7月～令和4年12月）		76

2023年1月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

京都府南部における古墳埋葬施設主軸方位 の地域性(下)

古川 匠

5. 事例の分析(大阪府・奈良県)

本稿で検討する主な対象は、論題のとおり現在の京都府南部とその近隣地域であるが、参考までに現在の大阪府・奈良県域にまたがる淀川本流及び近畿中枢部の様相も素描する。宮内庁管轄の天皇陵古墳については古墳埋葬施設の主軸方位がほとんど判明していないため、特に古市・百舌鳥古墳群に属する巨大古墳の様相が不明ではあるが、その他の地域については、一定の傾向が追えるものと考えられる。

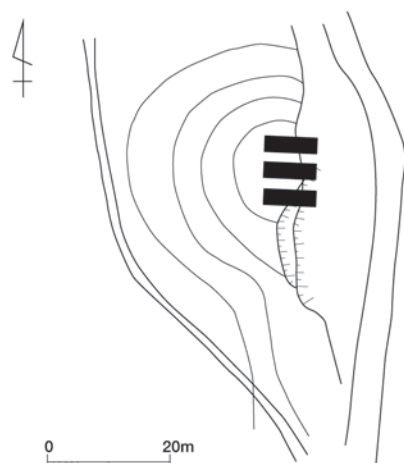
(1) 淀川本流(摂津・北河内地域・第6図)

北河内では、交野市・森古墳群に属し前期前葉以前に比定される鍋塚古墳埋葬施設が北東－南西主軸を示すが、それ以降のこの地域の古墳では、北－南主軸と東－西主軸が混在する。北－南主軸では、四條畷市・忍岡古墳(87m前方後円墳、和田三期・広瀬3期)後円部の竪穴式石槨がまず挙げられる。また、交野市・交野東車塚古墳(65m以上前方後方墳、和田五期・広瀬4期)は、後方部に3基の埋葬施設が存在するがいずれも北－南主軸である。一方、枚方市・藤田山古墳(50m円墳または前方後円墳、和田三期・広瀬3期)の埋葬施設は、東－西主軸である。

摂津東部では淀川右岸で前期初頭に高槻市・安満宮山古墳が築造されたのち、三島郡の一帯に多くの古墳が形成され「三島古墳群」とも総称されるが、東の島上郡と西の島下郡ではやや様相が異なる。島上郡に立地する高槻市・闘鶏山古墳(88m前方後円墳、和田三期・広瀬3期)、高槻市・弁天山C1号墳(73m前方後円墳、和田三期・広瀬3期)では中心の埋葬施設はいずれも北－南主軸を示す。一方、島下郡では、前期後葉の茨木市・茨木將軍山古墳(110m前方後円墳)と茨木市・安威1号墳(45m前方後円墳・両古墳は和田三期・広瀬3期)で東－西主軸の埋葬施設が確認されている。また、両古墳は佐保川と安威川にはさまれた地域に近接して立地する。特に茨木將軍山古墳は東－西主軸の竪穴式石槨を有することが以前から知られ、竪穴式石槨に東四国地域と共通する結晶片岩が用いられることも含めて注目されてきた古墳である。また、同古墳出土の壺形埴輪の製作技法は、東四国地域の壺形埴輪の影響を受けていることも指摘されている^(注17)。茨木將軍山古墳より先行するか、同時期とも考えられる茨木市・紫金山古墳(100m前方後円墳・和田三期・広瀬3期)は北－南主軸であるが、先述の東－西主軸を取る茨木將軍山古墳、安威1号墳とは佐保川を隔てた立地にあり、系列の異なる可能性がある。

(2) 近畿中枢部(大和、中・南河内、和泉・第7図)

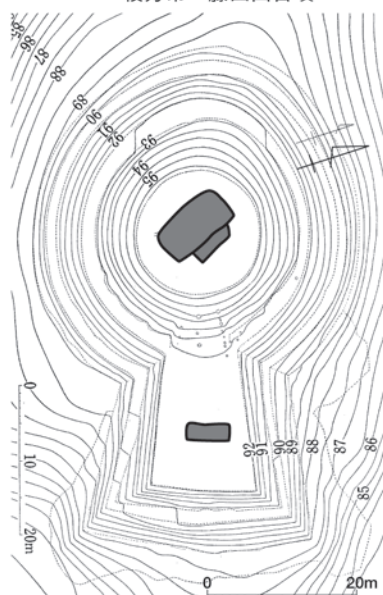
まず前期古墳をみると、大和では前期初頭以前の桜井市・ホケノ山古墳(80m前方後円墳)をはじめ、多くの前期古墳の埋葬施設が調査され、その中には墳長200mを超える巨大前方後円墳も



枚方市・藤田山古墳



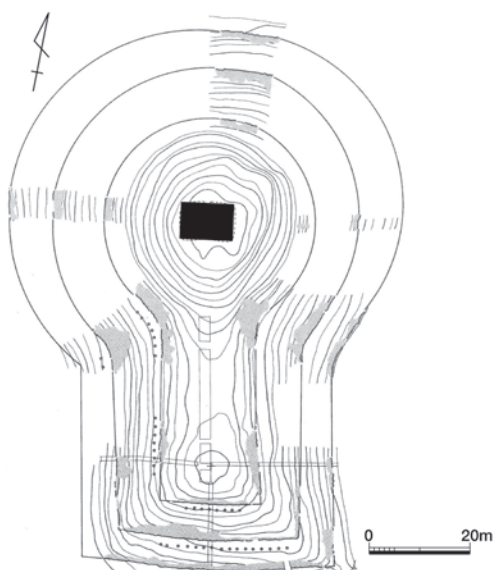
四條畷市・忍岡古墳



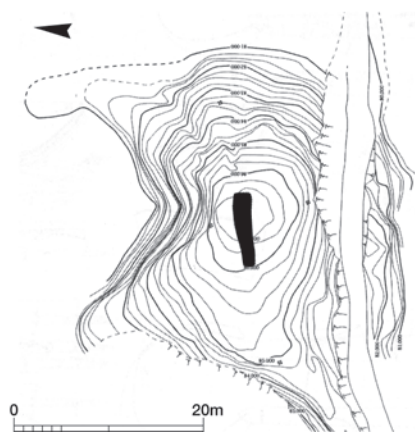
高槻市・弁天山 C-1 号墳



高槻市・關鷄山古墳



茨木市・茨木將軍山古墳
(將軍山2号墳)



茨木市・安威1号墳

■ 東西主軸

■ 南北主軸

///

北東—南西
または
北西—南東

第6図 摂津・北河内(淀川本流域)の事例

含まれる。埋葬施設の主軸方位は、ここで改めて言及するまでもなく、ほぼ一貫して北－南主軸で占められる。

中・南河内の事例では、柏原市・松岳山古墳(140m前方後円墳、和田三期・広瀬3期)、藤井寺市・津堂城山古墳(210m前方後円墳、和田五期・広瀬4期)、八尾市・心合寺山古墳(130m前方後円墳、和田六期・広瀬5期)といった大型・超大型古墳が北－南主軸の事例として挙げられる。一方、中規模の古墳では、従前から東－西主軸の事例として指摘されている、柏原市・玉手山古墳群の北玉山古墳(51m前方後円墳、和田四期・広瀬4期)、駒ヶ谷宮山古墳(65m前方後円墳、和田四期・広瀬4期)が挙げられる。付近の松岳山古墳は北－南主軸であるが、東四国の石材が多用され、東四国で多く造られる積石塚であることから、玉手山古墳群、松岳山古墳を中心とする松岳山古墳群は東四国地域と関係が深いことも指摘されている^(注19)。

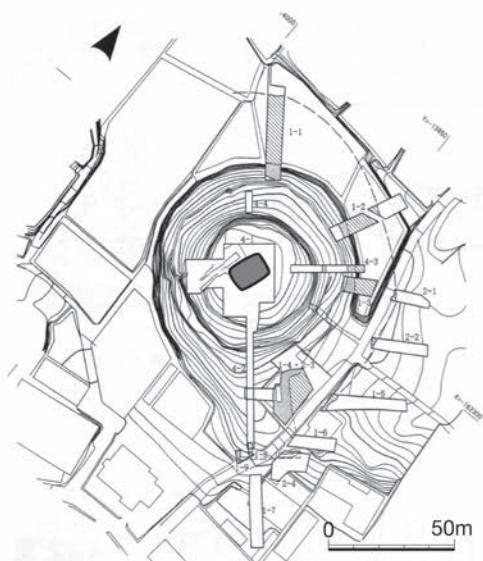
和泉では和泉市・和泉黄金塚古墳(94m前方後円墳、和田四期・広瀬4期)が北－南主軸である。岸和田市・久米田貝吹山古墳(130m前方後円墳・和田四期・広瀬4期)は北西－南東主軸を採り、主軸方位では南北または東西のどちらともつかないが、石棺が讃岐産の石英安山岩質凝灰岩製であることが注目される^(注20)。また、後続する中期中頭の岸和田市・久米田風吹山古墳(76m帆立貝形墳、和田五期・広瀬4期)は、東－西主軸を採る。

なお、大和、中・南河内、和泉では、東－西主軸の埋葬施設が前期大型古墳の中心的埋葬施設には認められないが、中期前葉(和田六期・広瀬5期)になると、御所市・室宮山古墳(全長238m前方後円墳)、堺市・百舌鳥大塚山古墳(全長130m前方後円墳)といった大型・超大型前方後円墳でも明確に東－西主軸を採る事例が見られるようになる。

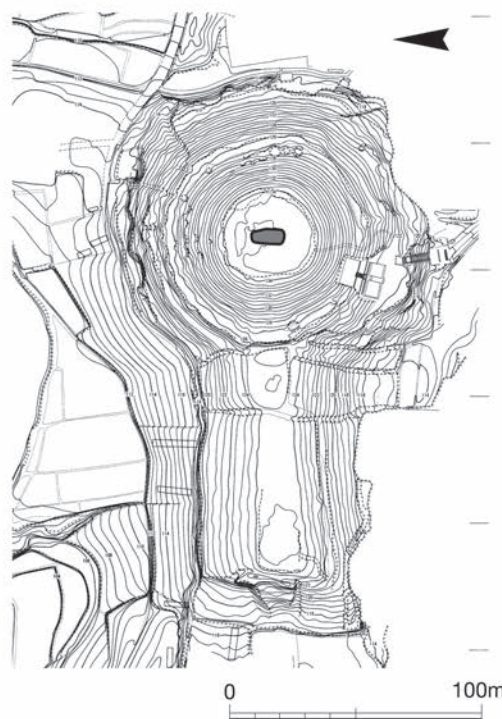
(3)小結

淀川本流域(摂津、北河内)では、かねてから指摘されてきたとおり、北－南主軸だけでなく、東－西主軸の埋葬施設が一定認められる。各事例の所在を比較すると、島上郡では北－南主軸、島下郡では東－西主軸が優勢という、分布差が存在した可能性がある。また、前期の島上、島下両郡で最も規模の大きい茨木將軍山古墳(全長110m)が東－西主軸を採用することは、東－西主軸の埋葬施設が、絶対数は少ないとはいえ、北－南主軸の被葬者に対して対等以上の地位でありえたことを示している。

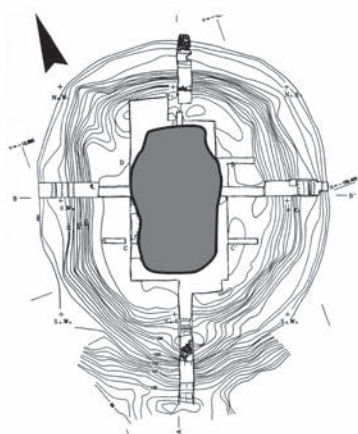
巨大古墳が築造される近畿中枢部(巨大古墳が造られる大和、中・南河内、和泉)では、大型古墳(100m級)以上の墳丘規模では全般に北－南主軸が主体である。少数ながら存在する東－西主軸の埋葬施設は、淀川本流と同じく前期後葉(和田三期・広瀬3期)に出現し、中期前葉(和田六期・広瀬5期)まで継続する。これらの古墳は、中期前葉の室宮山古墳を除くと、中型墳か、または大型墳でも古墳群の中では従属的な位置づけとなる古墳である。例えば大和の佐紀古墳群における東－西主軸の猫塚古墳(110m前方後円墳)は同時期の北－南主軸の佐紀陵山古墳(207m前方後円墳)と比べて2分の1強の規模に過ぎない。和泉の百舌鳥大塚山古墳(130m前方後円墳)の場合は、同時期に、埋葬施設の詳細は不明とはいえ、墳長360mの岡ミサンザイ古墳が近接する。このように見ると、近畿中枢部では、東－西主軸の埋葬施設は、北－南主軸の埋葬施設と比べて劣



ホケノ山古墳（前期初頭以前・北-南）



桜井茶臼山古墳（前期後葉・北-南）



中山大塚古墳（前期初頭・北-南）



桜井茶臼山古墳（前期前葉・北-南）



津堂城山古墳（中期初頭・北-南）



第7図 近畿中枢部の事例

位に位置づけられる傾向が顕著である。

以上のように、淀川本流域と近畿中枢部における東－西主軸埋葬施設の位置付けの違いは明確であると言える^(注21)。

6. まとめ

本稿のこれまでの分析により、古墳埋葬施設の主軸方位には、京都府南部を含む淀川流域と、近畿中枢部との間に分布差が存在することが判明した。改めてこの傾向を示し、その背景について考察する。

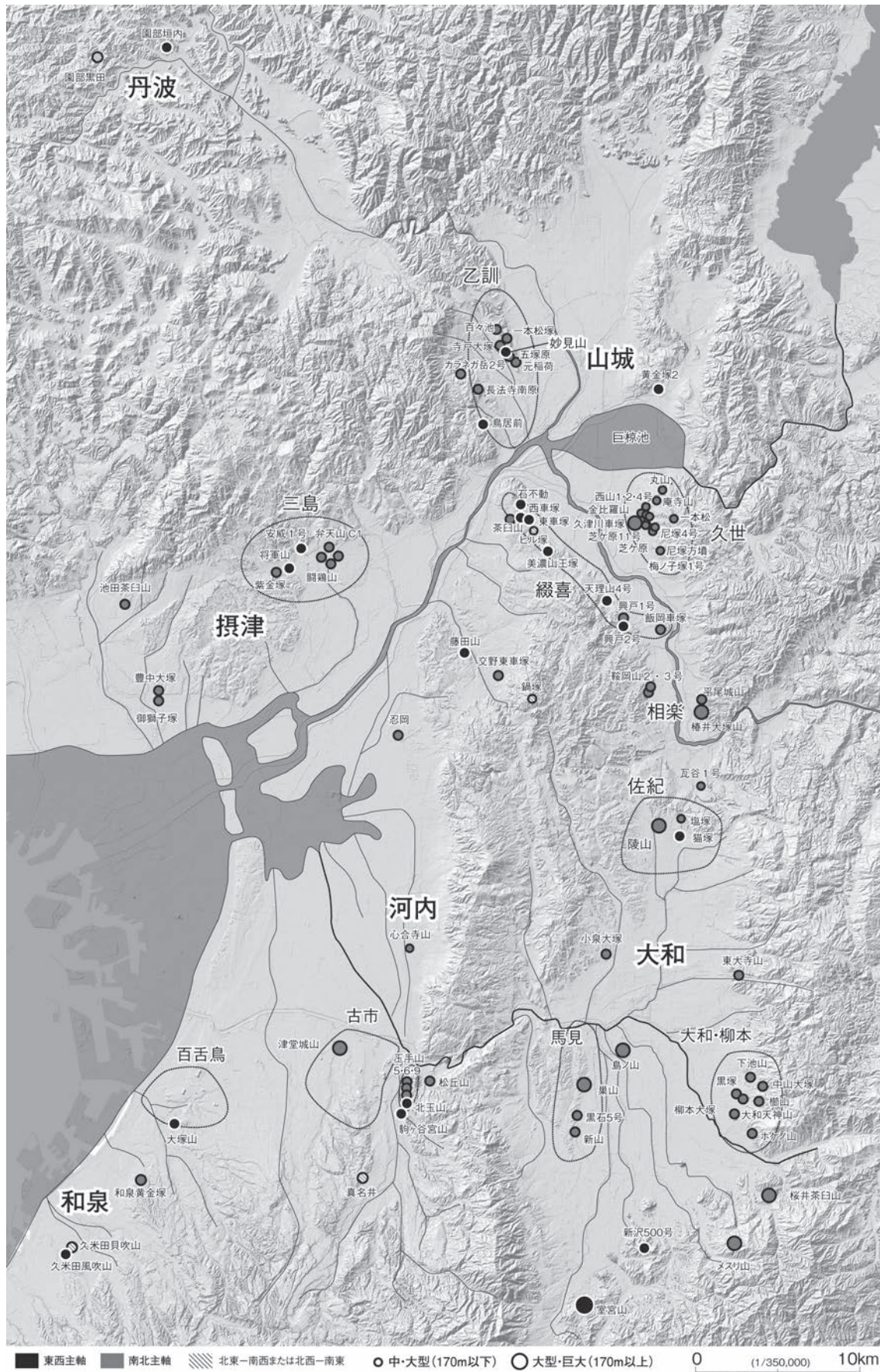
(1) 淀川流域の特徴と近畿中枢部との対比(第8図・第9図)

先行研究の節でも触れたが、淀川流域を対象にした埋葬施設主軸方位の研究の展開をみると、2つの立場がある。近畿中枢部の巨大古墳で北－南主軸の埋葬施設が優位であることから、北－南主軸に東－西主軸が従属するということを主張する説^(注22)と、埋葬施設の主軸は首長の出自や他地域との交流を反映しているとする説^(注23)である。

筆者は、本稿のこれまでの分析から、古墳時代前期後葉から中期初頭の淀川流域では、近畿中枢部とは別の価値観で埋葬施設の主軸方位が定められていたと考える。すなわち、北－南主軸埋葬施設の優位は近畿中枢部に限定され、淀川流域では北－南主軸と東－西主軸の墳丘規模が拮抗し、むしろ東－西主軸が優位に立つ時期もあったと評価する。

まず、埋葬施設主軸方位の位置づけが地域ごとに変化していたことを示す事例として、本稿の主たる対象である南山城地域をとりあげる。木津川左岸北部の綴喜郡西部では、東－西主軸が八幡西車塚古墳などの大型前方後円墳をはじめとする多くの古墳で採用されるのに対して、木津川左岸南部及び右岸北部にあたる久世郡及び相楽郡では、逆に多くの古墳で北－南主軸が採用され、北－南主軸が東－西主軸に対して優位に立つという奈良盆地の古墳と同じ状況が、瓦谷古墳群や尼塚古墳群で見られる。このように、南山城地域では、小地域によって埋葬施設主軸方位の様相が大きく異なるのである。

こうした様相の差は、階層の反映ではなく、埋葬施設主軸方位に関する意識の違いと評価するのが妥当であると筆者は考える。というのも、仮に北－南主軸の埋葬施設が優位とする近畿中枢部の意識が南山城地域でも完全に共有されていたとすれば、埋葬施設に東－西主軸が採用される八幡西車塚古墳や八幡東車塚古墳、石不動古墳といった木津川左岸北部の前方後円墳は、北－南主軸が採用される木津川左岸南部及び右岸北部の円墳、方墳より劣位とみなされることになるが、木津川左岸北部の首長墓群、すなわち「綴喜古墳群」を構成する八幡西車塚古墳等をみると、墳丘規模と墳形で他の小地域に対して優位に立つだけでなく、埋葬施設は他地域で主体的な粘土槨に対して竪穴式石槨が多く、副葬品には大・中型鏡や朝鮮半島製鉄製武器、武具が含まれている。古墳を構成するこうした各要素をみても、この時期の南山城地域における木津川左岸北部の優位性は明確であるため、北－南主軸の埋葬施設が東－西主軸のそれよりも上位とする見方は成り立ちえない。



第8図 近畿地方中央部における埋葬施設の分布状況(国土地理院陰影起伏図をもとに作図)

南山城地域は、木津川沿岸という視点からは一つの地域とも捉えられるが、淀川本流に近い木津川左岸北部では、東－西主軸の埋葬施設が有力首長間で共有され、その一方で、奈良盆地により近い木津川左岸南部や、前期前葉以前から前方後円墳、後方墳が築造されていた右岸一体では、近畿中枢部で重視され、従前から存在していた北－南主軸の埋葬施設が継続して採用されたと考えられる。

さらに視野を広げて淀川流域全体を概観すると、東－西主軸の埋葬施設が広範囲に分布していることがわかる。山城から摂津の範囲では、前期後葉(和田三期・広瀬3期)の段階で、東－西主軸の埋葬施設が大型古墳にも採用される傾向がすでに認められる。例えば、北山城の妙見山古墳、南山城の八幡西車塚古墳、摂津の茨木將軍山古墳といった事例である。この傾向は継続し、前期末(和田四期・広瀬4期)の淀川流域で最大規模墳である北山城の黄金塚2号墳、鳥居前古墳、南山城では八幡東車塚古墳で東－西主軸の埋葬施設が確認されている。そして、この段階から近畿中枢部でも東－西主軸の採用が進みはじめ、中期前葉(和田五期・広瀬5期)には奈良盆地の巨大前方後円墳、室宮山古墳でも採用されるようになる。

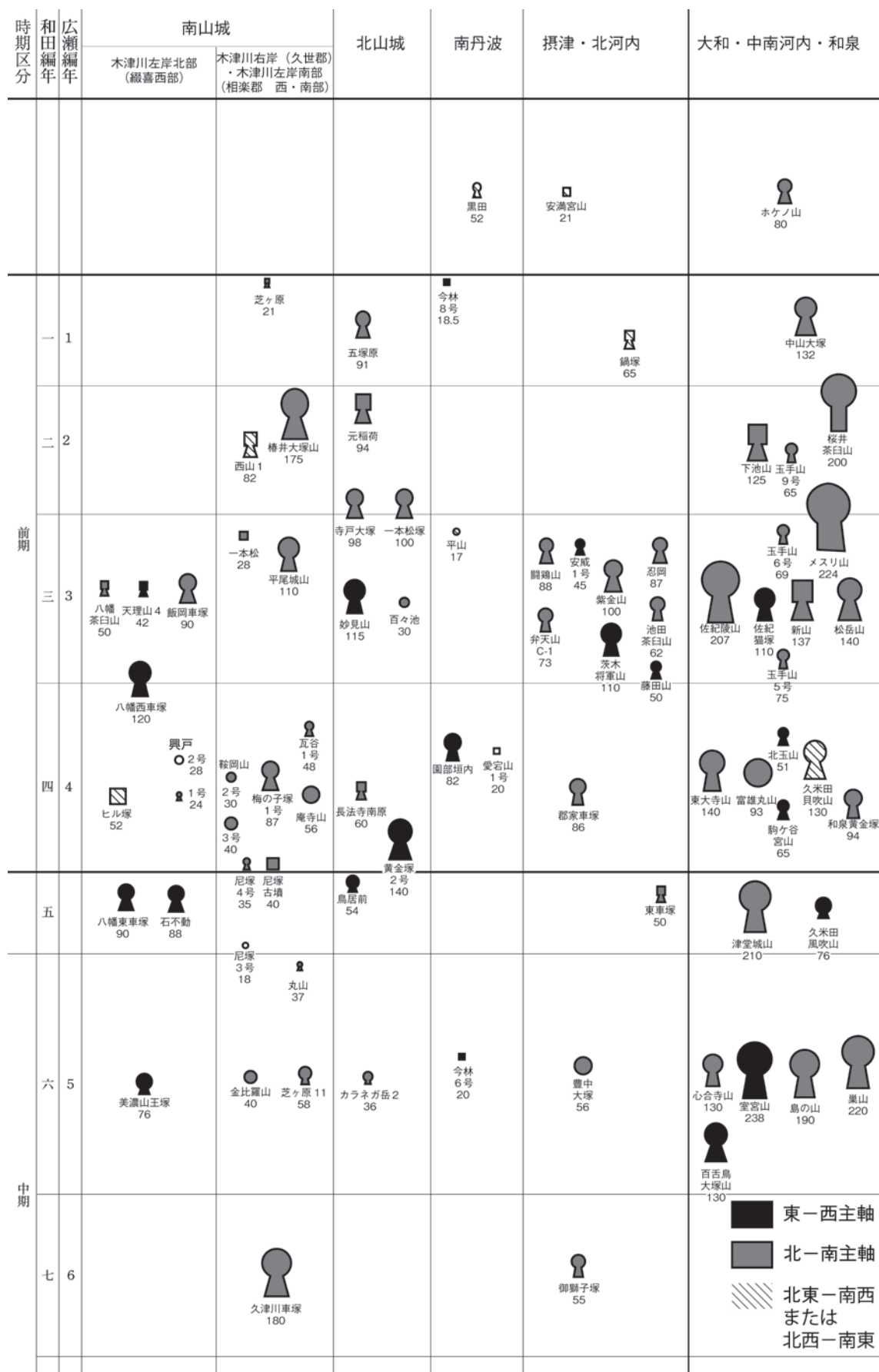
ところで、埋葬施設主軸方位の先行研究で従来重視されてきた墳丘主軸との関係について本稿ではこれまで触れてこなかったが、墳丘主軸との主軸の振れを角度の大きさから「平行」、「斜行」、「直交」^(注24)と大まかに分類して淀川流域の様相を見てみると、北－南主軸の場合は、「平行」、「ほぼ平行」が多く(付表1)、その一方で東－西主軸の場合は、「直交」、「斜行」が多い(付表2)。さらに詳しく見ると、北－南主軸の埋葬施設の場合、北山城の乙訓郡と南山城の綴喜郡西部すなわち木津川左岸に「平行」、「ほぼ平行」が集中するのに対し、南山城相楽郡、摂津では「斜行」、「直交」、「平行」が分散しより多様である。一方、東－西主軸の場合は、山城地域全体では顕著に「直交」、「斜行」が主体となり、摂津の茨木將軍山古墳も「直交」である。したがって、特に山城地域では、北－南主軸と東－西主軸のグループ間で、方位だけでなく墳丘から埋葬施設に至る葬送儀礼の導線や儀礼における空間構成も顕著に異なっていたと考えられる。そして摂津の茨木將軍山古墳が同様の構造とみられることも無関係ではないだろう。

付表1 埋葬施設主軸 北－南(淀川流域)

古墳名	地域	和田編年	墳丘規模	墳丘主軸との関係
五塚原	北山城・乙訓	一期	91m	ほぼ平行
元稻荷	北山城・乙訓	二期	94m	平行
寺戸大塚	北山城・乙訓	二期	98m	平行
一本松塚	北山城・乙訓	二期	100m	平行
長法寺南原	北山城・乙訓	四期	60m	平行
八幡茶白山	南山城・綴喜	三期	50m	平行
飯岡車塚	南山城・綴喜	三期	90m	平行
椿井大塚山	南山城・相楽	二期	175m	斜行
平尾城山	南山城・相楽	三期	110m	ほぼ直交
瓦谷1	南山城・相楽	四期	48m	平行
梅の子塚1	南山城・相楽	四期	87m	斜行
紫金山	摂津・島下	三期	100m	直交
闘鶏山	摂津・島上	三期	88m	平行
弁天山C1	摂津・島上	三期	73m	斜行
郡家車塚	摂津・島上	四期	86m	ほぼ直交

付表2 埋葬施設主軸 東－西(淀川流域)

古墳名	地域	和田編年	墳丘規模	墳丘主軸との関係
妙見山	北山城・乙訓	三期	115m	直交
鳥居前	北山城・乙訓	四期	54m	直交
黄金塚2	北山城・宇治	四期	140m	斜交
八幡東車塚	南山城・綴喜	五期	90m	直交
石不動	南山城・綴喜	五期	88m	斜交
美濃山王塚	南山城・綴喜	六期	76m	ほぼ直交
茨木將軍山	摂津・島下	三期	110m	直交
園部垣内	丹波・船井	四期	82m	平行



第9図 古墳編年と各古墳の埋葬施設主軸方位

なお、これら、淀川流域で東－西主軸の埋葬施設を伴う古墳の墳丘規模は、大和をはじめとする近畿中枢部の巨大古墳の半分程度に過ぎないが、各地域のなかでは最大規模の前方後円墳を含むのが特徴である。そして、前期後葉から中期初頭(和田三期～五期・広瀬3～4期)という非常に短い期間に限定すると、淀川流域では、東－西主軸の埋葬施設が北－南主軸の埋葬施設よりも墳丘規模ではむしろ優位に立つと解釈することさえ可能である。少なくとも、北－南主軸が顕著に優位である同時期の近畿中枢部とは、全く異なる原理で埋葬施設及び墳丘の主軸が決められていたと判断できよう。

(2) 東－西主軸採用の背景と評価

このように、淀川流域の首長墳の埋葬施設で東－西主軸が採用され、一時的とはいえ北－南主軸より優位に立つように見える現象には、どのような背景があるのだろうか。

① 東四国地域との関係

山城地域を含む淀川流域における東－西主軸の埋葬施設の採用は、これまで東－西主軸の埋葬施設が卓越する東四国との関係から説かれることが多かった。実際に山城地域では、木津川及び桂川沿いの集落遺跡で東四国系の土器が多く出土している。東四国系土器の存在は、山城地域の各首長が内陸部から瀬戸内海までの水上交通を活用した遠隔地交流を推進した証左と捉えられ、彼らが死後に葬られた古墳埋葬施設で東－西方位が卓越した背景と見なしうる。近年検討が進んでいる集落の様相と古墳造営の動向が合致したケースとして評価できるのではないだろうか。

ただしその一方で、東四国地域との直接的な関係が広い範囲で強く保たれていたわけではなく、地域間関係は他の要因も加味した複合的なものであったと考えられる。というのも、東四国産の結晶片岩が埋葬施設や墳丘葺石で用いられることが東四国との関係を示す物証としてよく挙げられるが、山城地域はこうした状況とは一線を画するためである。北山城地域では、竪穴式石槨で使用される石材は桂川で採集されるチャート、頁岩が主体である。また、南山城地域の木津川左岸北部で確認される石材は、現在の大阪府と兵庫県の県境付近を流れる猪名川流域で産出される石英斑岩で、木津川右岸南部、相楽郡の平尾城山古墳とも共通する石材である。平尾城山古墳は椿井大塚山古墳の後継とも目される大型前方後円墳で、埋葬施設の方位は北－南であることから、木津川左岸北部とはつながりが薄いようにも見えるのだが、石材調達は同じルートを利用していた可能性がある。竪穴式石槨を構築するために必要となるのは結晶片岩や二上山安山岩といった板状に割りやすい石材であるが、同様に板状に加工しやすいチャート、頁岩が近隣で採集可能な北山城地域は様相が異なるのでひとまず措くにしても、粘土や砂を主体とする大阪層群が厚く堆積する地質的環境が共通する淀川本流域と木津川流域では、こうした石材の完全な自給が困難で、域外から供給される石材に一定頼らざるを得なかった。このような同一の条件下にありながらも、淀川本流と木津川流域の古墳で、結晶片岩と石英斑岩が別に用いられるのは、埋葬施設方位に表れるのとはまた別の地域間関係を示していると考えられる。すなわち、石材が示す東四国との関係は、結晶片岩が多く用いられる淀川本流沿岸部でより直接的に現れ、特に茨木將軍山古墳では壺形埴輪においても東四国との共通点があるとされる^(注29) など、密接な関係が想起されるが、より

内陸に位置する木津川左岸北部に至ると、東四国地方との関係は間接的になるとみなせるのではないか。

②分布の特徴

こうした状況を踏まえると、淀川流域の古墳で東－西主軸の埋葬施設が採用された背景は各小地域によって異なり、淀川本流域の古墳では東四国地域との強い関係から採用されたが、その一方、北山城と南山城では、東四国地域の影響は少し薄まり、むしろ、同じ淀川流域に属するほかの小地域との交流からもたらされたと解釈したい。

改めて淀川本流、木津川、桂川、宇治川まで含めた「淀川流域」という視野から各古墳の規模、埋葬施設主軸方位及び時期を俯瞰すると、和田編年三～五期(広瀬編年3・4期)に多く見られる東－西主軸の埋葬施設は、北山城・桂川右岸の妙見山古墳、南山城・木津川左岸の八幡西車塚古墳、そして前期の淀川流域で最大規模となる北山城・黄金塚2号墳といった大型前方後円墳に採用されている。さらに付言すれば墳丘主軸との角度の振れは直交ないし斜行で、埋葬施設が北－南主軸で墳丘主軸と平行かほぼ平行する他の古墳とは一線を画する。こうした傾向は偶然の一致とは考えにくい。また特に山城地域では、これらの古墳の分布は巨椋池をとりまく「環巨椋池地帯」に集中する(第8図)。こうした分布状況から、淀川流域で大型古墳を築造したのは、淀川及びその支川における流通を担った各地域の最有力首長と考えられる。

東－西主軸の埋葬施設は、古墳編年では前期後葉から前期末葉(和田三～四期・広瀬3～4期)のきわめて短い期間に盛行するのも特徴的である。また小地域ごとに濃淡があり、木津川左岸北部の綴喜郡西部では特に北部の八幡市域の大型古墳で東－西主軸の採用率が高く、中期前葉(和田六期・広瀬5期)にまで及ぶ。一方、同様に良好な調査事例の多い桂川右岸の乙訓古墳群では、妙見山古墳や鳥居前古墳で東－西主軸が採用されるが、近接する時期に築造された長法寺南原古墳や百々池古墳では北－南主軸が採用され、地域内で両主軸の古墳が混在する。淀川右岸の三島古墳群も似た傾向を示し、島下郡では、茨木將軍山古墳と安威1号墳で東－西主軸が採用されるのに対し、島上郡では、古墳埋葬施設はいずれも北－南主軸を指向する。

こうした東－西主軸採用の濃淡をみると、一見、分布の中心は木津川左岸北部の綴喜古墳群ととらえたくもなる。しかし、墳丘規模が他地域よりも突出するわけではなく、他地域の規模が拮抗する大型古墳に影響力を行使する立場ではないと考えられる。そして、この葬送儀礼の故地である東四国地方から遠く離れる立地からも、やはり中心的存在とは位置づけにくい。

ある首長墓群に属する大型古墳は、同一首長墓群の既存の大型古墳に埋葬された先代以前の首長との系譜の連続性を意識して築造されたとみなされる。古墳で執行される葬送儀礼についても、前代からの継続性が尊重されたであろう。北山城の乙訓郡及び摂津の島上郡では東－西主軸の埋葬施設が妙見山古墳、鳥居前古墳、茨木將軍山古墳といった一部の古墳での限定的な採用に留まるが、両地域では、前期中葉(和田二期・広瀬2期)以前から前方後円墳の築造が開始され、北－南主軸の埋葬施設がすでに定着していたために、新来の葬送儀礼を象徴する東－西主軸の埋葬施設は広く採用されるに至らなかったのではないか。一方、前期中葉以前の前方後円墳の築造が未

確認で、前期後葉になってから大型古墳が築造される地域、すなわち木津川左岸北部の綴喜古墳群^(注30)では、埋葬施設主軸方位に強固な伝統がなかったため、東－西主軸を抵抗なく取り入れる余地があった。このように解釈すれば、この地域で東－西主軸の古墳が近接して密に分布することが合理的に説明できるであろう。

③埋葬施設の主軸と葬送儀礼

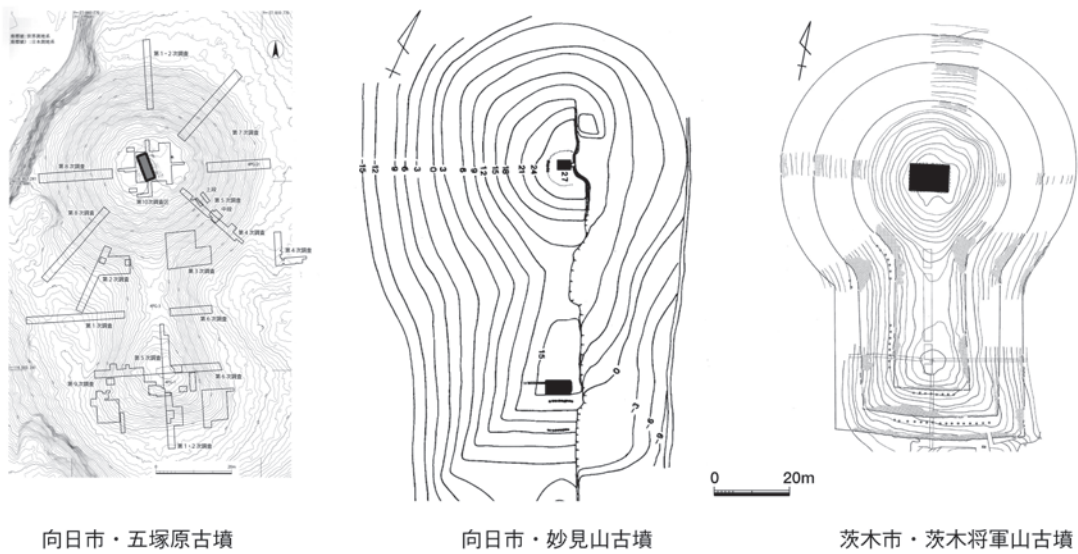
埋葬施設の主軸方位は、北條芳隆が説くように、^(注31)頭上の天体、特に太陽の運行を意識して定められたものと考えられる。本稿の対象地域では、北山城乙訓郡の鳥居前古墳埋葬施設主軸(東－西)が夏至の日の入り方向を意識して設定された可能性が北條によって指摘されていることはその一例である。そして、先述したとおり東－西主軸の埋葬施設は墳丘主軸と直交するものが多い。墳丘と埋葬施設の主軸方位は、葬送儀礼の実施される時刻の上空の天体が、墳丘上または墳丘下から葬送儀礼に参加する人々に与えるなんらかの視覚的な効果等を意識して選ばれた可能性がある^(注32)。

古墳で実施された儀礼には、墳丘の築造や埋葬施設の構築といった、遺構の形状や構造に強く現れ被葬者に近い人物だけではなく古墳造営に携わった広い階層の人々と共有されるようなものと、被葬者を納めた棺の搬入や器物の副葬といった、主に葬送儀礼に参加する人々だけが共有するものがある。さらに、各段階の儀礼は、開放空間である墳丘外から墳丘上や、閉鎖空間である埋葬施設内といった場所によって儀礼に参加可能な人数が増減する。さらに、被葬者との関係や集団内での地位の高低によって、各儀礼の参加者の顔ぶれは異なっていたであろう。本稿で取り上げる埋葬施設の主軸は、墳丘主軸との関係も伴いうるものであったことを考慮すると、埋葬施設内を視認するに至るほど密接に葬送儀礼に参加はしないが、墳丘上または墳丘下から距離において儀礼を見届けるような立場である人々の視線を意識して定められたものと考えられる。その一方で、埋葬施設における儀礼内容及び埋葬施設そのものの構造が他地域の古墳とは一致しなくても良かったようである。各古墳の埋葬施設をみると、竪穴式石槨と粘土槨が混在して統一性がなく、先述したとおり石槨石材も多様である。さらに、副葬品の組成にも特に共通性は見いだせないためである。

④複合的な首長間の関係

本稿で注目した埋葬施設の主軸方位は、こうした属性を共有する淀川流域の木津川左岸北部、桂川右岸を主とする淀川流域各地の大型古墳で実施された葬送儀礼に、埋葬施設や副葬品の共通性を求めるほど被葬者と密接な関係を持たないにしても、同族意識に近い「我々」意識を共有する他地域の有力者たちが参加していたことを示す考古学的な属性と考える。首長間の政治的な関係や、古墳で実施された葬送儀礼のあり方を示す重要な情報ではないだろうか。あくまで前・中期古墳のもつ多様な要素の中の一つに過ぎないことは事実であるが、ほかの属性も含めてみると、同時代の古墳だけではなく、前の世代の首長との関係をもうかがい知ることができそうである。

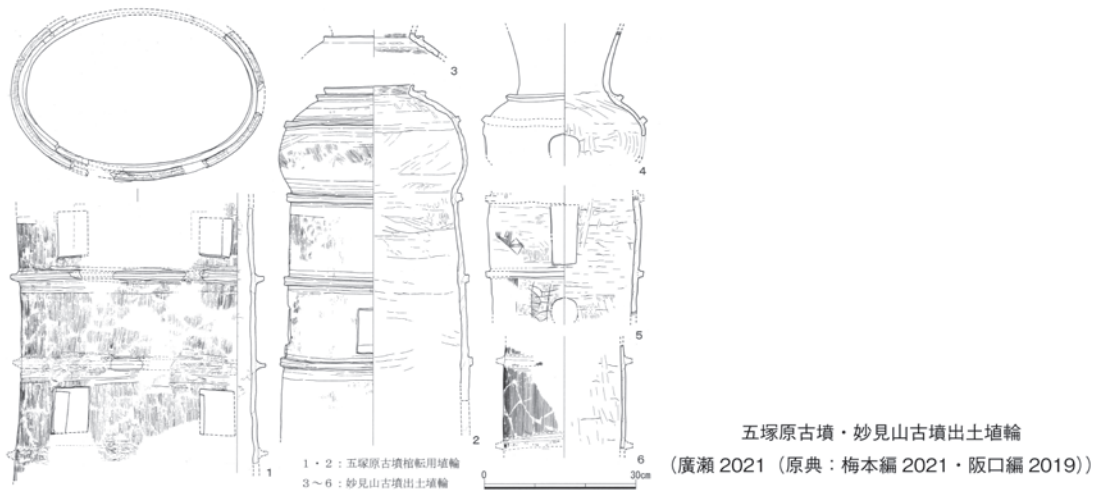
ケーススタディとして、向日市妙見山古墳を取り上げる。妙見山古墳は乙訓古墳群のうち、累代にわたって向日丘陵で築造された前方後円墳の一基で、五塚原古墳、元稲荷古墳、寺戸大塚古



向日市・五塚原古墳

向日市・妙見山古墳

茨木市・茨木將軍山古墳



五塚原古墳・妙見山古墳出土埴輪

(廣瀬 2021 (原典：梅本編 2021・阪口編 2019))

第10図 妙見山古墳の墳丘・埴輪と他古墳との対比

墳の被葬者に続く首長が埋葬されたと考えられる。この系譜の「初代」である五塚原古墳の発掘調査では、妙見山古墳に樹立された円筒・楕円筒埴輪を転用した埴輪棺がみつかり、妙見山古墳被葬者が五塚原古墳被葬者と親族関係を有していた可能性が指摘されている。また、後円部堅穴式石槨は、向日丘陵の他の古墳と類似する構築技法で、さらに石槨壁体高が高いという共通点があるとされる。向日丘陵累代首長墓に連なる古墳と評価できよう。その一方で、主軸が東－西方向で墳丘主軸と直交する妙見山古墳の埋葬施設は、五塚原古墳から元稲荷古墳、寺戸大塚古墳までの向日丘陵の三代にわたる首長墓で継承され、一本松塚古墳、長法寺南原古墳などの近隣の古墳でも採用された、北－南主軸で墳丘主軸と平行する埋葬施設のあり方とは一線を画しており、むしろ淀川流域に属する他地域との関係の強さを示している。妙見山古墳のこうした特徴は、被葬者である首長が、向日丘陵の累代の首長系譜に帰属するとともに、同時期の淀川流域の他の首長とも「我々」意識を共有する人物であったことを意味するのではないか。古墳時代前期の地域間関係や、双系制社会における首長権継承のあり方を示しうる重要なケースと考える。

7. おわりに

埋葬施設の主軸方位は、継続的に取り上げられてきた重要なテーマで、淀川流域の前期の特徴も知られてはいたが、東四国との対比といった視点から述べられることはあっても、淀川流域一帯における小地域ごとの様相の違いはこれまで検討されたことはなかったように思う。本稿の内容がこうした研究状況に寄与できれば幸いである。また、今回の検討対象は淀川流域に属する京都府南部とその周辺にとどまったが、丹波山地から丹後半島にまたがる京都府中・北部まで視野を広げると、また新たな知見が得られそうである。再論を期したい。

小論を執筆するきっかけとなったのは、木津川左岸北部に位置する綴喜古墳群の史跡指定を目的として令和3年度に開催した「木津川左岸首長墓群専門家会議」での議論である。席上では、杉原和雄、菱田哲郎、和田晴吾委員(敬称略、50音順)に指導助言を賜った。また、古墳編年における各古墳の位置付けは、同僚の桐井理揮、北山大熙の両氏から得た助言をもとにしている。末筆ながら、各氏に御礼を申し上げます。

(ふるかわ・たくみ＝京都府教育庁指導部文化財保護課主査)

注 17 廣瀬覚・若杉智宏 2005『将軍山古墳群 1』新修茨木市史資料編 8 茨木市

注 18 前掲(『京都府埋蔵文化財情報』第 143 号)注 7 と同じ

注 19 前掲注 7 と同じ

注 20 和田晴吾・吉井秀夫ほか 2013『久米田古墳群発掘調査報告 1』(岸和田市埋蔵文化財調査報告書 11) 岸和田市教育委員会

注 21 ただし、福永伸哉(前掲注 8 文献)が説くように、東四国地方と淀川流域の相互作用によって双方の葬制が影響を与えあった結果、淀川流域の古墳で広く東－西主軸の埋葬施設が採用されたとすれば、木津川流域のうち、特に左岸北部には、間接的とはいえ東四国地方との関係があるとも評価できる。

注 22 前掲注 11 と同じ

注 23 前掲注 8 と同じ

注 24 この分類は近藤義郎編 1992『前方後円墳集成』近畿編に依拠する。

注 25 天羽利夫・岡山真智子 1982「蘇我氏神社古墳調査報告」『徳島県博物館紀要』第 13 集

玉城一枝 1985「讃岐地方の前期古墳をめぐる二、三の問題」『末永雅雄先生米寿記念献呈論文集』乾 末永先生米寿記念会

注 26 高野陽子 2021「山城地域における椿井大塚山古墳出現前後の集落動態」『椿井大塚山古墳と久津川古墳群－南山城の古墳時代とヤマト王権－』雄山閣

桐井理揮 2022「木津川水運と東四国」『京都府埋蔵文化財情報』第 143 号 京都府埋蔵文化財調査研究センター

注 27 奈良拓弥 2010「竪穴式石槨の構造と使用石材からみた地域間関係」『日本考古学』第 29 号 日本考古学協会

注 28 富樫孝志 1990「石材からみた平尾城山古墳」『京都府平尾城山古墳』古代学研究所研究報告第 1 輯

注 29 前掲注 17 と 同じ

注 30 前掲注 1 と同じ

注 31 北條芳隆 2017『古墳の方位と太陽』同成社

注 32 北條芳隆は埋葬施設における被葬者頭位と墳丘との関係も検討しているが、本稿の対象範囲のうち、特に南山城の古墳は調査が古く頭位が判然としないので、その視点からの検討は実施しなかった。また、墳丘と埋葬施設主軸が直交ないし斜行するのは、むしろ、墳丘からの導線に対して無頓着な姿勢を反映していることも否定できない。実際、東四国の前期古墳は埋葬施設に対して墳丘主軸は斜行ないし直交する事例が多いが頭位との関係をみると際立った特徴は見いだせないと言う（前掲注 31）。墳丘主軸との振れに対して意識的でなかったとすると、葬送儀礼において墳丘下からの視点は考慮せず、墳丘上からの視点のみを意識していたことになる。

注 33 梅本康広編 2021『五塚原古墳の研究』向日丘陵古墳群調査研究報告第3冊（公財）向日市埋蔵文化財センター

阪口英毅編 2019『妙見山古墳 1967 年調査報告：「畿内に於ける前期古墳成立基盤の研究」の再検討』京都大学大学院文学研究科

廣瀬 覚 2021「五塚原古墳の葺石と埴輪」前掲『五塚原古墳の研究』

注 34 梅本康広 2015「妙見山古墳」『乙訓古墳群調査報告書』京都府教育委員会

注 35 上田直弥 2022『古墳時代の葬制秩序と政治権力』大阪大学出版会

畿内横穴式石室導入期における須恵器高杯の 器形変化とその背景(上)

野 島 悠 之

1. はじめに

拙稿(野島2021)では、土器の形状が消費地(古墳)からの要請を反映しうるとの前提に立ち、古墳における須恵器高杯の出土位置と脚部形状に対応関係があることを明らかにした。一方で、その歴史的背景については、不明瞭な部分が残った。そのため、今回は器形変化の背景を追求することを目的として、生産地(窯跡)と古墳両方を検討する。まずは、窯跡の資料を用いて重ね焼きのあり方を復元する。次に、古墳出土資料を扱い、須恵器高杯や他の脚付器種を再度論じる。土器の形状を生産地・消費地あわせて分析することで、須恵器の器形変化と畿内型横穴式石室の出現と普及の意義を結びつけて考えたい。

2. 研究史の整理と問題の所在

(1) 古墳時代の須恵器における脚付器種の性格

本論で高杯を対象とする理由は、先行研究において古墳における葬送儀礼を見るのに適した器種と評価されてきたためである。例えば、須恵器の編年研究を先導した田辺昭三はMT15型式期の高杯・甕の長大化は、葬祭供献用土器として急速に発達した結果生じた形態上の変化であることを指摘している(田辺1981)。また、寺前直人は須恵器の脚付器種には墳丘規模や副葬品との対応関係がみられ、土器による古墳秩序は土器の器高に反映されると指摘する(寺前2005)。さらに、藤原学は墳丘裾や墳丘上の土器は参列者に見せるためのもので、被葬者の地位を継承する次世代にとって重要なものであると指摘した。そのうえで、高杯は古墳での儀礼で明確な機能を有し、儀礼にかかわる人間の意識の変化を読み取るのにふさわしい土器と評価した(藤原1991)。これらの研究でも述べられているように、脚付器種は数ある須恵器の中でも、特に消費地を意識して製作された可能性が高いといえるだろう。

拙稿(野島2021)では須恵器高杯の脚部に着目し、出土位置と脚部の形状が対応関係にあることを明らかにした。その中でも、外反形態の脚部は横穴式石室の礫敷床面に対応した形状である可能性を指摘した。ただし、同時期の生産地(窯跡)や木棺直葬墓との比較は十分にできず、歴史的背景が詰め切れなかった点が課題として残った。そのため、再度須恵器高杯の器形に注目して分析を行いたい。

須恵器高杯の器形に関する研究史は、前稿(野島2021)にてまとめているため、ここでは割愛する。概略を述べると、MT15型式期前後における脚付器種の器形は①長脚化、②段数、③透かし穴を基準として、画期が設定されている。その背景には横穴式石室の導入に伴い、土器を正位置

で置いた立体的な空間利用が可能となり、高杯が長脚化したと指摘されてきた(藤原1985)。

(2)生産地における重ね焼きの検討

土器の形状はもちろん生産地の動向にも左右される。須恵器は成形～乾燥～窯詰め・焼成～選別の過程を経て搬出される。筆者は生産地において須恵器の器形を最も規定しうるのは、窯詰め段階であると考えている。それは、重ね焼きの際に必然的にはかの個体と接触するため、融着防止の工夫を施す必要があるからだ。

重ね焼きの検討を行う際、先行研究では器面の自然釉や、他個体の接触痕跡、外面の黒化範囲を用いてきた。例えば、8～9世紀の杯Bを対象としているが、北野(1988)では杯蓋・杯身に認められる降灰状況や黒化の範囲から、杯の重ね焼きパターンを分類している。また、10世紀末～11世紀初頭の京都府亀岡市西山1-1号窯から出土した鉢・杯・碗の口縁部外面には黒色に変化している箇所が認められる(樋口2020)。樋口は、黒色範囲は煤が付着した、あるいは焼きむらが発生し、製品同士が重ならない部分が変色したものと想定している。

古墳時代須恵器の分析事例を挙げると、高杯の内外面にある、色調の異なる帯状の部分から、柱状の重ね焼き方法を復元できる(中村1980)、千葉県木更津市庚申塚A遺跡の有蓋高杯は、脚部内外面や杯部外面に降灰が認められ、杯の受け部外周縁には降灰が認められないことから、逆位で(天地を逆転させて)焼成された可能性が高い(當眞2002)などの指摘がある。

(3)古墳出土の須恵器について

古墳時代中期～後期において、古墳から出土した須恵器は埋葬施設ごとに検討されてきた。例えば、木棺直葬墓では、須恵器は墳丘裾・墳丘上から墓壙埋土、棺小口部分へと移動するが、一貫して現世での食事の拒否、死穢の再来を阻止する意図が保持された(楠元1992)、須恵器の棺への副葬が繰り返される中で、定型化した行動様式が成立した(北山2018)などの指摘がなされた。

横穴式石室に関しては、横穴式石室を中心とする後期古墳では、死の穢れを埋葬施設に閉じ込める「コトドワタシ」が行われていたとの指摘がある(白石1975)。土生田純之は畿内型横穴式石室が成立段階から須恵器の主体部内埋納を行っていた点に注目し、畿内型の横穴式石室を「新しい葬送儀礼を本来的に内在した初めての墓制」と評価した(土生田1994)。

近年、森本徹は横穴式石室から出土した土器の組成を類型化し、5世紀後半・6世紀後半に、大和川流域に確認される「有蓋高坏主体型」、6世紀前半～中頃を中心に、淀川流域にみられる「蓋坏主体型」に整理した(森本2012a)。筆者も、須恵器高杯の出土位置が、墳丘・周溝から横穴式石室内に移動するにしたがって、脚部の形状が変化する傾向を指摘した(野島2021)ものの、横穴式石室と木棺直葬墓の関係性については言及しなかった。

(4)問題の所在

①須恵器の重ね焼きについて

先行研究では、須恵器の重ね焼きについて自然釉の付着や他個体の融着痕跡、器面の黒化範囲に注目されてきた。確かに、それらの痕跡は重ね焼きの方法を反映した、決定的な証拠である。しかし、そもそも重ね焼きは、一度の焼成で大量に焼き上げることを目的とする。これに鑑みれ

ば、失敗品の増加、すなわち融着や過度な焼け歪みはできる限り防ぎたいと想定できる。

そのため、重ね焼きの検討は須恵器自体の痕跡に加えて、須恵器の形状、特に他個体と接触する部位と結びつけて考える必要があるだろう。

②古墳出土の須恵器について

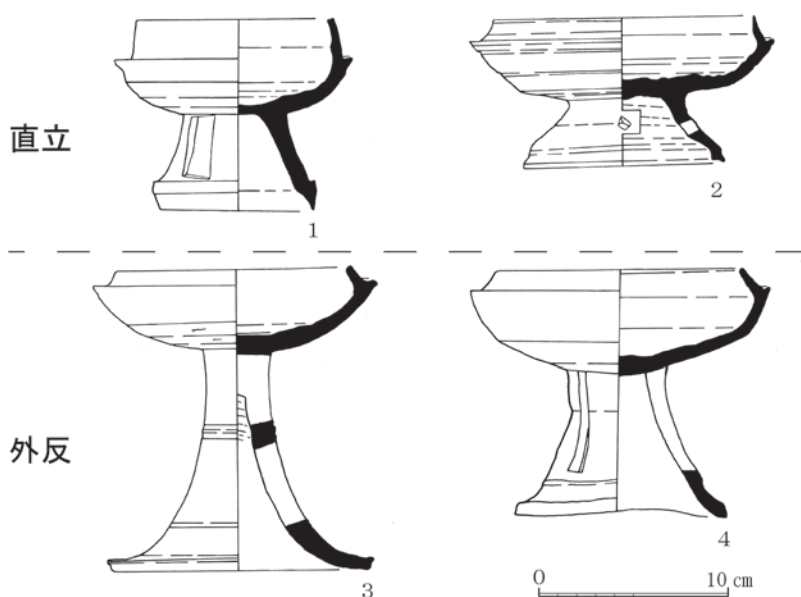
古墳出土の須恵器については、倭在来の木棺直葬墓と、新来の横穴式石室に分かれて研究が進展した。しかし、両者を比較した研究も進められている。例えば、小林行雄は、竪穴式系統の埋葬では棺とともに土師器が納められるのはまれで、土器は古墳の表面に並べられたことから、供物をささげた墓前祭がなされたのに対して、横穴式石室では石室内部に土器を置く場所が移動し、死後の食物へと供物の性格が変化した点を指摘した(小林1949)。乙訓地域の検討では、木棺直葬墓、横穴式石室墳両者とも須恵器偏重であるが、その中でも、被葬者の階層に応じた脚付器種の選択が存在したと述べられている(寺前2005)。北山峰生は5世紀までの倭の在来文化(木棺直葬墓における土器の副葬行為)と横穴式石室における葬送儀礼が相互作用を及ぼし、6世紀の古墳文化を形作ると指摘している(北山2020)。これらの研究が示すように、木棺直葬墓と横穴式石室、両者の関係性を積極的に分析することによって、さらに具体的な歴史像が明らかになるだろう。

3. 分析の前提

(1)検討資料の整理

近畿圏を対象として、TK208～TK209型式期の須恵器の脚付器種を中心にしつつ、必要に応じて杯などそれ以外の器種も扱う。生産地に関しては、窯跡や灰原だけでなく、窯周辺の溝土坑出土の個体も援用する。消費地については古墳出土の資料を扱う。埋葬主体部については木棺直葬墓・横穴式石室を対象とする。このうち、木棺直葬墓については埋葬施設が削平されているものでも、石材抜き取り痕など横穴式石室と推定できる根拠が認められない場合は、検討対象に加えた。

出土位置は墳丘・造出・周溝、木棺直葬墓の墓壇埋土・棺外・棺内、横穴式石室の玄室・羨道、前庭部・墓道、墳丘内と、原位置不明に分類する。このうち、原位置不明は、



1：京都府城陽市赤塚古墳 2：大阪府交野市倉治1号墳
3：京都府京田辺市堀切1号墳 4：奈良県五條市南阿田大塚山古墳

第1図 須恵器高杯脚部分類案

報告書に土器出土場所の記載がないもの、盗掘等により原位置から移動していると判断できるものとする。

(2) 高杯脚部の分類と分析の方針

野島(2021)の分類を適用し、須恵器高杯の脚部を直立形態と外反形態の2種に大別する(第1図)。改めて両者の区分を整理すると、直立形態とは、ハの字状に直線的に裾が広がり、端部が内巻きになる、あるいはまっすぐに立ち上がるもの、外反形態とは、ラッパ状に裾が広がり、脚部が外向きに広がるものである。

須恵器の形状を規定するのは、時期の違いや系譜関係、工人の移動など、様々な可能性が想定できる。その中で、今回は生産地での製作技法と消費地からの要請という、2つの可能性に注目したい。繰り返しになるが、須恵器生産時において、器形を最も規定しうるのは、窯詰め・焼成段階と考えている。それは、重ね焼きの際に必ず他の個体や窯道具と接触させざるを得ないからだ。そのため、窯跡やそれに類する遺構から出土した、重ね焼きの痕跡を示す資料に着目したい。

一方で、先行研究では古墳出土の須恵器の中には古墳における葬送儀礼用に、意識して生産されたものも含まれる可能性が提示された。例えば、石井(2007)では、同一の集団によって一度に生産された須恵器が、特定の古墳に供給される関係性を示し、古墳からの需要が須恵器を焼成する契機の一つとなりうると述べている。

また、巨勢山古墳群の事例からは、製作時のセット関係が保持された、すなわち他と区別して管理された須恵器の存在が示されているが、これらは古墳造営者によって入手されたのち、すぐに副葬されたものと想定されている(木許2009)。近年では、岩越陽平が須恵器長脚一段の有蓋高杯を集成し、古墳の葬送儀礼における重要な器種として、各地の首長層に受容されたと評価した(岩越2022)。

これらの須恵器が古墳からの需要に応じて生産された側面も認めるならば、葬送儀礼において須恵器が用いられる場面もあらかじめ決められていたと考えられないだろうか。すなわち須恵器と埋葬施設の関係性が器形を規定すると考える。そのため、須恵器の形と出土遺構との関係を検討したい。本論ではまず、生産地において、直立形態、外反形態それぞれの重ね焼き方法を検討する。次に消費地の様相を検討する。両者の成果を合わせることで、高杯の器形変化の実態とその背景を考えてみたい。

4. 生産地出土資料の検討

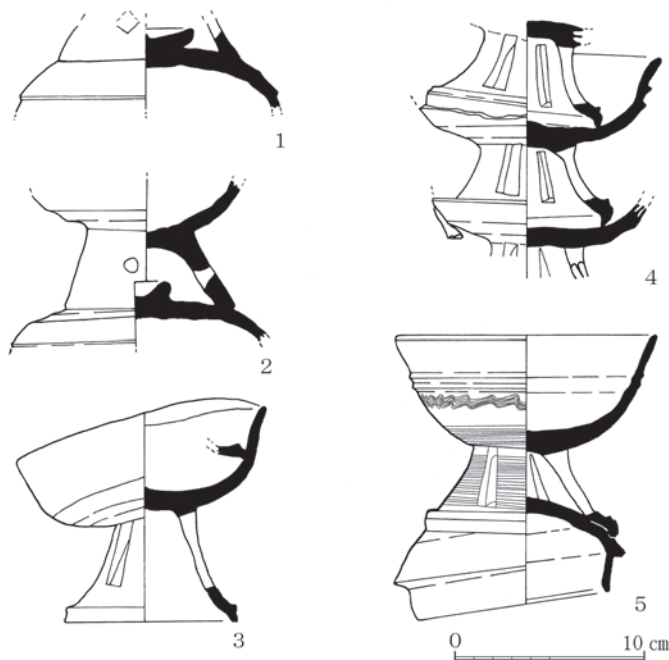
(1) 分析の方針(須恵器の重ね焼きについて)

高杯の焼成方法については、中村浩(1980)の検討によると、須恵器の内外面に色調の異なる帯状の部分があり、それによって柱状に重ね焼く状態を復元できるといわれている。しかし、重ね焼きの痕跡が実測図や写真等で示されていないこと、重ね焼きの模式図が5世紀の有蓋高杯と8世紀の蓋杯の2種類しかなく、非常に限定的な復元であることが指摘できる。そのため、私は重ね焼きの痕跡を実測図や写真で示しつつ、近畿圏の窯跡資料を主な対象として、検討を進める。

(2) 直立形態の脚部について

① 有蓋高杯の検討

大阪府富田林市中佐備窯跡出土の有蓋高杯では、蓋の中心と脚部の中心が重なるように融着している(第2図1・2)。これにより、蓋と高杯をセットにして、柱状に重ね、正位で焼成していたと想定される。この焼成法は消費地資料でも裏付けられ、有蓋高杯の蓋につまみを囲むように黒円状の痕跡が認められる(第3図)。重ね焼きの際、上にのせられた脚部と蓋が密着したことで、その部分のみ自然釉が付着しなかったのであろう。

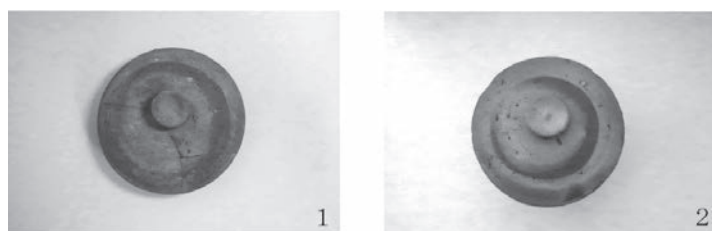


1・2 大阪府富田林市中佐備窯灰原
3 堺市光明池26号窯第1B区(埋没谷内)
4・5 堺市小坂遺跡灰原

第2図 須恵器高杯の重ね焼き資料

② 無蓋高杯の検討

窯跡出土の資料では、杯部内面に上の個体の脚部が付着するものが認められ、堺市小坂遺跡では複数個体が連なるものも出土している(第2図4・5)。積み重ねた段数などは不明だが、無蓋高杯も有蓋高杯と同様に、柱状に積み重ねた状態で焼成したと考えられる。



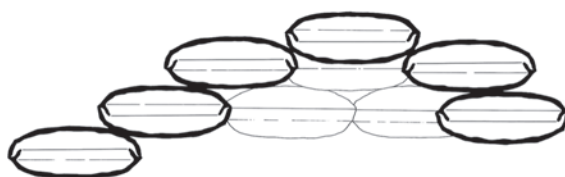
1 京都府城陽市赤塚古墳
2 滋賀県高島市日置前遺跡王塚3号墳

第3図 須恵器有蓋高杯にみられる重ね焼き痕(縮尺不同)

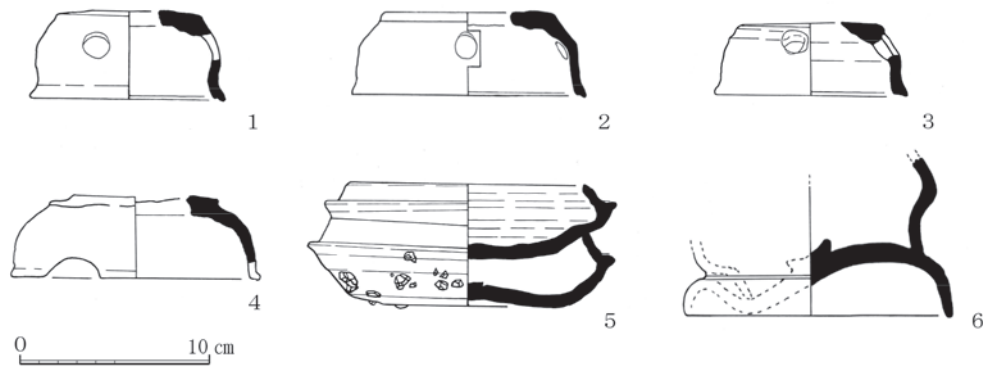
③ 他器種の検討

まずは杯について検討する。大阪府豊中市桜井谷2-23号窯では、須恵器杯が窯詰めされた状態で検出された(福永・北條編1991: pp.15~16、第4図)。注目できるポイントとしては、蓋の口縁部と杯身の受け部を組みあわせ、1つのセットにして、それらのセットを互い違いに重ねている点である。また、大阪府堺市日置荘遺跡では、杯身のみを重ねて焼成している(第5図-5)。この際、口縁部の端に別個体の底部を設置させ、接触する部分を最小限に留めている。

その他の器種についても見てみよう。大阪府堺市陶器千塚・陶器遺跡では台形土製品が出土している(第5図1~4)。これら台形土製品の機能として、飯塚信幸は窯道具(焼台)・乾燥台・シッタを想定している(飯塚2022)。



第4図 桜井谷2-23号窯窯詰め復元模式図



1：大阪府堺市陶器千塚・陶器遺跡5区包含層 2：大阪府堺市陶器千塚・陶器遺跡1a区溝1-59
3：大阪府堺市陶器千塚・陶器遺跡5区SD341 4：大阪府堺市陶器千塚・陶器遺跡2区地山直上
5：大阪府堺市日置荘遺跡土坑L35 6：滋賀県野洲市小山遺跡灰原

第5図 他器種にみられる融着防止の工夫

陶器千塚・陶器遺跡例に関して、飯塚は灰白色かつ焼成不良であることから、窯道具以外の可能性を想定している。これらの台形土製品に関して、注目すべき点は、天井部(台形の短辺)の中央に円孔をあけていることだ。これは、須恵器と接する面積を減らすためと考えられる。また、滋賀県野洲市小山遺跡では須恵器窯の灰原が検出されている。出土遺物からは、有蓋高杯の蓋の上に、短頸壺を逆位で(口縁部を下にして)置いていた状況が復元できる(第5図6)。

このようにみえてくると、須恵器を乾燥、あるいは焼成する際、器種にかかわらず器面と製品が接触する面積を極力減らしている。その背景としては、乾燥時の接着や焼成失敗をできる限り抑え、廃棄する品を減らす目的があったと捉えられる。つまり、直立形態の高杯脚部が窯道具としての側面を担った可能性がある。

(3) 外反形態の脚部について

外反形態の脚部を持つ高杯については、管見の限りでは降灰により他個体との位置関係がわかる、あるいは融着している資料は確認できなかった。筆者の力不足もあり、窯詰め具体像は不明瞭な点が残る。ただし、第1図-3などを参照すると、外反形態の個体は脚部が内側に大きく曲がり、ハの字形に外反している。仮に、柱状に積み重ね焼きを仮定すると、他個体と接触する面積は広がり、融着のリスクは上がると想定できる。また、筆者は外反形態の脚部は器形の長大化に対応する点を指摘している(野島2021)。長脚化・大型化した器形は重心が不安定で転倒しやすく、何段にも積み重ねるには適さないであろう。具体的な内容は明らかでないが、「他個体と重なる面積を減らして融着を防ぐ」という手法から、窯内の配置法を転換した可能性も想定できよう。

(4) 小結

直立形態の脚部は設置面積を減らし、融着を防ぐために採用された可能性が高い。このような接触面積を減らす意識は、高杯に限らず器種横断的に認められる。外反形態の脚部については、従来の重ね焼きとは異なる配置が志向された可能性も、十分想定できる。

特に、MT15型式期以降は群集墳が拡大するに伴い、須恵器の需要は高まったと考えられ(田

辺1981)、量の確保や生産効率の向上が求められるようになった。その中には、焼成失敗品を減らすことも選択肢に入っていただろう。しかし、従来行っていた焼成上の工夫を捨て、融着のリスクを多分に含む器形を出現させたのは、このような生産状況に逆行するようにもみえる。この背景を検討するため、古墳出土資料を検討したい。

5. 古墳出土資料の検討

(1) 有蓋高杯について(第6図・第7図)

①横穴式石室出土個体の検討

柏原市高井田山古墳(TK23・47型式期)の段階では有蓋高杯はすべての個体が直立形態である。また、栗東市和田2号墳(TK10型式期)の段階までは墳丘や墓道からの出土例もあり、それらは直立形態である。外反形態の個体は、栗東市和田1号墳(MT15型式期)から出現しており、大津市大通寺C1号墳、向日市物集女車塚古墳などTK10型式期の古墳には外反形態の個体が100%を占めるようになる。TK43型式期からは、外反形態が100%を占める古墳が増加し、具体例として斑鳩町藤ノ木古墳、神戸市狩口谷きつね塚古墳が挙げられる。しかし、葛城市寺口忍海E12号墳(TK217型式期)に至るまで、直立形態もある程度残存する。

②木棺直葬墓出土個体の検討

TK208型式期では直立形態を主体としつつ、一部には外反形態のものがある。例えば、三木市高木7号墳、京都市岩倉幡枝2号墳などではすべての個体が直立形態を呈しているのに対して、東大阪市みかん山9号墳では40%、向日市山畑6号墳では67%を外反形態が占めるなど、外反形態の比率が高いものもある。

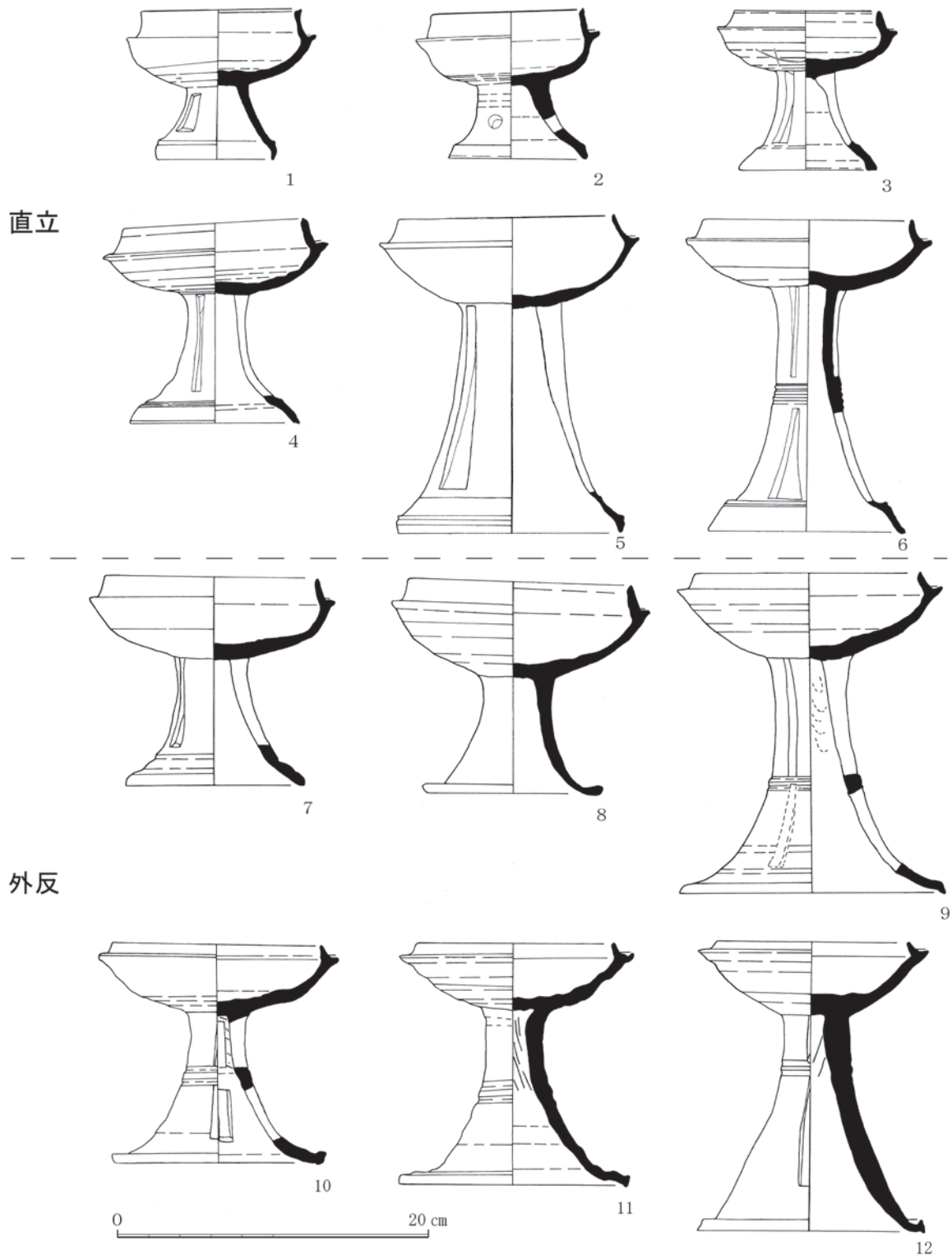
TK23・47～TK10型式期には、直立形態を呈する個体の比率が非常に高い。例えば、高島市日置前遺跡王塚3号墳、城陽市赤塚古墳、天理市赤坂9号墳(いずれもTK23・47型式期)、南丹市塩谷南古墳(MT15型式期)などではすべての個体が直立形態を呈する。

外反形態が復活するのはTK10型式期以降になる。例えば、福知山市池の奥3号墳では副室から外反形態の高杯が3個体出土している。当該期以降、外反形態の占める割合は高まり、豊岡市岩井枯木1号墳(TK209型式期)などではすべての個体が外反形態を呈する。この背景については、第6章にて後述する。

③小結

TK208型式期には直立形態の脚部と外反形態の脚部が混在していたのに対し、TK23・47型式期ではほぼ直立形態の脚部で統一されている。田辺昭三はTK208型式期～TK23・47型式期には、須恵器として固有の性格を持つようになり、定型化を果たした(田辺1981)と指摘しているが、古墳出土の高杯については、TK23・47型式期に直立形態の脚部で統一がなされたと考えられる。これは、当該期に墳丘・造出で用いる前提の形状に定型化がなされ、鈎針状の屈曲した部分を土で埋めて固定する使用法が確立したものと想定している。

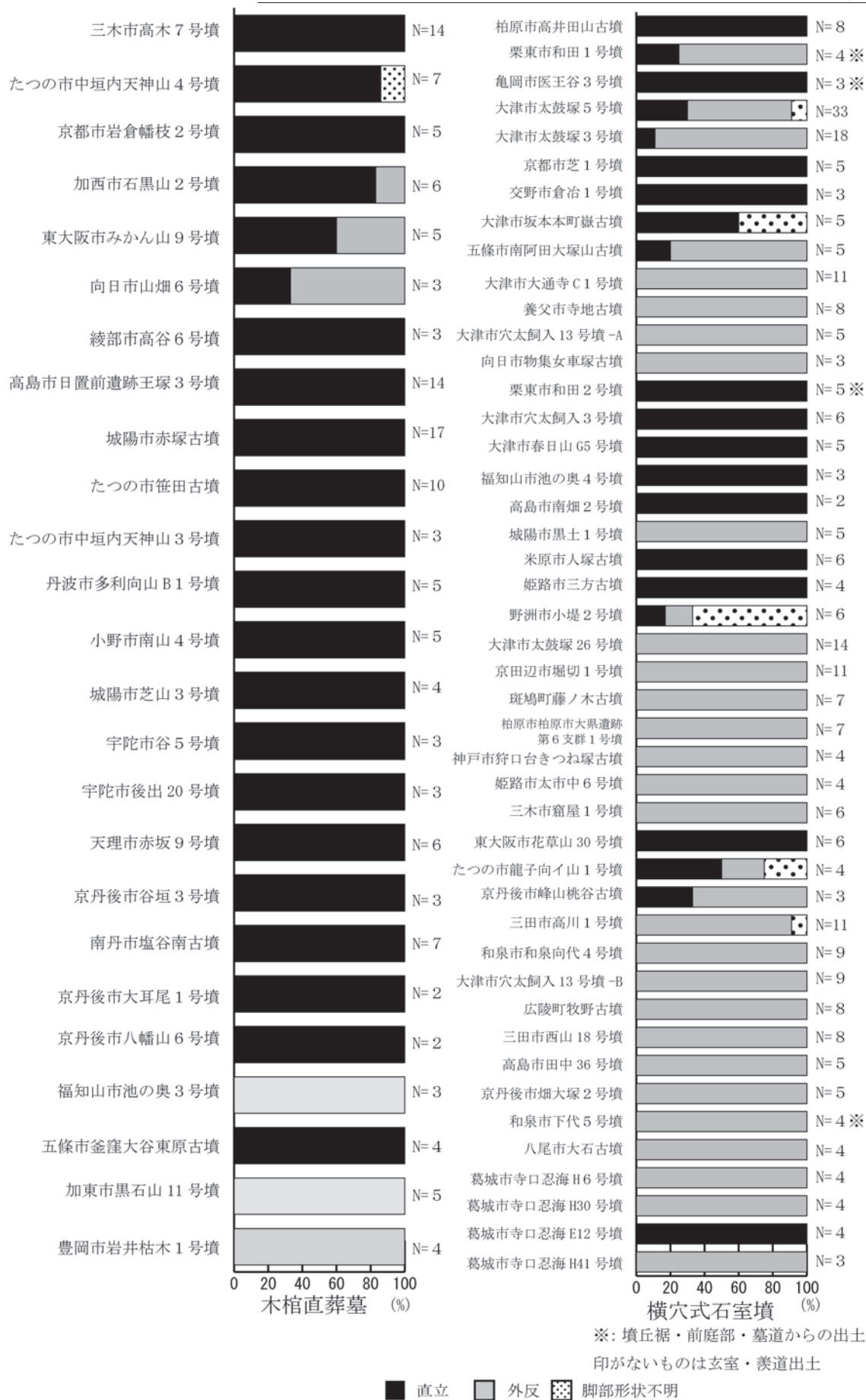
外反形態の脚部が再度復活するのはMT15型式期であるが、個体数が増加するのはTK10型式



- 1 : 滋賀県高島市日置前遺跡王塚3号墳 (周溝) 2 : 兵庫県たつの市中垣内天神山4号墳 (墳丘)
 3 : 京都府京都市芝1号墳 (玄室) 4 : 奈良県五條市釜窪大谷東原古墳西主体部 (棺内)
 5 : 和歌山県和歌山市井辺八幡山古墳 (西造出) 6 : 滋賀県野洲市小堤2号墳 (玄室)
 7 : 奈良県五條市南阿田大塚山古墳 (羨道) 8 : 京都府福知山市池の奥3号墳 (埋葬主体部内副室)
 9 : 京都府城陽市黒土1号墳 (玄室) 10 : 兵庫県神戸市狩口台きつね塚古墳 (玄室)
 11 : 兵庫県三田市西山18号墳 (玄室) 12 : 大阪府和泉市下代5号墳 (墓道)

第6図 須恵器有蓋高杯の諸例 (上半: 直立形態 下半: 外反形態)

畿内横穴式石室導入期における須恵器高杯の器形変化とその背景(上)



第 7 図 有蓋高杯の脚部形態の比率

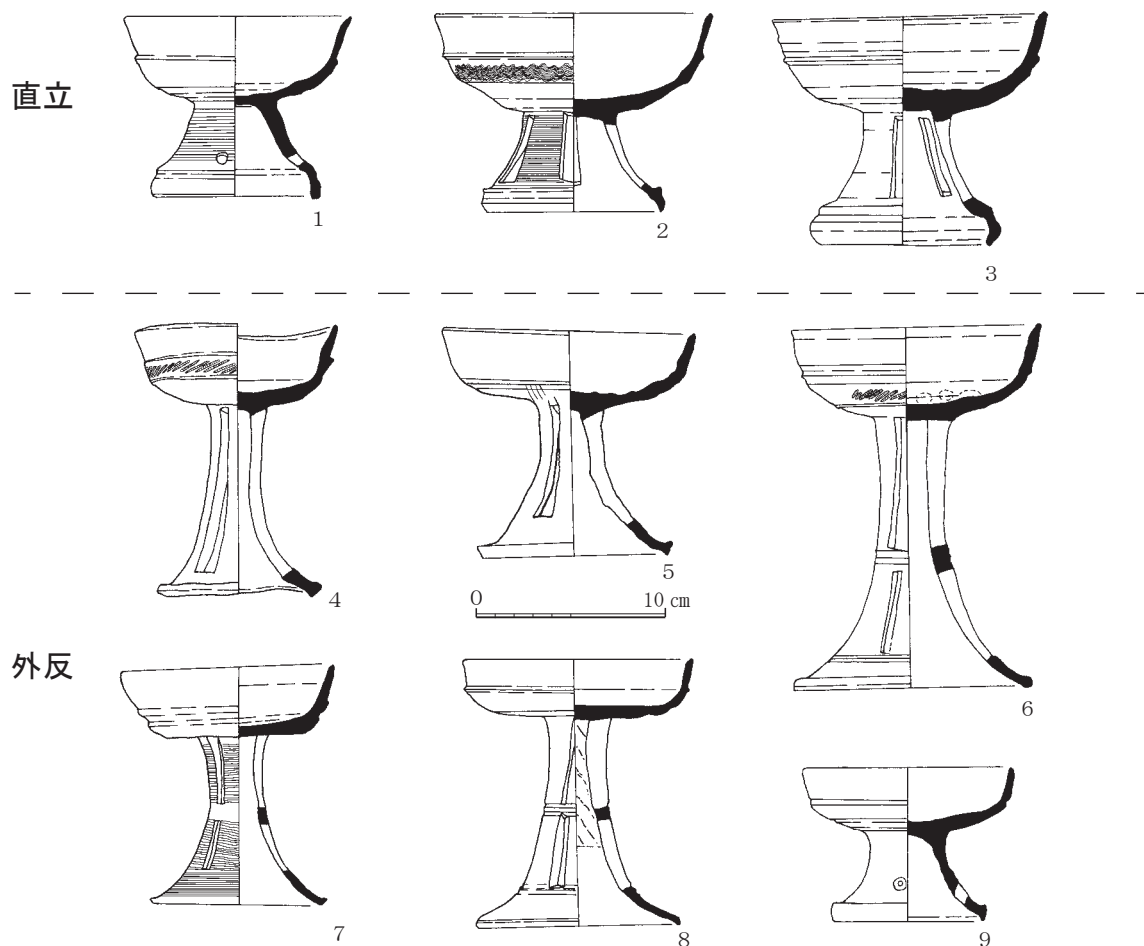
期以降になる。このように、外反形態が出現する背景としては、拙稿(野島2021)でも述べたように、横穴式石室の導入に伴い、須恵器が横穴式石室内に置かれるようになったためと考える。礫敷の床面に置きやすいように調整した、あるいは長大化した器形を支えるために、床との設置面積を拡大したと想定できる。

注目すべきは、TK10型式期以降、木棺直葬墓にも外反形態のものが散見されるようになることであり、詳細は後述するが、横穴式石室から木棺直葬墓に情報伝達がなされたものと考えている。

(2) 無蓋高杯について(第8図・第9図)

① 横穴式石室出土個体の検討

横穴式石室出土の資料では、高取町市尾墓山古墳(MT15型式期)の段階から、葛城市寺口忍海



- 1：奈良県天理市五合瀬古墳(周溝) 2：奈良県御所市巨勢山321号墳(周溝)
 3：京都府京丹後市谷垣3号墳(墓壙上面) 4：大阪府和泉市マイ山古墳第1主体部(棺外)
 5：滋賀県大津市福王子17号墳(玄室・羨道) 6：京都府城陽市黒土1号墳(玄室)
 7：滋賀県米原市黄牛塚古墳(玄室) 8：奈良県広陵町牧野古墳(羨道)
 9：奈良県葛城市寺口忍海H41号墳(玄室)

第8図 須恵器有蓋高杯の諸例(1～3：直立形態 4～9：外反形態)

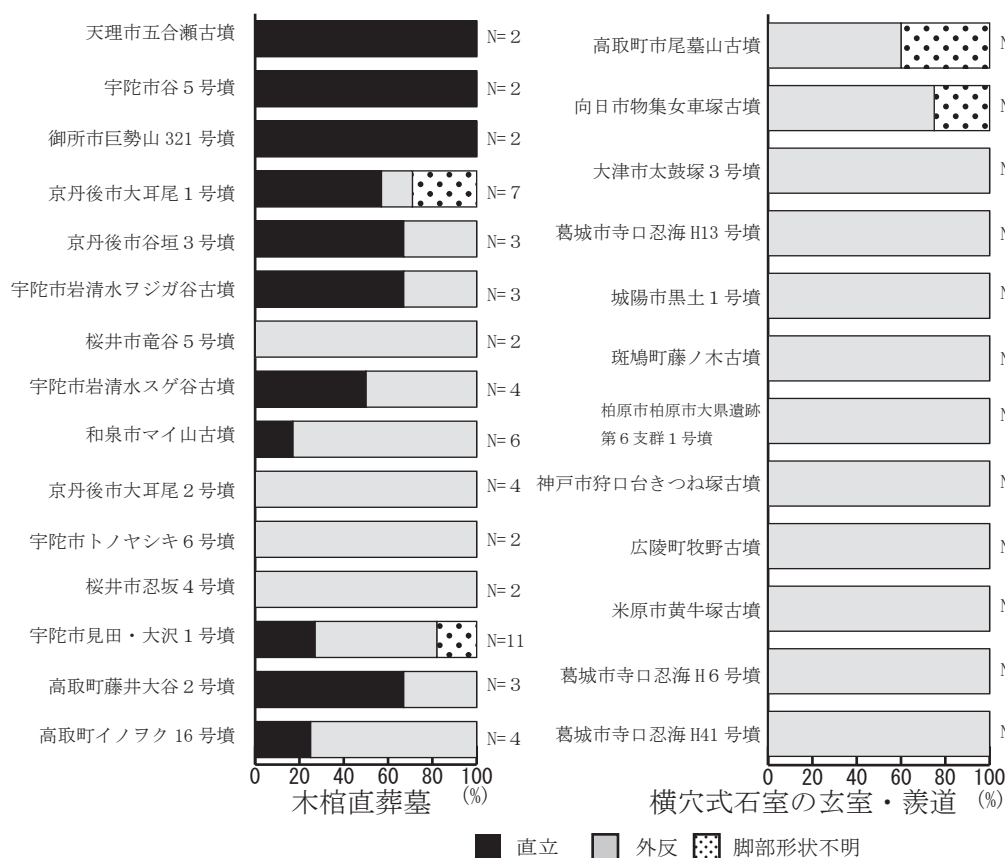
H41号墳(TK217型式期)に至るまで、継続的に外反形態の個体が出土している。脚部が破損して形状不明のものを除き、すべての個体が外反形態で占められている。

②木棺直葬墓出土個体の検討

TK23・47型式期の古墳では、有蓋高杯同様に、すべての個体が直立形態の脚部を持つ(例：宇陀市谷5号墳、御所市巨勢山321号墳)。MT15型式期以降、外反形態の脚部を持つ高杯が出現し、直立形態の高杯と併存する。MT15型式期に属する京都府京丹後市大耳尾1号墳、同谷垣3号墳、奈良県宇陀市石清水ワジガ谷古墳では直立形態が60%以上を占め、主体的であるが、外反形態の脚部を持つ個体も出土している。一方で、TK10型式期以降、外反形態の比率が高まる。例えば、奈良県桜井市竜谷5号墳、大阪府和泉市マイ山古墳(いずれもTK10型式期)ではそれぞれ100%、83%を外反形態の個体が占める。高取町藤井大谷2号墳(TK10型式期)などの例外はあるものの、イノラク16号墳(TK43型式期)まで、外反形態が主体を占める傾向は続く。

③小結

TK23・47型式期では、直立形態の脚部が主体となるが、MT15型式期以降、外反形態が出現する。また、TK10型式以降には木棺直葬墓からも外反形態の個体が出土している。この傾向は有蓋高杯と同じである。先述のように、外反形態の脚部は横穴式石室への礫敷床面の採用や、墓室空間の拡大により、器形が長大化して倒れやすくなったことへの対応として採用された可能性を指摘した。つまり、当該期に木棺直葬墓から出土する背景を探るには、土器の出土位置に注



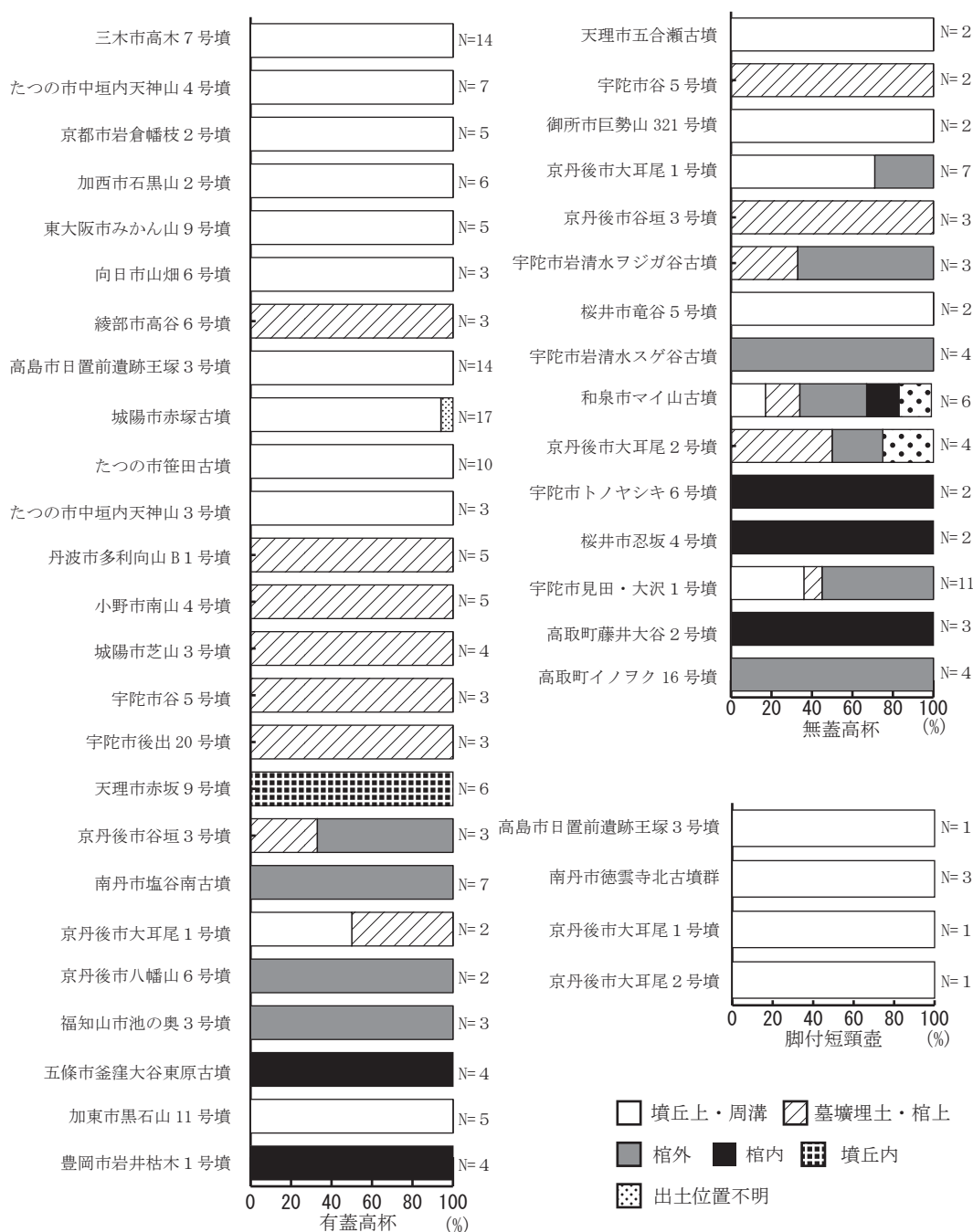
第9図 無蓋高杯の脚部形態の比率

目するべきと考えて、須恵器高杯の出土位置について検討を行いたい。

(3) 木棺直葬墓における、須恵器高杯出土位置の変遷

① 出土位置の変遷(第10図)

本来であれば、高杯に限らず、良好に遺存している木棺直葬墓を詳細に検討し、全体像を復元するのが望ましい方向性である。しかし、今回は筆者の力不足で、須恵器高杯が出土している木



第 10 図 木棺直葬墓における須恵器脚付器種の出土位置の変遷

棺直墓葬を扱った。

有蓋高杯・無蓋高杯ともに、TK23・47型式期までは墳丘・周溝や墓壇埋土・棺上から出土している。例えば、城陽市赤塚古墳では周溝・造出から高杯など須恵器がまとまって検出されている(第11図)。

一方で、MT15型式期以降、棺外からの検出例が認められる。例TK10型式期では高杯は棺内に納められている事例が増加する。つまり、6世紀初頭以降、須恵器高杯の位置は墳丘・周溝や墓壇埋土から棺外、棺内へと徐々に木棺近くへ移動しているのだ。

②土器出土位置移動の背景

木棺直墓葬から、外反形態の高杯が出土していることを考慮すると、当該期に木棺直墓葬に対し、木棺のそばに須恵器を配置する葬送の在り方が伝達された可能性が指摘できる。

これを補強する根拠として、当該期の木棺直墓葬からは、長大化した須恵器のほかに、馬具や耳環が出土する事例が存在すること、当該期の有力な前方後円墳に木棺直墓葬と横穴式石室が共に採用される事例がある。このうち、前者は、宇治市坊主山1号墳(MT15型式期、前方後円、45m)、同2号墳東棺(TK10型式期、円、25mか?)、京丹後市大耳尾2号墳第1主体部(TK10型式期、円、23.1m)、桜井市忍坂4号墳第2次埋葬施設(TK10型式期、円、14m)などがある。

後者の具体例として、川西市勝福寺古墳(TK10型式期、前方後円、41m)や長岡京市井ノ内稲荷塚古墳(TK10型式期、前方後円、46m)が挙げられる。これらの中心的な埋葬主体部は畿内型横穴式石室であるものの、従属的な埋葬施設として木棺直墓葬を採用している。

これらの根拠から、私は畿内型横穴式石室の導入・普及が、土器様式やその配置、副葬品の内容など多岐にわたり、木棺直墓葬にも影響を及ぼした可能性が高いと考えている。もちろん、木棺直墓葬の中にも倭在来の葬送を色濃く残すものは認められる。むしろ、横穴式石室や葬送儀礼を構成する多くの要素のうち、副葬品や土器の配置などを部分的に受容したと考えている。

(のじま・はるゆき＝当調査研究センター調査課調査員)



左：造出西斜面（東から） 右：造出有蓋高杯出土状況（南から）

第11図 城陽市赤塚古墳須恵器出土状況（城陽市教育委員会より提供）

(参考文献)

- 飯塚信幸 2022「古墳時代台形土製品の基礎的検討」『古代学研究会』10月例会発表要旨 古代学研究会
- 石井智大 2007「古墳への須恵器の供給とその背景」『勝福寺古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告第4冊 大阪大学勝福寺古墳発掘調査団
- 岩越陽平 2022「奈良県五條市の事例にみる古墳時代後期の須恵器生産地と周辺古墳の関係および須恵器有蓋高杯の位置付けについて」『考古学研究会関西例会』第233回奈良例会発表要旨
- 北野博司 1988「重ね焼きの観察」『辰口西部遺跡群』Ⅰ 石川県立埋蔵文化財センター
- 北山峰生 2018「近畿－木棺直葬墓の須恵器－」『季刊考古学』第142号 雄山閣
- 北山峰生 2020「横穴式石室定着前後の土器副葬」『横穴式石室の研究』同成社
- 木許 守 2009「群集墳被葬者層における須恵器の流通について」『考古学研究』第56巻第3号 考古学研究会
- 楠元哲夫 1992「六文銭－古墳における須恵器祭式成立の意義とその背景－」『考古学与生活文化』同志社大学考古学シリーズⅤ 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 小林行雄 1949「黄泉戸喫」『考古学集刊』第2冊 東京考古学界
- 白石太一郎 1975「ことどわたし考－横穴式石室墳の埋葬儀礼をめぐる－」『橿原考古学研究所論集』創立35周年記念 吉川弘文館
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 寺前直人 2005「後期古墳における土器副葬の階層性」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告第3冊 大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団
- 當眞嗣史 2002「須恵器有蓋高杯重ね焼きについての一事例－庚申塚A遺跡出土須恵器有蓋高杯の考察から－」『君津郡市文化財センター研究紀要』Ⅸ 財団法人君津郡市文化財センター
- 中村 浩 1980『須恵器』考古学ライブラリー5 ニュー・サイエンス社
- 野島悠之 2021「横穴式石室導入前後の須恵器高杯に関する一考察」『京都府埋蔵文化財情報』第141号 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 土生田純之 1994「畿内型石室の成立と伝播」『ヤマト王権と交流の諸相』古代王権と交流5 名著出版
- 樋口太地 2020「西山1－1号窯における窯詰め復元と生産量の検討」『撰関期の瓦陶兼業窯をめぐる多面的研究－丹波・篠窯跡群を主な対象に－』大阪大学大学院文学研究科考古学研究室
- 福永信哉・北條芳隆編 1991『桜井谷窯跡群2－23号窯』豊中市教育委員会
- 藤原 学 1985「須恵器からみた古墳時代葬制の変遷とその意義」『末永先生米壽記念獻呈論文集 乾』末永先生米壽記念会
- 藤原 学 1991「須恵器の編年 1 近畿」『古墳時代の研究』第6巻土師器と須恵器 雄山閣出版株式会社
- 森本 徹 2012a「横穴式石室と土器」『菟原Ⅱ－森岡秀人さん還暦記念論文集－』菟原刊行会
- 森本 徹 2012b「儀礼から見た横穴式石室の特質」『ヒストリア』第235号 2012年度大会特集号 大阪歴史学会

京都府内における出土和鏡について

濱 喜 和 子

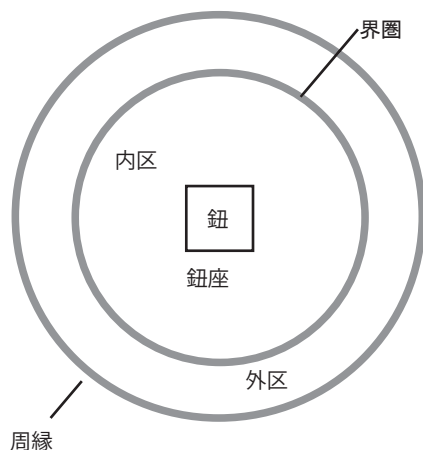
1. はじめに

日本人と鏡の歴史は古くから始まり、今日まで途切れることなく続いている。「卑弥呼の鏡」や「三角縁神獣鏡」という言葉は誰もが耳にしたことがあるだろう。また文学や和歌にも鏡を題材とする作品は多く存在し、地獄においては亡者の生前の行いを見る際に浄玻璃鏡が使用されると古くから伝えられてきた。『土佐日記』では荒れている海を鎮めるために鏡を投げ入れたと伝わる。このように古代以来、鏡には人の姿を映すだけでなく、王権の象徴としての意味や、信仰と関わる用途があった。その製作は中国鏡を模倣することにより発展していった。およそ中世以降に国内で作られた鏡は一般的に和鏡と呼ばれてきた。和鏡は日本の青銅製品を検討する上での重要な資料であり、当時の人々の信仰や生活様式を知ることができる資料でもある。「和鏡」は広瀬都巽氏をはじめ様々な研究者により検討対象とされてきたが、美術的な価値に目が向けられることが多く、和鏡そのものの年代的位置付けにはあまり関心が向けられてこなかった。しかし、より本質的な議論を行うために遺物それ自体から年代的情報を引き出すための枠組みを設定することが求められる。それによって出土遺跡の年代観に依拠した研究とはまた異なる議論ができるようになる。すなわち、長期保有や伝世などの社会的背景をもとに生じる遺物の特殊な所有状況についての議論である。よって和鏡研究を行う上で基礎作業としての変遷観確立の重要性は自明であるため、本稿では京都府内から出土した和鏡を取り上げ、分析を行うことでその変遷観を明らかにするための足掛かりにしたい。

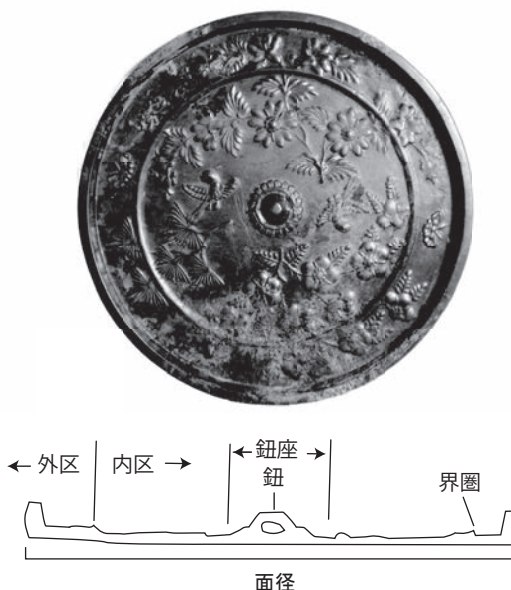
2. 問題の所在と分析方法

これまでの和鏡研究に美術史的視点からのものが多かったのは、和鏡そのものに美術的な価値が認められる一方、中世において年代の基準となる遺物がその他に多く存在し、和鏡そのものの年代観には関心があまり向けられてこなかったことが理由のひとつとして挙げられる。1980年代までは主にコレクションや、神社などに伝わる和鏡が注目され、11世紀後半から16世紀前半までを網羅的に取り上げた研究が行われてきた。そして七条町・八条院町での発掘調査が行われ、鏡鑄型が多量に出土したことにより、製作技術に関する研究が急速に発展した。近年は経塚などの消費地出土資料に着目した研究が行われており、全国から出土した和鏡の集成が進み、重点は経塚などの宗教性の強い遺跡に置かれている^(注1)。現在までの研究の問題点として、集落や都市部における出土事例の集成が不十分な点が挙げられる。またそれと同時に土器などの共伴遺物の再検証が求められる。

前提として、本稿で用いる和鏡を定義したい。和鏡は多くの研究や報告書で用いられている言



第1図 和鏡各部名称



第2図 和鏡断面図



第3図 京都府内和鏡出土遺跡位置図

- | | |
|-----------------|------------------------|
| 1 竹野遺跡 | 18 平安京左京四条三坊四町・鳥丸綾小路遺跡 |
| 2 神明山経塚 | 19 平安京左京二条四坊十町 |
| 3 豊谷遺跡 | 20 弁天島経塚 |
| 4 権現山古墳 | 21 平安京右京三条三坊十町遺跡 |
| 5 真名井神社経塚 | 22 平安京左京七条二坊五町(東市跡) |
| 6 左坂経塚 | 23 清水寺遺跡 |
| 7 山の神経塚 | 24 稻荷山経塚 |
| 8 籠神社経塚 | 25 安祥寺下層遺跡 |
| 9 エノク経塚 | 26 山科本願寺 |
| 10 三角古墳群 | 27 勝持寺旧境内 |
| 11 天台南谷遺跡 | 28 市田斉当坊遺跡 |
| 12 大道寺経塚 | 29 善法古墓 |
| 13 大内城跡 | 30 白川金色院 |
| 14 花背別所経塚 | 31 新宗谷館跡 |
| 15 鞍馬町経塚 | 32 赤ヶ平遺跡 |
| 16 室町殿跡 | 33 前櫛中世墳墓群 |
| 17 平安京左京三条三坊十五町 | |

葉であるが、その概念は厳密には定められていない。一見、日本製の鏡という印象を与えるが、中国鏡を模して日本でつくられた仿製鏡や唐鏡の形式をもった唐式鏡は、和鏡と言うことができない。1990年代までは、平安時代中頃に出現する草花や樹木、鳥などが施されている鏡が和鏡とされていた^(注2)。だが、久保智康氏は日本風の文様が描かれている鏡を「和鏡」とすることは不適切とした^(注3)。同時期に東アジアの工芸品にも草花や樹木などの文様意匠がみられることから、いわゆる「日本風の文様」の隆盛は東アジア全体に起こった現象なのではないかと指摘した^(注4)。本稿では和鏡が成立した経緯は決して日本独自の文化の発展に伴ったものではないという久保氏の指摘を

鑑み、和鏡を文様に関わらず、中世において日本で鑄造された円鏡とし、文様構成の特殊性に着目された擬漢式鏡もいわゆる和鏡のひとつとして扱っていく。また、これまでの研究において和鏡の部位に対して研究者によって異なる名称や計測基準が用いられているため、同一基準を設定する必要がある。そのため、第1図と第2図で和鏡の各部名称を示した。本稿はこの名称を用いて研究を進めていく。

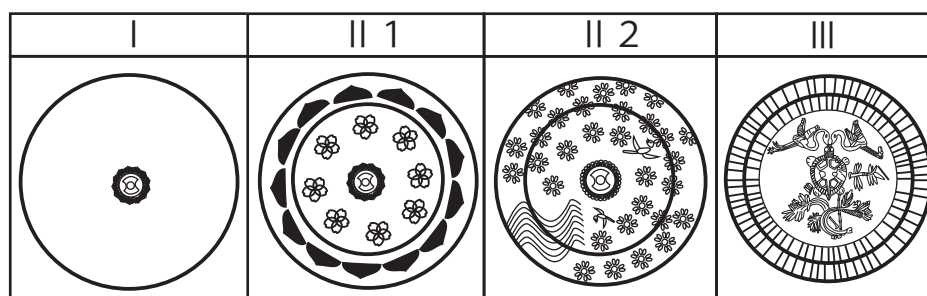
対象とする地域は11世紀後半から14世紀中頃まで一大生産地であったと言われている京都を中心とする。中世から近世にかけての京都は物流の中心地であり、政治・経済・文化の中心でもあったため、和鏡も京都を中心とした畿内近国に出土事例が多く見られる。また七条町・八条院町は中世における和鏡の一大生産地であり、近世にかけても多くの鏡師が存在していたことが考古資料だけではなく、文献史料からも示されている。京都府の出土和鏡を対象とし、第3図に示した33遺跡を取り上げる。現在報告がなされている遺跡は他にも存在するが、報告書のみでは実態が不明な資料も多くあり、その中で実見することが出来なかった資料は今後の課題としたい。本稿では寺社に収蔵されている資料や博物館に寄贈されたコレクションではなく、発掘調査によって出土し、現時点で報告がなされている和鏡を対象とする。また、本稿における中世のはじまりは、これまで一般に中世考古学の対象とされてきた瓦器碗の生産が開始された11世紀中頃とする。近世以後の生産を見通すため、中世から近世初頭にかけての資料を集成した。本稿では、先述の問題点を改善すべく、重要な属性を通時的に分析し、11世紀後半から17世紀初頭にかけての変遷を把握することを目的とする。そして共伴遺物の年代観と遺跡における下限年代の視点を加え、和鏡を追究したい。

3. 出土和鏡の分類

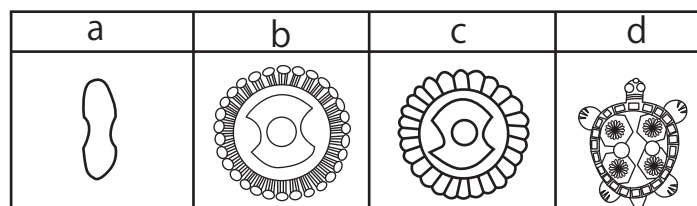
出土和鏡の年代を検討するために界圏と鈕座を重要な属性として抽出し、分類を行った(第4図、第5図)。界圏は篋などの工具を用いてフリーハンドで施すことは困難であるとされ、曳き型(注5)のようなものを用いて施す技法が想定されている。したがって界圏の有無では作業工程が変わると想定できる。また、和鏡の文様構成の点においても界圏には特徴がみられる。唐式鏡などの対称的構図をもった鏡とは異なり、和鏡には鏡背面に対称的ではない文様構成をもつ資料が多く存在する。さらに文様構成が非対称であるにも関わらず、その文様を切るように界圏が施されている和鏡が認められる。すなわち、作業工程が増えるにも関わらず、あえて文様を切断してしまう不可思議な現象が起こるのである。ゆえに、界圏は単なる文様構成上の意匠ではない可能性がある。

また、鈕は機能的に欠かせないものであり、製作された年代に関わらず存在している。よって、鈕を含む鈕座は通時的に分析を行うことに適しており、分類の対象とした。

まず界圏の分類は以下の通りである。Ⅰ式は界圏が存在せず、無圏のものとする。Ⅱ式は界圏が一重のものとする。その上で、Ⅱ1式は界圏が一重に存在し、なかでも界圏が内区と外区で文様が連続せず、それぞれ独立した文様を持っているものとする。またⅡ2式は界圏が一重に存在



第4図 界圏分類模式図



第5図 鈕座分類模式図



平安京左京三条三坊十五町

第6図 出土和鏡実測図

し、内区と外区で文様が連続しており、界圏がその文様を切断するように存在するものとする。Ⅲ式は界圏が二重に存在する。なお、Ⅲ式は内区と外区の文様が連続するものが認められなかったため、細分は行わない。次に鈕座の分類は以下の通りである。aは鈕座が存在せず、bは鈕座が花の蕊のような形となっている、いわゆる花蕊座、cは鈕座が花びらのような形をしている、いわゆる花卉座、dは鈕座が亀形となっているものと設定した。

次に、前述したそれぞれの属性ごとに検討を加えたい。まず界圏のⅠ式、Ⅱ1式、Ⅱ2式、Ⅲ式である。これは界圏の有無と界圏の増減からⅠ式からⅢ式へ、あるいは逆の連続的変遷が想定することができる。また、Ⅱ1式、Ⅱ2式の変遷であるが、Ⅰ式からⅢ式への連続的変遷を想定するならば、対称的な構図ではないⅠ式から界圏が現われ、外区と内区の文様を切断するように施されているⅡ2式へと変遷していく流れが予想され、またⅢ式をはじめと想定するのならば前述したものとは逆の変遷が予想される。次に鈕座について検討を加える。a、b、c、dと分類を行ったが、これらに関しては型式的な変遷を想定することは難しい。a、b、c、dのそれぞれは細分し、各分類ごとに型式組列を組むことは可能だと想定する。しかし、本稿では資料数不足から細分を行うことが困難であったため、今後の課題としたい。だが、dに関しては柄鏡との関連性を指摘することができる。柄鏡は名前の通り柄がついた鏡である。史料としては『御飾記』の大永5(1525)年に床飾りのひとつとして描かれている姿が最初に見られる。それ自体は実物が比定できないため、唐物かどうかの判別はすることができない。だが柄鏡は16世紀後葉から17世紀前葉にかけての桃山時代に大量に普及し始めることが文献史料や絵画資料から示されている。そのなかにdが認められるものも存在する。鈕座含め鈕は紐を通すなど円鏡に存在することで機能を果たすものであり、柄鏡には本来不必要である。そのため、柄鏡にdが認められることはそれ以前の和鏡の特徴を留めていると見え、事実として江戸時代中期以降の柄鏡からは消滅してしまう。そのため、鈕座に関しては各分類に型式組列を想定することは難しいものの、dが鈕座の最後に位置づけられる蓋然性が高い。また、本稿での和鏡の定義は「日本で铸造された円鏡」としたことから、それ以前に位置づけられる瑞花鴛鴦八稜鏡などは検討対象とはしない。さらに和鏡の年代観の再考を行う前提として、実際の資料から認められた10型式を設定した。出土した中世における和鏡の検討を行い、おおまかではあるが、その変遷観の考察を行う。本稿では遺跡からの出土状況を踏まえ、その変遷観を検証するとともに、和鏡と共伴した遺物の年代観から和鏡の各型式に年代を与えていく(付表)。

Ⅱ式のものが12世紀後半から14世紀前半までの年代をもつ遺物と共伴しており、Ⅱ式の分類をさらに進めても、今回の集成と分析では明確な時期差を見出すことはできなかった。界圏の予想した時期的変遷はⅠ式からⅡ式、Ⅲ式とおおまかな流れは確認されたが、そのなかで平安京左京三条三坊十五町で出土したⅠd式の和鏡は時期的変遷の中で過渡期のものになるのかは検討の余地がある(第6図)。Ⅰd式は今回集成を行ったなかで平安京左京三条三坊十五町のみで出土している型式であるため、同様の型式をもつ和鏡の出土事例を全国的に集成することが求められる。また、付表で確認されるように、aはⅠ式に組み合った和鏡の出土が確認されるが、b、cがⅠ式、Ⅲ式と組み合わせる事例は認められなかった。a、dもⅡ1式とⅡ2式と組み合わせる事例は共伴遺物から年代比定可能な和鏡では確認できなかった。付表でもみられるようにⅡ2d式は平安京左京三条三坊十五町(菊花双鳥鏡)で1点確認される(第6図)が、共伴遺物がなく、実年代を比定することは難しい。この事例を含めても京都府内で出土した和鏡には界圏と鈕座で組み合わせない分類があることがみてとれる。

付表 京都府内出土和鏡分類表

遺跡名	鏡	出土状況	面径	周縁幅	縁高	型式	共伴遺物	備考
竹野遺跡	桜山吹双鳥鏡	中世墓	11.5	—	—	Ⅱ 2 c	鉄製刀子	
豊谷遺跡	菊花鏡	不明	8	0.2	0.45	Ⅱ 1 c	土師器皿	13 世紀前半
権現山古墳	梅花飛雀鏡	経塚	8.2	0.3	0.5	Ⅱ 2 b	なし	
	鶴外向鏡	経塚	10.35	0.3	0.6	Ⅱ 2 b	不明	
左坂経塚	双鳥網文鏡	経塚	10.3	—	—	Ⅱ 2 c	土師製筒形外容器、銅製経筒、青白磁合子身	墳墓の可能性あり
籠神社経塚	桜花双鳥鏡	経塚	7.4	0.3	0.4	Ⅱ 1 c	経筒	文治 4 年（1189）銘経筒
	菊花双鳥鏡	経塚	9.8	0.08	0.5	Ⅱ 2 c	経筒	文治 4 年（1189）銘経筒と共伴した
エノク経塚	双鳥鏡	経塚	8.6	0.4	0.2	Ⅱ 2 c	須恵器甕	
三角古墳群	梅花双鳥鏡	経塚	11.1	0.35	0.7	Ⅱ 2 b	甕、土師器皿	共伴遺物の年代観は 13 世紀初頭である
天台南谷遺跡	SX01 出土鏡	経塚	7.4	0.2	0.4	Ⅱ 2 c	短刀 1 点、土師皿 2 点	甕は 12 世紀後半の所産と考えられる
	SX02 出土鏡	経塚	9.2	0.5	0.62	Ⅱ 2 c	鉄製品 1 点、須恵器甕 1 点	甕は 12 世紀後半の所産と考えられる
	SX03 出土鏡	経塚	9.7	0.1	0.6	Ⅱ 2 c	甕、ガラス玉	甕は 12 世紀後半の所産と考えられる
	SX03 出土鏡	経塚	10.2	0.2	0.6	Ⅱ 2 b		
鞍馬町経塚	山吹双雀鏡	経塚	7.55	0.23	0.48	Ⅱ 2 c	経筒	治承三年（1179）銘経筒と共伴した
	松喰鶴鏡	経塚	8.4	0.21	0.5	Ⅱ 2 b	経筒	
室町殿跡 （同志社大学旧大学会館地点）	桐紋双鶴鏡	火災層	4.2	0.2	0.4	Ⅲ d	報告書掲載上不明	
平安京左京三条三坊十五町	双鶴鏡	土壇	6.7	0.2	0.3	I d	土師器皿（sh）、土師器皿、青磁碗、白磁小碗、瀬戸窯香炉	15 世紀中頃（土師皿は 9 c）
平安京左京三坊十五町	菊花双鳥鏡	土壇	9.7	0.26	0.65	Ⅱ 2 d	なし	
平安京左京四三条坊四町・烏丸綾小路遺跡	流水双鳥鏡	井戸	8.8	0.25	0.9	Ⅱ 2 b	土師器皿	共伴遺物の年代観は 16 世紀中頃である
平安京左京二条四坊十町	瑞花鴛鴦紋鏡	井戸	10.5	0.25	0.7	Ⅱ 1 c	なし	
平安京左京七条二坊五町（東市跡）	松花双鳥鏡	柱穴	10.3	0.28	0.75	Ⅱ 2 c	なし	
山科本願寺	和鏡	溝	9.8	0.3	0.8	Ⅲ d	なし	天文元年（1532）が下限
勝持寺旧境内	和鏡	不明	—	0.3	0.3	—	瓦器碗	共伴遺物の年代観は 14 世紀前半である
市田齊当坊遺跡	双鳥草花鏡	溝	10.4	0.8	0.35	I a	なし	
白川金色院跡	秋草蝶鳥鏡	土壇	11.6	0.35	0.85	Ⅱ 2 b	なし	
	山吹双鳥鏡	土壇	10.7	0.15	0.8	Ⅱ 2 c	青白磁、鉄製毛抜き、青銅製品、漆製塗膜片、木製数珠玉 31 顆、皇宋通寶 1 枚	
新宗谷館跡	松竹双鶴鏡	城館	5.1	0.3	0.3	Ⅲ d	報告書掲載上不明	
赤ヶ平遺跡	菊花文鏡	土壇	9.9	—	0.9	Ⅲ d	なし	
前柵中世墓群	蓬萊鏡	墓域・墓壇	9	0.4	—	Ⅱ 2 b	青磁碗	共伴遺物の年代観は 13 世紀末から 14 世紀後半である

京都府内における傾向として、丹波地域(南東部)には出土和鏡が少なく、丹後地域、山城地域では出土事例が多数確認された。丹波地域(南東部)において和鏡が他地域と比べ出土数が少ない理由として、和鏡は経塚に伴って出土することが多く、経塚が少ないこと^(注6)に出土数が比例していると考えられる。丹波地域(南東部)の和鏡を伴う経塚は大道寺経塚のみにとどまった。それに対し、丹後地域では相対的に多くの和鏡が出土し、経塚と墳墓の2種類から出土した。丹後地域の経塚の副葬品は山城地域に比べ種類が少なく、多くは和鏡のみで構成されているという特徴がある^(注7)。そのことに加え、13世紀後半以降の遺物を伴う和鏡は抽出できなかった。山城地域は和鏡が他地域と比べ最も多く出土し、形態も経塚や墳墓、城館など様々であった。丹後地域とは異なり、共伴遺物の年代観も幅広い傾向がみとれる。今回の検討では、京都府内から出土した和鏡を扱ったが、今後は丹波地域全体の出土傾向を検討し、3つの地域における和鏡の型式や出土状況の追究が求められる。

和鏡は単独で出土するケースが多いが、資料集成とともに、出土状況を丹念に検証し、基準資料として位置付けていき、和鏡の年代を考古学的視点から再構築していくことが今後の課題である。その上で、時代の変化に伴い、和鏡生産やその受容がどのような変遷をたどっていくのか、多角的な視点から分析を行っていききたい。

(はま・きわこ＝京都府教育庁指導部文化財保護課技師)

注1 内川隆志 2018『中世和鏡の基礎的研究 出土和鏡編』國學院大學博物館

注2 中野政樹 1969『日本の美術 和鏡』至文堂

注3 久保智康 2003「東アジア銅鏡における鳥文意匠の共有」『鏡にうつしだされた東アジアと日本』ミネルヴァ書房

注4 前掲注3と同じ

注5 網 伸也 1996「和鏡鑄型の復元的考察—左京八条三坊町・六町出土例を中心に—」『研究紀要 第三号』(財)京都市埋蔵文化財研究所

注6 村木二郎 1998「近畿の経塚」『史林』史学研究会

注7 前掲注6と同じ

第6図出典

前櫛中世墳墓群：(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982『京都府遺跡調査概報』第2冊

豊谷遺跡：京都府教育委員会 1992『埋蔵文化財発掘調査概報』(1992)

エノク経塚：(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2001『京都府遺跡調査概報』第98冊

平安京左京三条三坊十五町：古代文化調査会 2004『平安京左京三条三坊十五町—ニチコン株式会社本社新築に伴う調査—』

参考文献

石崎善久 2000「大宮町左坂古墳群の経塚状遺構」『京都府埋蔵文化財情報』第76号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

宇治市教育委員会 2003『白川金色院跡発掘調査報告書』

内川隆志 2018『中世和鏡の基礎的研究 出土和鏡編』 國學院大學博物館。

大宮学舎建替えに伴う埋蔵文化財調査委員会／株式会社文化財サービス 2018『平安京左京七条二坊五町（東西跡）発掘調査報告書』 学校法人龍谷大学

岡本健・山本尚人 2018「新宗谷館跡出土の土器・陶磁器・石製品の様相について―再整理と若干の考察―」
『同志社大学歴史資料館 館報』第21号 同志社大学歴史資料館

（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 2001『京都府遺跡調査概報第28冊』

古代文化調査会 2004『平安京左京三条三坊十五町―ニチコン株式会社本社新築に伴う調査―』

（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982『京都府遺跡調査概報』第2冊

（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 2002『京都府遺跡調査概報』第105冊

（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 2005『京都府遺跡調査概報』第115冊

（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 2004『京都府遺跡調査報告書』第36冊

（財）京都市埋蔵文化財研究所 1981『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要』

（財）京都市埋蔵文化財研究所 1981『京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』

（財）京都市埋蔵文化財研究所 1999『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』

（財）京都市埋蔵文化財調査研究所 2001『平安京左京二条四坊十町』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告書
第19冊）

（財）京都市埋蔵文化財研究所 2004『平安京左京三条四坊』

（財）京都市埋蔵文化財研究所 2005『平安京左京六条三坊五町跡』

（財）京都市埋蔵文化財研究所 2012『勝持寺旧境内』

杉原和雄 1989「経塚と墳墓―丹波・丹後を中心とした筒形容器出土の遺跡について―」『考古学雑誌』第
74号 日本考古学会

中世墓資料集成研究会編 2004『科学研究費補助金特定領域研究 中世考古学の総合的研究：学融合を目指
した新領域創生 中世墓資料集成：近畿編（1）』

同志社大学歴史資料館 2003「室町殿跡（同志社大学旧大学会館地点）の調査成果について（概要報告）」『同
志社大学歴史資料館 館報』第6号

日開調査設計コンサルタント 2007『平安京左京四条三坊四町・烏丸綾小路遺跡』

保坂三郎 1972『鞍馬寺経塚遺物』 中央公論美術出版

舞鶴市教育委員会 2000『上佐波賀遺跡・天台南谷遺跡発掘調査概要報告書』（舞鶴市文化財調査報告第32集）

山本尚人・濱喜和子 2019「新宗谷館跡出土の金属製品について―再整理と若干の考察―」『同志社大学歴史
資料館 館報』第22号 同志社大学歴史資料館

龍谷大学 2009『平安京左京八条二坊一町（東市外町）龍谷大学大宮学舎清風館建設に伴う調査』

稲荷狐(眷属)の分類案

—18世紀の資料を中心に—

加藤 雄太

1. はじめに

土人形には様々なモチーフが存在している。筆者はそこから量的に安定しており、近世を通じて出土する資料を中心に上げてきた。しかしながら土人形の多様な側面を理解するためには共伴するその他の多様な土人形にまで検討範囲を広げる必要がある。今回はその中から稲荷狐(眷属)を検討したい。稲荷狐(眷属)は、「平安京左京五条二坊十一町跡・烏丸綾小路遺跡」通称元格致小学校地点の土坑1001と土坑1002にて大量に出土しており、本論は、これらの資料を分類することで稲荷狐(眷属)の理解を深めることを意図した。

2. 「平安京左京五条二坊十一町跡・烏丸綾小路遺跡」通称元格致小学校地点の調査

京都市下京区高辻通堀川東入西高辻町に位置する元京都市立格致小学校内で実施した発掘調査である。弥生時代から江戸時代に至る遺跡で、3面の遺構面で調査を実施している。以下に報告する資料は、江戸時代の包含層を除去した第1面で検出された。

報告書によると当地は豊臣秀吉による町割りの再編等が行われ、江戸時代には友禅染が盛んとなり、地域独自の製紙業や染色業で栄えた。その後明治2(1869)年に、調査地は下京第八番組小学校となり、明治11年には格致小学校となる。

土坑1001は、調査区中央で検出した東西約1m、南北約2mの隅丸長方形の遺構で、埋土から稲荷狐を主体とする土人形が大量に出土したとある。報告書によれば稲荷社に奉納された土人形の廃棄土坑と考えられるという。土坑1002は、土坑1001と同様の土人形の廃棄土坑である。調査区西端で検出し検出規模は東西約0.5m、南北約1.35mの隅丸長方形と思われる。

今回はこの二つの遺構から出土した資料を検討するが、稲荷社が近くに位置したという遺跡の特徴と、いずれの土坑からも被熱した遺物が確認できることから同時期性の高い土坑であると判断した。このことから資料は遺構毎に分けずそれぞれの特徴単位で分類して提示する。また、報告書では19世紀の遺構であると報告しているが、出土する土人形の年代および被熱痕などから天明8(1788)年の天明の大火で焼亡して「一括廃棄」された資料群として本論では扱う。

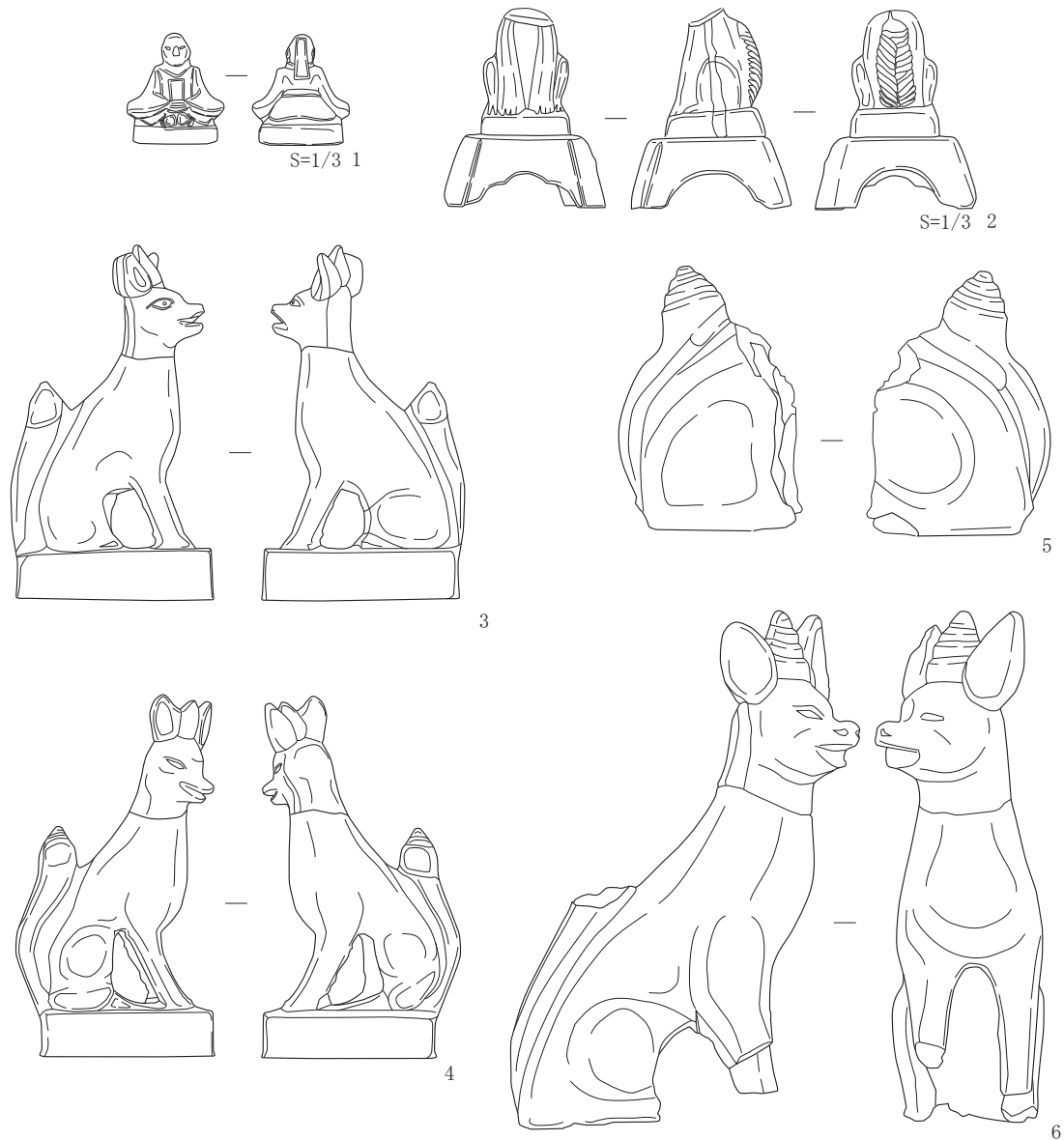
3. 土坑出土の稲荷狐について

以下の通り今回取り扱う資料について特徴を示したい。なお以下の資料番号の後ろに示す括弧内の番号は報告書中の遺物番号である。

1(図39-423)は、天神2に分類されるタイプで、型合わせ成形、ケズリ調整、中実で底部は開口である。衣冠を陽刻で表現する。平緒の表現はない。背面に小格と格袋を表現する。緑釉と透

明釉を用いて施釉する。Ⅱ期(17世紀末～18世紀初頭)の資料である(加藤2022)。土坑1001からは、1の天神以外に、俵乗りネズミと大黒天2点がある。そのうち、天神、俵乗りネズミ、大黒天1点は、ケズリ調整、陽刻表現とⅡ期の資料の特徴を有する。また、残る大黒天1点は、ナデ調整に陰刻表現のⅢ期(18世紀半ば)以降の特徴を有する。このことから、土坑1001及び同時期と考えられる土坑1002は18世紀代の土人形を廃棄した土坑であると判断した。以下すべて稲荷狐の資料である。

2(図40-441)は、前後型合わせ成形、ケズリ調整である。狐の座る台座は型押し成形で工具による刺突で接合されている。陽刻表現で尾の毛と尾先の宝珠を表現する。成形技法からⅡ期と比定できる資料である。3(図40-445)・4(図40-444)は、頭部を前後型、体部と台を左右型の別型で抜き出し、接合して成形している。頭部と尾先に宝珠を乗せ、箱型の台に座る。4の尾先の宝珠は文様が残る。腹部の不要な部分の粘土を切除している。5(図41-448)・6(図41-449)は、頭

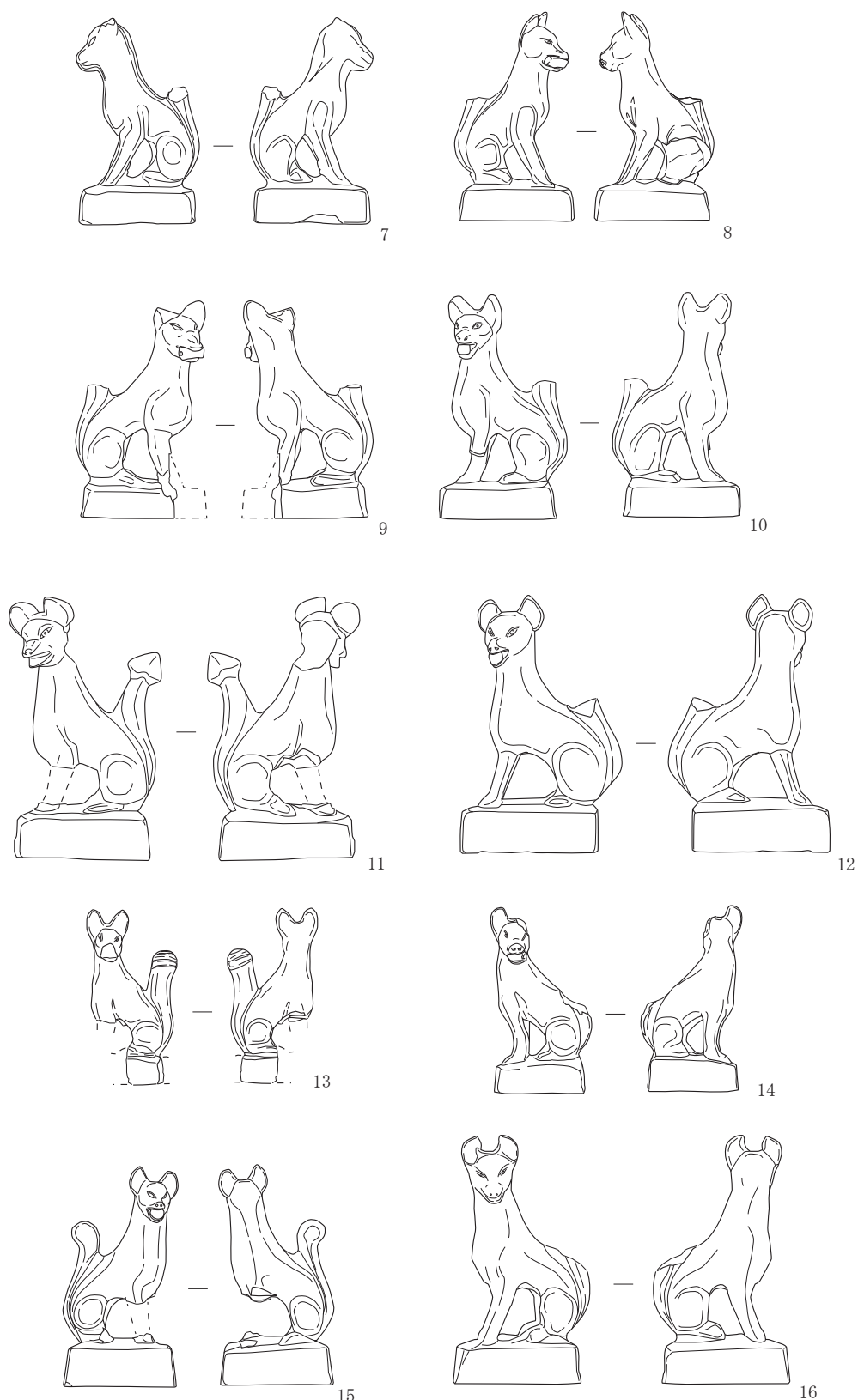


第1図 出土した稲荷狐1 (S = 1 / 4)

部を前後型、体部を左右型の別型で抜き出し、接合して成形している。頭部と尾先に宝珠を乗せ、板状の台に座る。板は掲載しなかったが、カキヤブリを用いて接合している。腹部の不要部分の粘土を切除している。(第1図)

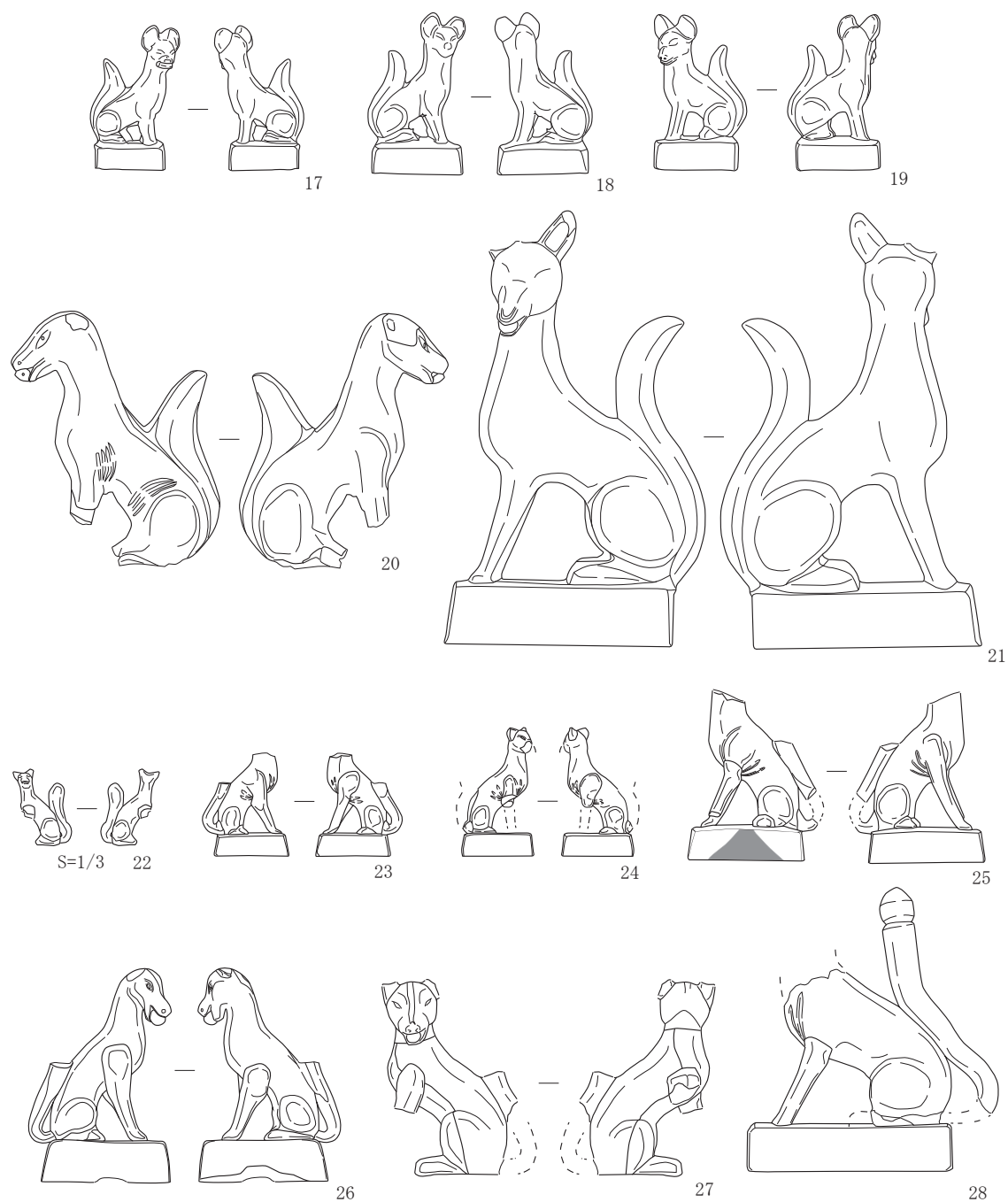
7(図42-457)は、左右二枚型で成形している。首を振らず、箱型台の上に座る。胸部と腹部の不要部分の粘土を切除し、台と稲荷狐の間の空間を台の内側から粘土を充て埋めている。8(未報告資料^(注)54)は、左右二枚型で成形している。耳は手づくね成形で別付けしている。口を切開して鍵をくわえる。首を振らず箱型台の上に座る。胸部と腹部の不要部分の粘土を切除し、台と稲荷狐の間の空間を台の内側から粘土を充て埋めている。9(図40-430)は、左右二枚型で成形している。口を切開して鍵をくわえる。右にやや首を振り、箱型台の上に座る。胸部と腹部の不要部分の粘土を切除し、台と稲荷狐の間の空間を台の内側から粘土を充て埋めている。10(図40-431)は、左右二枚型で成形している。口を切開して玉をくわえる。左にやや首を振り、箱型台の上に座る。胸部と腹部の不要部分の粘土を切除し、台と稲荷狐の間の空間を台の内側から粘土を充て埋めている。11(図40-434)は、左右二枚型で成形している。口を切開している。左にやや首を振り、箱型台の上に座る。胸部と腹部の不要部分の粘土を切除し、台と稲荷狐の間の空間を台の内側から粘土を充て埋めている。12(図42-460)は、左右二枚型で成形している。口を切開して玉をくわえる。左にやや首を振り、箱型台の上に座る。胸部と腹部の不要部分の粘土を切除し、台と稲荷狐の間の空間を台の内側から粘土を充て埋めている。13(未報告資料154)は、左右二枚型で成形している。口吻は残存しない。左を向き、箱型台の上に座る。尾先に宝珠を乗せる。胸部と腹部の不要部分の粘土を切除し、台と稲荷狐の間の空間を台の内側から粘土を充て埋めている。14(未報告資料23)は、左右二枚型で成形している。口を切開して鍵をくわえる。左を向き、箱型台の上に座る。胸部と腹部の不要部分の粘土を切除し、台と稲荷狐の間の空間を台の内側から粘土を充て埋めている。15(図42-459)は、左右二枚型で成形している。口を切開して玉をくわえる。右を向き、箱型台の上に座る。尾先に宝珠を乗せる。胸部と腹部の不要部分の粘土を切除し、台と稲荷狐の間の空間を台の内側から粘土を充て埋めている。16(図40-433)は、左右二枚型で成形している。口を切開している。左を向き、箱型台の上に座る。胸部と腹部の不要部分の粘土を切除し、台と稲荷狐の間の空間を台の内側から粘土を充て埋めている(第2図)。

17(図40-427)は、左右二枚型で成形している。口を切開して鍵をくわえる。右にやや首を振り、箱型台の上に座る。尾先に装飾がなく、すばまる。胸部と腹部の不要部分の粘土を切除し、台と稲荷狐の間の空間を台の内側から粘土を充て埋めている。18(図40-428)は、左右二枚型で成形している。右にやや首を振り、箱型台の上に座る。胸部と腹部の不要部分の粘土を切除し、台と稲荷狐の間の空間を台の内側から粘土を充て埋めている。19(図40-429)は、左右二枚型で成形している。左にやや首を振り、箱型台の上に座る。胸部と腹部の不要部分の粘土を切除し、台と稲荷狐の間の空間を台の内側から粘土を充て埋めている。20(図40-436)は、左右二枚型で成形して耳を別付けする。口を切開して鍵をくわえる。首を振らない。おそらく台に座っていると思



第2図 出土した稲荷狐2 (S = 1 / 4)

われるが残存しない。左右の型を合わせても腹部に空間が生じる構造となっており、型合わせ後に指で腹部を強くなでて閉じている。21 (図40-447) は、左右二枚型で成形している。口を切開して玉をくわえる。左に首を振り、箱型台の上に座る。左右の型を合わせた段階で胸部と腹部が開



第3図 出土した稲荷狐3 (S = 1 / 4)

口する構造を有する。20と21は、ほかの胸部と腹部の不要な粘土を切除する資料と比較して大型である。このため型抜きの作業で力を加えても、前脚が変形しにくいと考えられる。小型品に型抜き後に粘土を切除する資料がみられるのは、型抜きの作業で前脚が大きく変形することを避けるための工夫と考えられる。22(図40-424)は、体部が左右二枚型である。本来は台の上に座る構図であったと考えられるが残存しない。尾と前脚、後脚の先は手びねりで別つけする。左を向く。23(図40-426)は、体部が左右二枚型で、台座は型押し成形である。尾と前脚、後脚の先は手びねりで別付けする。白色の精土である。24(図40-425)は、体部が左右二枚型で、台座は型押し成形である。耳と尾と前脚、後脚の先は手びねりで別付けする。白色の精土である。25(図40-437)は、

体部が左右二枚型で、台座は型押し成形である。尾と前脚、後脚の先は手びねりで別付けする。白色の精土である。台座に墨書で山形の彩色が施される。体部に煤が付着する。26(図42-458)は、体部が左右二枚型で、台座は型押し成形である。耳と尾と前脚、後脚の先は手びねりで別付けする。鼻孔は串状の工具で刺突して成形する。口を切開して玉をくわえる。白色の精土である。27(図40-439)は、頭部が左右二枚型、体部が前後二枚型で、台座が別付けであると考えられるが、台は残存しない。耳、尾と前脚、後脚の先は手びねりで別付けする。口を切開して玉をくわえる。彩色に用いた胡粉が残存する。28(図40-440)は、体部が左右二枚型で、台座は型押し成形である。尾と前脚、後脚の先は手びねりで別付けする。

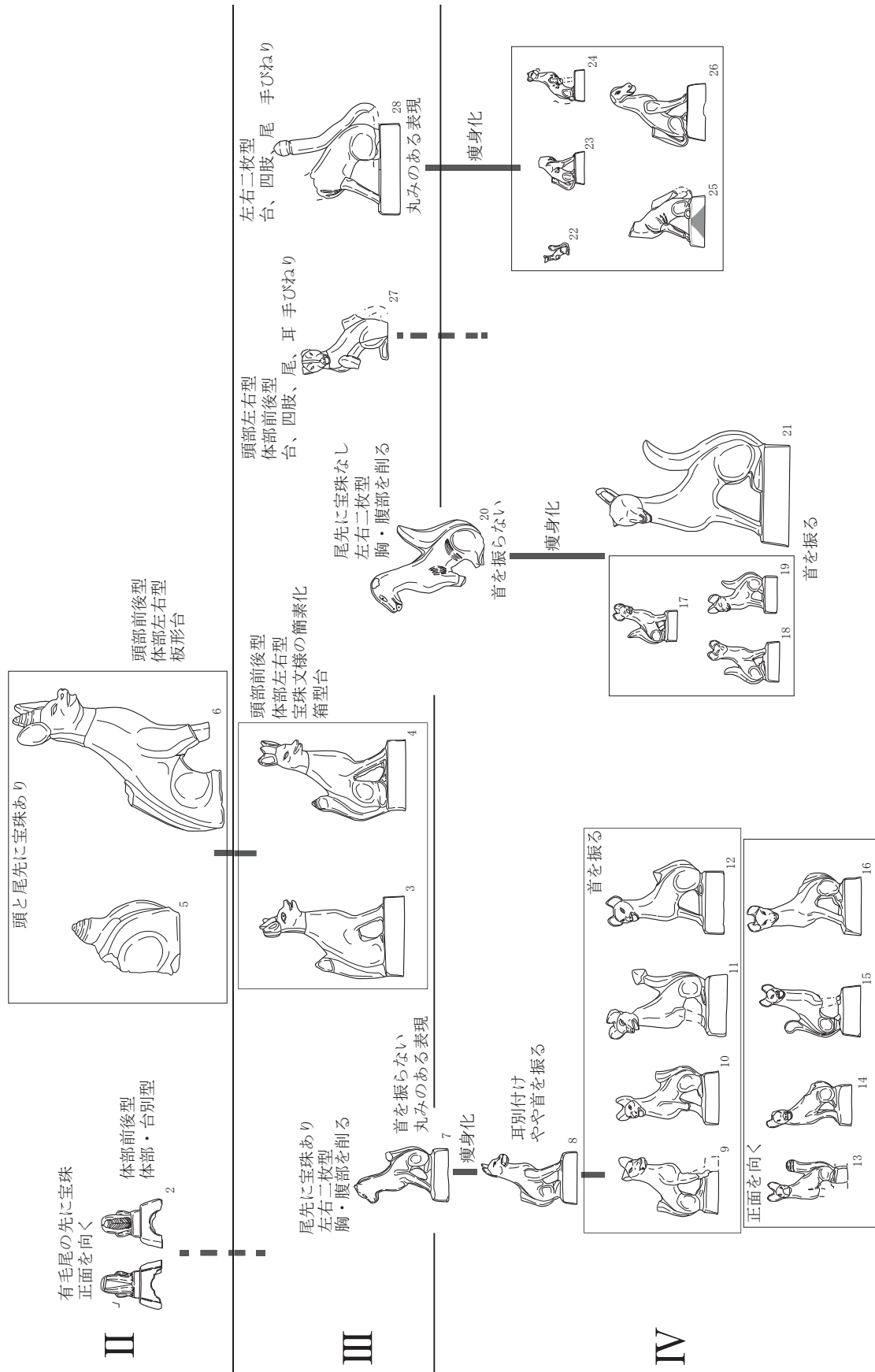
以上の資料を成形技法と表現から分類する。成形技法で大分類すると、前後型と型押しの台座からなる2、頭部と体部を別に成形して接合し腹部の粘土を切り取る3から6の群、左右二枚型で成形し、胸部と腹部の不要な部分の粘土を切除し、台と稲荷狐の間の空間を台の内側から粘土を充て埋める7から18の群、左右二枚型で成形し粘土を切除しない20と21、左右二枚型で成形する体部に四肢と尾などを手びねりして、台座を型押しして接続する22から26と28、前後二枚型の体部と別付けの左右二枚型の頭部、四肢等を手びねりして付ける27の6分類になる。これから表現の差異を加えて検討して2、3と4の群、5と6の群、7、8、9から12の群、13から16の群、17から19の群、20、21、22から26の群、27、28の13分類とした。

4. 18世紀における稲荷狐の変遷

稲荷狐の分類に関しては、同志社大学構内資料において先行して試みた例があり(加藤2016)、成型技術と型ごとの表現を基準に分類を行い、編年作業を行っている。土人形は現状Ⅰ期からⅤ期の五つの時期区分ができ、中でも稲荷狐はⅡ期から確認でき、Ⅳ・Ⅴ期にかけて多様なバリエーションを誇る。Ⅱ期(17世紀末から18世紀初頭)の資料は大型の資料以外には顔の表現が確認できない。Ⅲ期(18世紀中ば)の資料はⅡ期では大型資料に限られていた顔の表現が小型の資料でも確認できるようになり、この時期以降型の合わせ目がケズリ調整からナデ調整に転換する。細かな文様表現も陽刻から陰刻に変わる。Ⅳ期(18世紀後半)は型成形後に腹部の粘土を切除する資料が確認でき、小型の資料で胴体のみ型成型で四肢を貼り付ける資料が新出する。Ⅴ期(19世紀)は狐の目の表現に現れるようにこまかくて洗練された表現になる。型成型などの成形作業には調整が省略され、簡略化(粗化)がうかがえる。稲荷狐は2016年時点でこのように編年案を提示したものの資料不足であった。そのため後発の研究(加藤2022)においては省いたが、これらの研究成果を参考に稲荷狐について考えをまとめたい。

第4図は先行研究を基に型式の特徴から時期差とバリエーションを示した図である。縦軸は時期差、横軸がバリエーションである。あくまで試案であり複数の事例を今後検討していく中で変更する可能性がある。

土坑1001と1002からはⅡ期からⅣ期までの多様な型式が出土している。被熱している資料が確認できることと、18世紀の年代を示す共伴遺物から、およそ天明の大火(1788年)までに集められ



第4図 18世紀における稲荷狐の変遷 試案 (S = 1/8)

た稲荷狐であると判断した。

Ⅱ期の資料には1と2と5と6がある。1は天神であるが、2と同じく陽刻であるなど典型的なⅡ期資料の特徴を有する。2は正面を向いて座る。この表現は今回の検討範囲での資料には含まれない。年代を経るにつれて5と6の表現に収斂していったのであろう。さまざまな表現方法が試作された段階であったといえる。Ⅲ期の資料は3と4がある。6の宝珠と比べて表現が簡略化している。また5と6が板状の台に座っていたのに対してⅢ期の3と4は箱型の台に座る。これ以降、箱型台の表現が大勢を占めるようになる。また四肢等が手びねりの28のような資料にも箱型台は確認できる。このことから稲荷狐には複数の作出方法がある中で、稲荷狐を表現する上で適する表現がまとまってきていることが看取される。Ⅳ期の資料は8などの尾先などに宝珠を乗せるタイプと17のような乗せないタイプ、手びねりを多用するタイプに分かれる。これらにはいくつかの大きさのバリエーションが確認でき、旺盛な稲荷狐の需要があったことを思わせる。Ⅳ期の資料には同じ段階と設定したものの、ある程度の前後関係が存在していると考えている。Ⅲ期の7より瘦身化した8は、首を振らない型であったが、後出する9～12は首を振る表現となっている。さらに13～16では、首を正面に向けている。小さな変化であるが、型合わせ目を丁寧に原型段階で設定しているところをみると、前後関係を想定したい。このほかの17～19と21及び22～26の間には、表現の差異による前後関係は現状考えていない。なお19世紀以降は13から16の群の表現方法が主体となる。稲荷狐の土人形を受容する側のニーズによって型式がまとまっていくのであろうか。

5. おわりに

紙幅の都合限られた作業にとどまってしまったが、稲荷狐の幅広い状況を確認することができた。今後は今回の成果をふまえて稲荷狐の変遷を少しずつではあるが明らかにしていきたいと思う。

(かとう・ゆうた＝当調査研究センター調査課調査員)

注 未報告資料として紹介する資料には、整理段階で付された番号が付けられている。

参考文献

(公財)京都市埋蔵文化財研究所 2017『平安京左京五条二坊十一町跡・烏丸綾小路遺跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2016-8)

加藤雄太 2016「近世京都の土人形—同志社構内出土資料を中心に—」江戸遺跡研究会『江戸遺跡研究』第3号

加藤雄太 2022「近世京都の土人形の基礎的研究」日本考古学協会『日本考古学』第54号

資料紹介

京丹後市佐屋利遺跡出土の大形石包丁

肥後弘幸

1. はじめに

佐屋利遺跡は、丹後半島中央部にある中郡盆地の北部、竹野川の形成する段丘縁辺部の扇状地上に立地する遺跡である。当調査研究センターが令和3年度から国道312号道路新設改良事業に先立って発掘調査を実施し、令和3年度の調査では平安時代末から鎌倉時代にかけての集落跡と弥生時代中期と古墳時代前期の集落跡を、令和4年度の調査では平安時代から鎌倉時代にかけての居館跡などを検出している。^(注1)

令和3年度の調査では、第3区から弥生時代中期の円形竪穴建物と溝、古墳時代の竪穴建物が検出された。この内、直径9mを測る大形の円形竪穴建物に接して検出された中期後葉の溝内から、大形石包丁2点が重なり合って出土した。2点の大形石包丁は、完形で、刃部が鋭利な状態で、大切に埋納されていたような状況であった。本稿は、報告書刊行に先立ち、その性格・意義を検討するために事前に資料を提供するものである。類例などお気づきの点にご教示を乞いたい。

2. 周辺の弥生時代遺跡

丹後半島部で、中期の拠点的な集落は、京丹後市弥栄町奈具・奈具岡遺跡群、同市峰山町途中ヶ丘遺跡、与謝野町日吉ヶ丘遺跡の3遺跡である。いずれも、台地もしくは小高い丘の上に立地する。平地との比高差の大きい奈具・奈具岡遺跡をのぞくと、途中ヶ丘遺跡、日吉ヶ丘遺跡ともに台地上に営まれた環濠集落である。途中ヶ丘遺跡は、佐屋利遺跡の西約2kmの位置にある。前期に直径150mの二重の環濠を営み、中期・後期を経て環濠は直径250mほどになる。丹後半島で唯一前



1 佐屋利遺跡、2 新町遺跡、3 扇谷遺跡、
4 七尾遺跡、5 カジヤ遺跡、6 途中ヶ丘遺跡

第1図 佐屋利遺跡と周辺の弥生時代遺跡

期から後期にいたる集落遺跡である。途中ヶ丘遺跡の北北東2.5kmの丘陵上にある扇谷遺跡は、前期末から中期前葉の環濠集落である。土器の胎土が途中ヶ丘遺跡と共通しており、補完的な関係にあることが予想される。丘陵斜面には、全長850m・幅4m・深さ2～4mのV字形の2条の環濠がめぐり、鍛冶滓・玉作り関連遺物・ガラス原料の出土から高度な技術集団の存在が予想されている。周囲には、前期末の墳墓・七尾遺跡と中期後葉の墳墓・カジヤ遺跡が所在する。このほか、後期前葉の集落遺跡として佐屋利遺跡の北側に新町遺跡が所在する。

3. 佐屋利遺跡出土の大形石包丁

大形石包丁は、2021年度3－2調査区の竪穴建物の横の溝SD95内から、完形の2枚がほぼ水平に重なった状態で出土している(写真1)。この状況から、何らかの目的で埋納されていたと予



写真1 出土状況

想される。竪穴住居周辺及び溝内から凹線文盛行期の中期後葉の土器が出土しており、大形石包丁も中期後葉に帰属するものと考えられる。

また、京都府立丹後郷土資料館には、1976年に大宮町(現京丹後市大宮町)常吉(上野遺跡)で採集された同様の大形石包丁が収蔵されている。

第2図は、この3点を実測し、主な研磨痕及び光沢面を示したものである。1は、2の下側から出土した。板状に剝離しやすい凝灰岩を加工

したもので、長さ35.6cm、幅14.2cm、厚さ1.3cm、重量950gを測る。第2図上段の右上部を握って使用されたことが、右利きの手に馴染みやすいことからわかる。刃部は非常によく研磨されて

1 おり、刃部中央(写真3①)に数か所、刃部左端部(写真3②)に多数の刃こぼれが観察できる。

使用後研磨されたのか、無色の光沢面が観察できるのは刃の先端部のみである。2も1同様の

2 凝灰岩を石材とするもので、長さ32.2cm、幅11.4cm、厚さ1.6cm、重量717gを測る。両面に研磨痕が良く観察できる(写真③④)。

刃部は鋭利に研磨されており、刃こぼれも観察できる。刃こぼれは、

3 1同様刃部中央よりも、先端部と手前に多く観察でき、2では刃部手前の刃こぼれが目立つ(④)。

刃部の両面に幅3mmほどの光沢面が明瞭に観察できる。また、刃部よりも薄い光沢面が

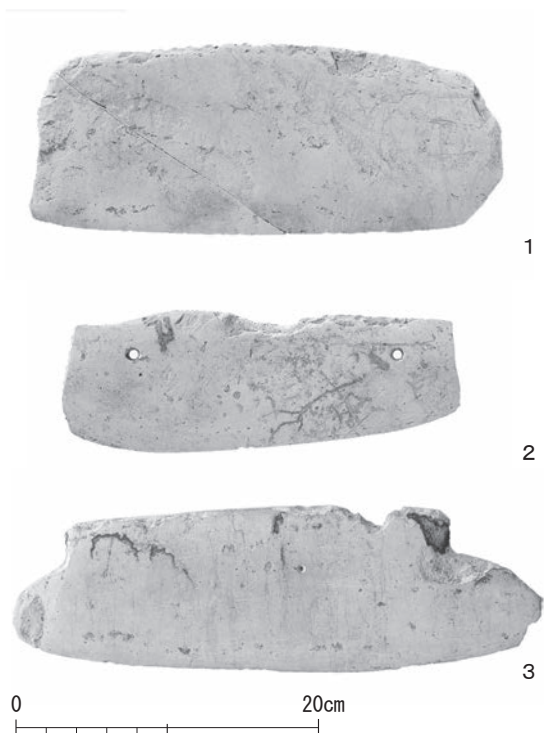


写真2 京丹後市出土の大形石包丁3点

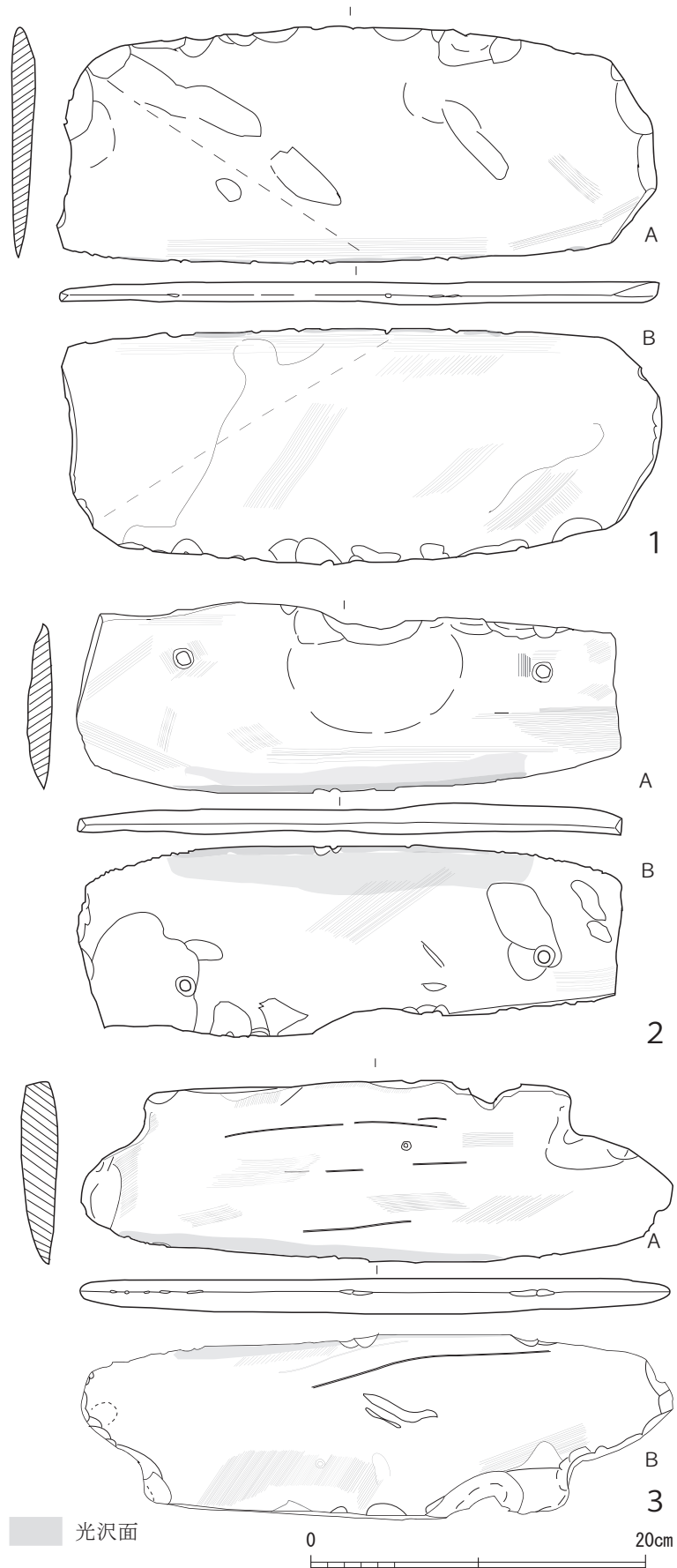
1. 2 佐屋利遺跡、3 上野遺跡

内側に広がっている。2個の紐孔があるが、紐ずれの痕跡は観察できない。1同様お表面(A面)の右上を持つのが手に馴染み、右利き用と考えられる。3は、長さ35.2cm、幅10.9cm、厚さ2.0cm、重量962gを測る。上部を把手状に作り出す。1・2とよく似た凝灰岩を石材とし、研磨が著しく、1・2同様刃部は鋭利である。表面(A面)右上に右手を当てて使用するのに適している。刃部両面に光沢面が明瞭に観察できる(写真⑤)。

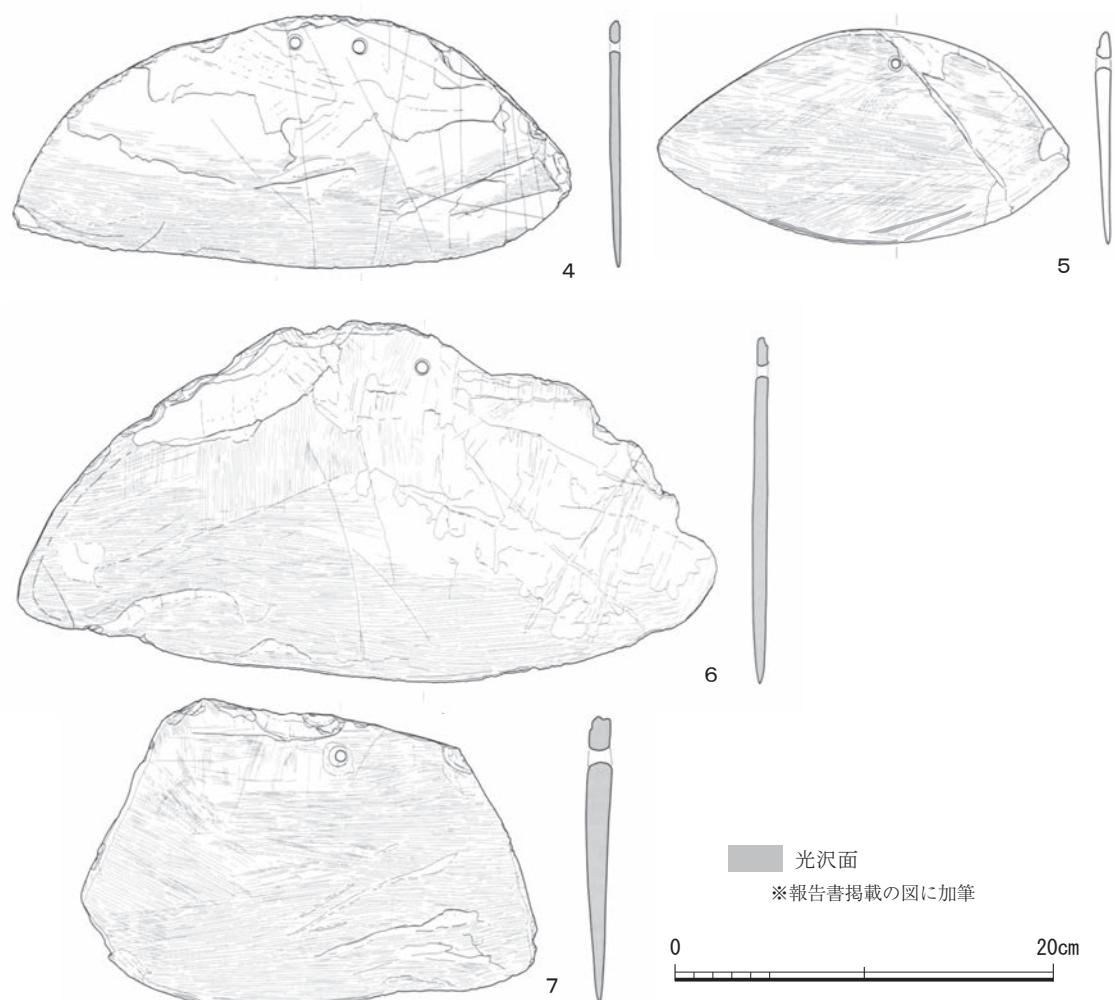
これら3点の大形石包丁は、その研磨痕跡から刃部がたびたび研磨されて、常時刃が鋭利に保たれていたことが予想される。小さな刃こぼれが中央部よりも前後に顕著なこと、光沢面が刃部先端を中心に観察できることから、対象物に垂直に刃を当てて切るというよりも、鎌のように手前に引くことにより切断を行ったことが予想される。

4. 茨木市郡遺跡・倍賀遺跡^(注3)の類似例

佐屋利遺跡のように大形石包丁が、2枚重ねて埋納(収納)されたような状態で出土した例が、茨木市郡・倍賀



第2図 大形石包丁実測図



第3図 茨木市郡遺跡・倍賀遺跡出土の大形石包丁

付表1 大形石包丁計測表

		長さ	高さ	厚さ	重さ	石材
1	佐屋利遺跡石包丁1	35.6	14.2	1.3	950	凝灰岩
2	佐屋利遺跡石包丁2	32.2	11.4	1.6	717	凝灰岩
3	上野遺跡石包丁	35.2	10.9	2	962	凝灰岩
4	郡・倍賀遺跡周溝墓30出土石包丁1(491)	29.5	13.3	0.6	358	灰色粘板岩
5	郡・倍賀遺跡周溝墓30出土石包丁2(492)	21.75	11.25	0.8	244	緑色片岩
6	郡・倍賀遺跡周溝100西辺4196溝(623)	37	18.8	0.9	842	粘板岩
7	郡・倍賀遺跡周溝100西辺4196溝(625)	24.3	16.1	1.3	676	粘板岩

()は報告書番号

遺跡にある。物流施設建設のために2016年度に実施された発掘調査で、方形周溝墓の周溝内から2点の大型石包丁が完全な状態で出土した例が2例ある。1例目は方形周溝墓30(検出面での墳丘規模8.0×6.4m、中期前葉)の南辺の溝から2点(4・5)が重なった状態での出土である。南辺の溝内からは20箱に及ぶⅡ様式の弥生土器と石槍、磨製石剣、人形土製品が出土している。2例目は、周溝墓101(検出面での墳丘規模17.8×10.3m、中期後葉)の西辺の溝から大形石包丁2点(6・7)と一般的な大きさの石包丁5(長さ10.3～16.2cm、重量56～77g)点が周溝外側の壁に突き刺さった状態で出土した例である。大小7点の石包丁が、幅の広いものを上にして、上から下に順に並ぶように水平に突き刺されていた。



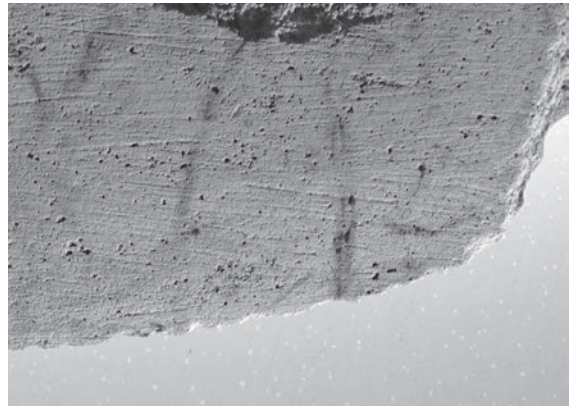
①佐屋利 1 刃部中央 A 面



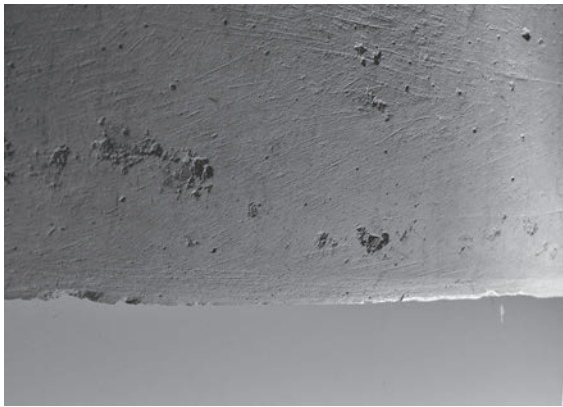
②佐屋利 1 刃部左奥 A 面



③佐屋利 2 刃部中央 A 面



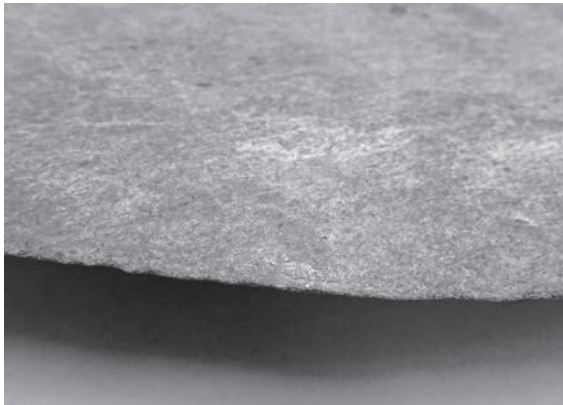
④佐屋利 2 刃部手前 A 面



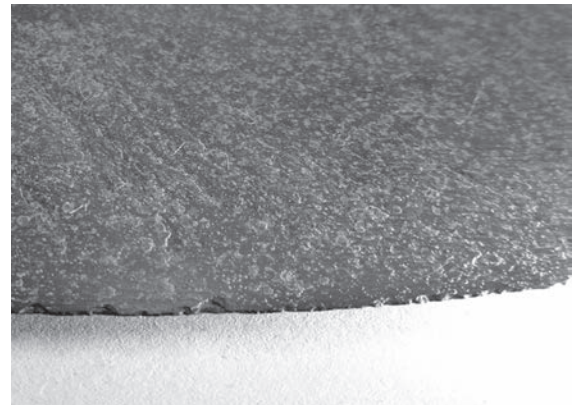
⑤上野遺跡 刃部中央 A 面



⑥郡・倍賀遺跡 4 刃部中央



⑦倍賀遺跡 5 刃部中央



⑧倍賀遺跡 7 刃部中央

写真 3 大形石包丁の刃部

中期前葉の4・5は、非常に薄く重量も400g以下と軽い。中期後葉の6・7は佐屋利遺跡例と同様やや厚く重い。そのような違いはあるものの、いずれの石包丁も、刃部が鋭利に研がれていること、小さな刃こぼれが観察できることが特徴的である。4には、光沢面が残されていないが、5～7には刃部中央先端部を中心に光沢面が観察できる。5については、2同様刃部からやや離れた位置にも光沢面が残る。丹後の3例との違いは、石材が硬いためか、刃こぼれは刃部中央付近にも目立つことである。

なお、6・7とともに埋納されていた石包丁の刃部は、通常よく見かける石包丁同様、分厚く丸まっており、鋭利には程遠い。

5. 大形石包丁出土の意義

令和3年度の調査で出土した佐屋利遺跡の大形石包丁を取り上げた。出土した当時、同大の大形石包丁が京丹後市大宮町上野遺跡から出土していることを思い出した。上野遺跡例を含めた3点を観察すると、刃部に光沢面が残されている。驚いたことに、古くに採集された上野遺跡の大形石包丁がもっとも光沢面が目立つことだった。

同様の事例で思い当たったのが、郡・倍賀遺跡例であった。茨木市文化財資料館で実見したところ、丹後例との特徴がよく似ており、同じ用途で用いられたことが理解できた。また一緒に出土した一般的な石包丁は、刃部が分厚く丸まっており、顕著な光沢面は観察できなかった。一緒に埋納されていたことから、これらは農作物の収穫に用いられた蓋然性が高いと考える。大形石包丁には、穀物の刈り取りに伴って付着したと考えられるコーングロスによる光沢面が観察でき、たとえば、稲株などを水平方向に引いて刈り取ることに使われてことが予想できる。

上野遺跡例が、大形品であるのに完形であること、2枚ずつ出土した例が3例あることから、これら完形の大形石包丁は、鋭利な刃部をつけた状態で大事に収納(埋納)されていたと考えられる。農作物の収穫後、何らかの役割をもって埋納されたのである。なお、出土場所が、居住域と墓域と異なっていることについては、今後の検討課題である。

(ひご・ひろゆき＝当調査研究センター調査課課長補佐)

注1 (公財) 京都府埋蔵部位調査研究センター 2021「佐屋利遺跡現地説明会資料」

面将道ほか 2021「13 佐屋利遺跡」『京都府埋蔵文化財情報』143号

(公財) 京都府埋蔵部位調査研究センター 2022「佐屋利遺跡現地説明会資料」

注2 穀物の刈り取りに使用された石器には、刃部に独特の光沢が生じることが知られている。

この光沢は、「コーングロス」と呼ぶが、本稿ではその部位を指して光沢面と呼称する。

なお、本稿の作成にあたり、下記の文献を大いに参考にした。

原田 幹 2017『東アジアにおける石製農具の使用痕研究』六一書房

注3 茨木市教育委員会・(公財) 大阪府文化財センター 2018『郡遺跡・倍賀遺跡Ⅰ』(茨木市文化財資料集第71集・大阪府文化財センター調査報告書第286集)

資料紹介

京丹波町の埴輪表採資料

北山大熙

1. はじめに

近年、京丹波町から遺跡分布地図が刊行され、町域内に130基を超える古墳があることが明らかになった。^(注1) 一方、発掘調査が実施された古墳は、塩谷古墳群中4基と塩谷南古墳群中1基、蒲生野古墳^(注4)が挙げられ、京丹波町の古墳時代の様相は不明な部分が多く残っている。

本報告においては、遺跡分布地図を刊行するにあたって、踏査中に表採された東蒲生6号墳の埴輪を実見することができたため、資料を報告し、京丹波町における古墳時代の様相の一端を明らかにすることを目的とする。

2. 東蒲生古墳群と周辺の古墳

東蒲生古墳群は踏査中に発見された計14基で構成される古墳群である。6号墳は直径約22m・



- 1: 蒲生遺跡 2: 蒲生窯跡群 3: 蒲生野古墳群 4: 蒲生野遺跡 5: 森ノ奥古墳群 6: 幸野古墳群 7: 東蒲生古墳群
8: 上野慶庵古墳群 9: 上野北坂古墳群 10: 上野北垣内古墳群 11: 丹波上野城跡 12: 須知遺跡 13: 宮の浦古墳群
14: 深志野古墳群 15: 塩谷古墳群 16: 塩谷南古墳群

第1図 周辺の遺跡 (S = 1/25,000)

高さ約4mの円墳である。周辺には小規模ながらも多くの古墳を確認できる。

実態の分かる古墳は少ないものの、古墳時代前期から後期まで概観していく。

近年、京丹波町教育委員会によって蒲生野古墳が発掘調査され、古墳時代前期末から中期初頭にかけての2つの埋葬施設が検出され、仿製内行花文鏡や石釧などが出土している。時期的な隔たりはあるが、近隣には円墳12基で構成される塩谷古墳群が所在している。直径10m程度で、木棺直葬を埋葬施設とする小規模な古墳群である。5号墳からは非常に残りの良い巫女形埴輪が2個体出土しており、埋葬施設から出土した須恵器はTK47型式並行期に比定されている。隣接する塩谷南古墳群では、1基のみの調査が実施されており、埋葬施設からMT15型式並行期の須恵器が出土している。また、京丹波町域の前方後円墳として豊田車塚古墳、カナヤ古墳が挙げられる。ともに高屋川と須知川の合流地域付近に位置している。豊田車塚古墳は全長約31mの前方後円墳である。現状、前方部はやや細く、後円部はやや方形に近い印象を受ける。カナヤ古墳は豊田車塚古墳から北へ約2km離れた場所に位置し、全長約34mの前方後円墳である。ともに発掘調査が行われていないため、時期等は不明である。古墳時代の集落遺跡として、蒲生遺跡では古墳時代後期の土坑や溝が検出されているが、必ずしも動向は明らかではない。

時期を考慮せずに規模を比較すると、東蒲生6号墳は周囲の古墳より一回り大きく、北に位置する豊田車塚古墳やカナヤ古墳の前方後円墳と比較するとやや小さい古墳である。

3. 東蒲生6号墳表採の埴輪

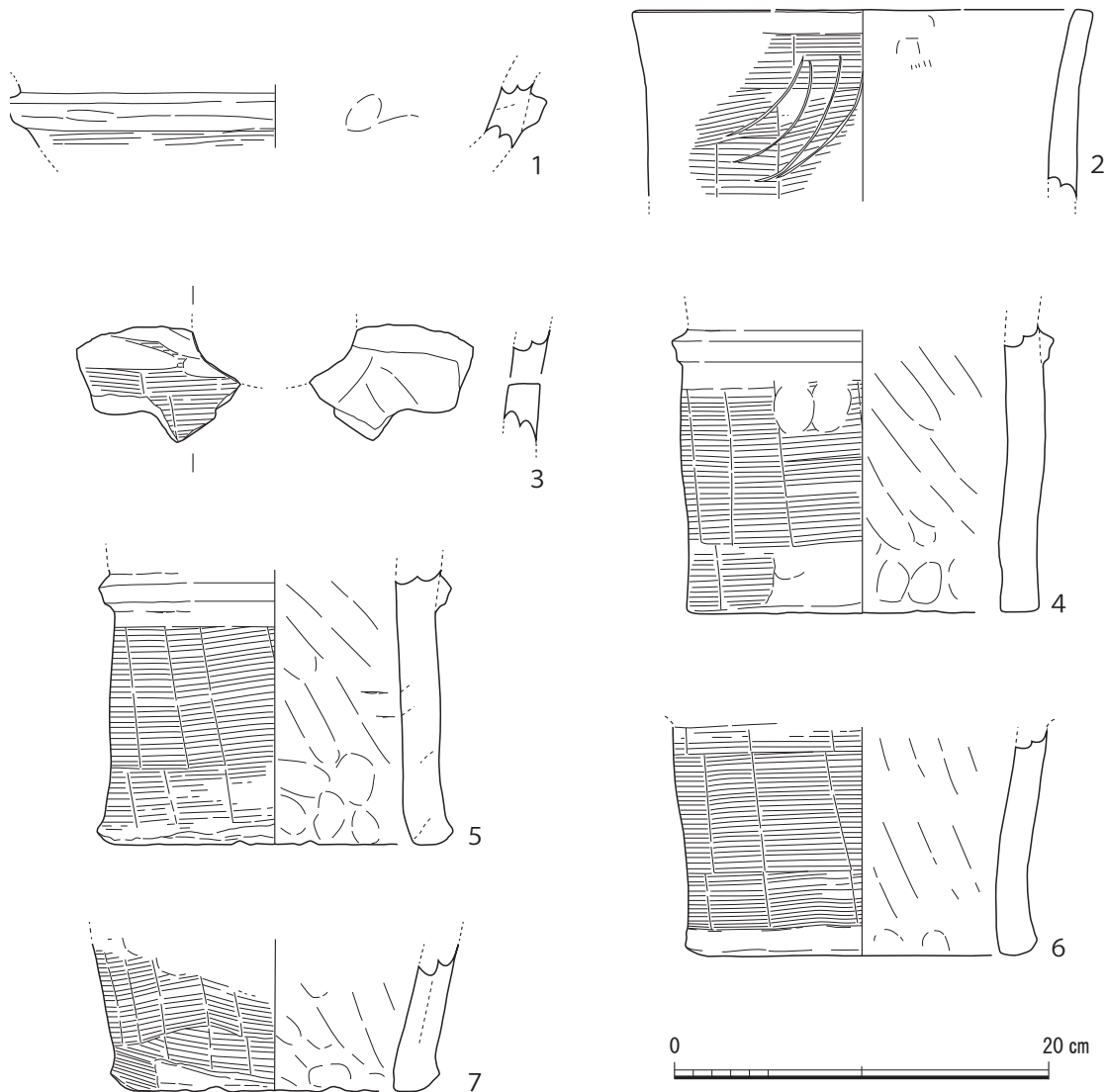
表採された資料は多くが細片であり、図化できる資料は7点である。普通円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪が表採されており、^(注5) 形象埴輪は確認できなかった。

1は朝顔形円筒埴輪の口縁部である。外面にはヨコハケを確認でき、内面には、ナデ調整やユビオサエを施している。

2は普通円筒埴輪の口縁部である。口縁部径は24.6cmを測り、口縁部高は不明である。口縁端部に向かってやや外反し、外面端部に強くナデ調整を施している。外面調整には、B種ヨコハケを施し、2周以上のヨコハケで器面を充足し、静止痕が明瞭に残る点からB b種ヨコハケに該当する。内面調整には摩耗が激しいものの、ユビオサエとハケ調整を確認できる。また、4条の弧状を線刻し、ヘラ記号と考えられる。

3は円筒埴輪の胴部である。大きさ等は不明であるが、外面調整にはB種ヨコハケを施し、内面調整にはナデ調整を行う。また、円形のスカシ孔の一部が認められる。

4～7は円筒埴輪の底部である。4は底部径が18.7cm、底部高が13.9cmを測る。5は底部径が19.0cm、底部高が13.4cmとなっている。6・7は底部高が不明ではあるが、底部径が18.9・17.5cmを測る。4～7とともに外面調整には2周以上のヨコハケで充足しており、静止痕が明瞭に残っており、B b種ヨコハケを施している。内面はナナメ方向のナデ調整を施し、底部の形を整えるためか、ユビオサエを多用している。6は強くヨコハケを施しているため、ハケ工具のあたっていない部分とヨコハケ部分との間には段差が生じている。7については、2枚の粘土を貼り合わ



第2図 東蒲生6号墳表採資料(S=1/4)

せて、成形している。

上記で報告したように多くの埴輪の外表面調整にはB b種ヨコハケを施し、黒斑が確認できず、円形の透孔を穿っている点からIV群^(注6)の埴輪と考えられる。B b種ヨコハケは、古墳時代中期前葉から後葉まで確認できる外表面調整である。とくに中期前葉に多くの古墳の埴輪で用いられる技法であるが、時期が下っても一定数量確認できる特徴である。^(注7)

4. 表採埴輪の位置付け

前項では、東蒲生6号墳から表採された資料の特徴を捉えることができた。ここでは南丹地域出土のIV群の円筒埴輪の段数構成などの規格や外表面調整などに着目し、位置付けを検討する。

南丹地域では埴輪をもつ古墳が30基以上確認されている。詳細まで分かる資料は少ない。1・2は南丹市塚本古墳^(注8)(方墳・1辺約18m)出土の普通円筒埴輪である。4条5段以上大型品と2条

付表 東蒲生6号墳観察表

単位：c m

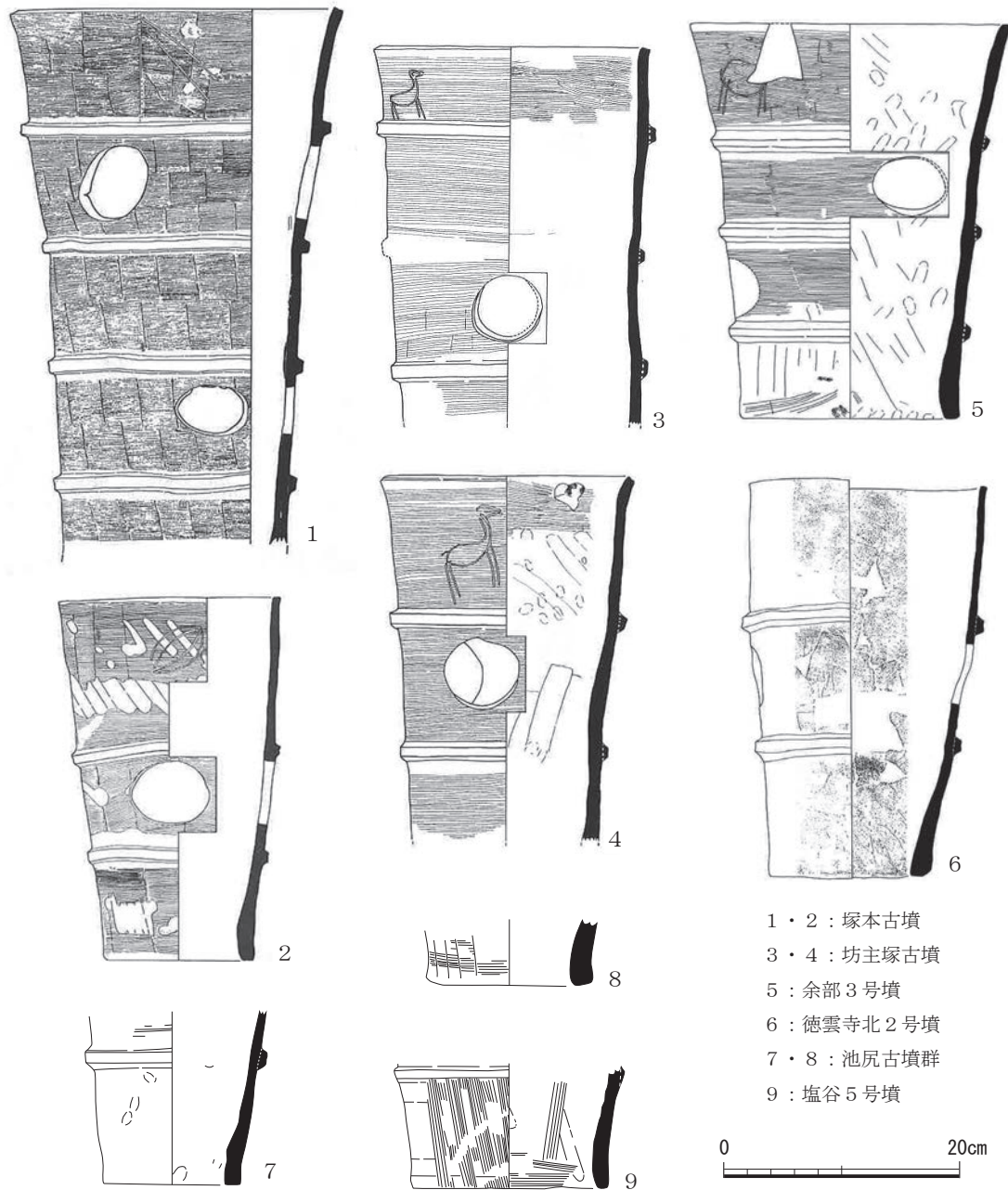
番号	器種	部位	底部径	口縁部径	底部高	外面	内面	色調	備考
1	朝顔形円筒埴輪		-	-	-	ヨコハケ	ナデ・オサエ	2.5Y7/6 明黄褐色	
2	普通円筒埴輪	口縁部	-	24.6	-	Bb 種ヨコハケ	ナデ・ハケ	2.5Y7/7 明黄褐色	線刻
3	円筒埴輪	胴部	-	-	-	B 種ヨコハケ	ナデ	2.5Y7/8 明黄褐色	円形透孔
4	円筒埴輪	底部	18.7	-	13.9	Bb 種ヨコハケ	ナデ・オサエ	2.5Y7/9 明黄褐色	
5	円筒埴輪	底部	19.0	-	13.4	Bb 種ヨコハケ	ナデ・オサエ	2.5Y7/10 明黄褐色	
6	円筒埴輪	底部	18.9	-	(13.3)	Bb 種ヨコハケ	ナデ・オサエ	2.5Y7/11 明黄褐色	
7	円筒埴輪	底部	17.5	-	-	Bb 種ヨコハケ	ナデ・オサエ	2.5Y7/12 明黄褐色	

3段の小型品の2種類の規格の異なる普通円筒埴輪が樹立されていた。4条5段の普通円筒埴輪は口縁部高と突帯間がほぼ同じになるように設定され、2条3段の普通円筒埴輪は口縁部高が突帯間や底部高よりも高くなるように設定されている。ともに外面にはB b種ヨコハケを施している。また、口縁部には鹿などの線刻を刻んでいる。^(注9) 3・4は亀岡市坊主塚古墳^(注10)(方墳・1辺29m)の普通円筒埴輪であり、段数の分かる資料がないものの、3条4段以上であることが分かる。外面にはB種ヨコハケが確認できる。口縁部高や胴部径が大きく異なる資料があり、塚本古墳同様に異なる規格の普通円筒埴輪が樹立されていた可能性が高い。塚本古墳と同様に鹿の線刻を刻んでいる。^(注11) 5は亀岡市余部3号墳^(注11)(方墳・規模不明)の3条4段で普通円筒埴輪である。外面にはB種ヨコハケのほか、底部にかけてタテ方向のナデ調整を施し、2次調整が省略されている。口縁部には鹿の線刻を刻んでいる。^(注12) 6は南丹市徳雲寺2号墳^(注12)(方墳・一辺12m)出土の普通円筒埴輪である。2条3段の規格で、外面にはB種ヨコハケを施している。^(注13) 7・8は池尻古墳群の円筒埴輪である。^(注14) ともに底部のみで、段数構成は不明、外面にB種ヨコハケが認められる。やや底径が小さく、12～13cmを測る。^(注15) 9は塩谷5号墳^(注15)(円墳・径15m)出土の円筒埴輪である。段数構成は不明、外面にはタテハケを施す。^(注16)

ここまで南丹地域のⅣ群の円筒埴輪を概観してきた。南丹地域では2条3段、3条4段、4条5段以上の規格が認められる。可能性を含めるといくつかの古墳では、異なる段数構成をもつ普通円筒埴輪が樹立されていることや多くの個体にB種ヨコハケを施していることが判明した。また、口縁部には鹿の線刻が刻まれる点も南丹地域の特徴と捉えることができる。

東蒲生6号墳の円筒埴輪と3条4段以上の資料を比較すると、東蒲生6号墳のものは底径が小さく、2条3段と想定される円筒埴輪と底径や底部高の数値が近似しており、2条3段の円筒埴輪であった可能性が高い。

上記で提示した古墳時期については、近年、高橋氏が検討を行っており、坊主塚古墳・塚本古墳→余部3号墳と位置づけている。^(注17) これらの古墳変遷について、本報告では言及を控えるが、東蒲生6号墳表採の資料についてもほぼ同時期かやや新しいと考えられる。また、鹿の線刻につい



第3図 周辺遺跡の円筒埴輪

て小澤氏は頭部と頸胴部の表現方法をもとに、6型式を設定している^(注18)。塚本古墳、坊主塚古墳、余部3号墳のものについてはBc類に分類し、太田茶臼山古墳など摂津からの影響を示唆している。太田茶臼山古墳の近隣では2条3段の円筒埴輪をもつ総持寺古墳群があり、これらの円筒埴輪の影響を受けている可能性も想定できる。

4. おわりに

今回、東蒲生6号墳表採の円筒埴輪をもとに古墳の位置付けについて検討してきた。表採資料のみと制約はあるものの、残存状況がよく、IV群の資料であることを明らかにできた。また、2条3段の普通円筒埴輪が中期以降に南丹地域で広がっていることが確認でき、埴輪生産には摂津

地域からの影響の可能性を提示できた。今後の地方への埴輪生産の拡がりを考える上で、重要な資料となろう。今後は、兵庫県を含めた丹波地域の埴輪生産の検討を行っていきたい。

(きたやま・だいき＝京都府教育庁指導部文化財保護課技師)

- 注1 京丹波町教育委員会 2021「京都府京丹波町遺跡地図」『京丹波町埋蔵文化財調査報告書』第2集 京丹波町教育委員会
- 注2 伊野近富 1990「2. 塩谷古墳群平成元年発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第38冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注3 黒坪一樹 2012「(1) 塩谷南古墳群」『京都府遺跡調査概報』第152冊 (公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注4 山下泰・石崎善久・藤井整・古川匠・中居和志・桐井理揮・北條芳隆・降幡順子 2018「蒲生野遺跡第1次・蒲生野古墳群第1次」『京丹波町埋蔵文化財調査報告書』第1集 京丹波町教育委員会
- 注5 本報告では、普通円筒埴輪か朝顔形円筒埴輪の判別がつかないものは、円筒埴輪と総称する。
- 注6 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会
- 注7 木村理 2022「古墳時代中期の円筒埴輪」『埴輪の分類と編年』埴輪検討会
- 注8 森下衛・引原茂治 1991「塚本古墳発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第41冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 森下衛 1991「2〔2〕塚本古墳」『埋蔵文化財調査概報』(1991) 京都府教育委員会
- 注9 多くの埴輪で線刻が認められ、鹿以外にも多くの種類の線刻が報告されている。
- 注10 亀岡市教育委員会 2000「国営農地再編整備事業関連遺跡発掘調査」『市内遺跡発掘調査報告書』亀岡市文化財調査報告書第55集
- 注11 亀岡市教育委員会 2010『余部遺跡第9次・余部古墳群発掘調査報告書』亀岡市文化財調査報告書第80集
- 注12 園部町教育委員会 1997『園部町小山東町土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書』園部町文化財調査報告第13集
- 注13 徳雲寺北2号墳はV群の普通円筒埴輪として報告されているものの、B種ヨコハケをもつ点から今回、IV群として扱う。
- 注14 前掲注11と同じ
- 注15 前掲注2と同じ
- 注16 塩谷5号墳はV群の特徴をもつ円筒埴輪であるが、近接地のため資料を紹介する。
- 注17 高橋克壽 2018「丹波の方墳と坊主塚古墳の盾持人形埴輪」『京都を学ぶ【丹波編】－文化資源を発掘する－』京都学研究会
- 注18 小澤麻帆 2022「図像をもつ埴輪に関する予察的検討」『埴輪論叢』第11号 埴輪検討会

令和4年度発掘調査略報

1. 法貴北古墳群第1・2次

所在地 亀岡市曾我部町犬飼地先

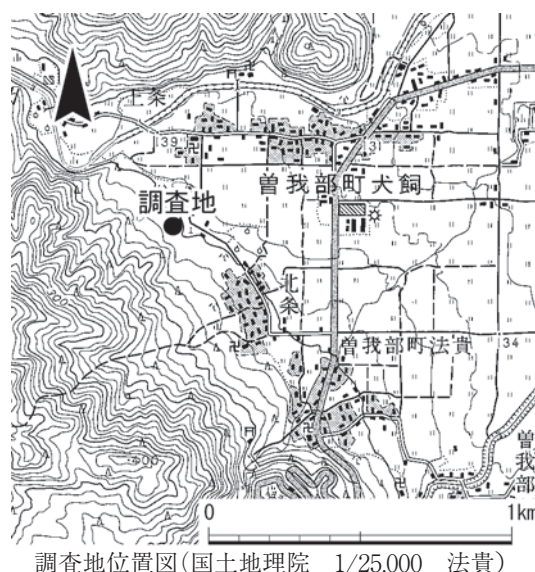
調査期間 令和3年5月7日～令和4年2月28日、令和4年5月6日～令和4年9月21日

調査面積 990m²

はじめに 法貴北古墳群は、亀岡市曾我部町犬飼に所在し、亀岡盆地南西の霊仙ヶ岳の山麓に立地している。曾我部町には200基を超える古墳が存在しているとされ、法貴北古墳群が位置する西側丘陵には、北から犬飼古墳群(9)、法貴北古墳群(27)、法貴古墳群(66)、慈雲寺裏山古墳群(3)、法貴南古墳群(3)、法貴峠古墳群(20)、中岩山古墳群(6)、中西山古墳群(12)の計146基の古墳があるとされている。

今回の調査は、国道423号(法貴バイパス)の建設に先立って実施したもので、法貴北古墳群では、はじめての発掘調査となった。

調査概要 調査地内に所在した7基の古墳(5・7・18～22号墳)と周辺の地形変化から遺構が存在しそうな場所に、計15か所のトレンチを設定して調査を実施した。古墳として遺跡地図に記載されていた7基のうち、5・7・20号墳以外は古墳ではなく、自然地形であることが分かった。また、7・10号墳の南東で10トレンチを拡張したところ、石組遺構S X19と木棺墓S X21を検出した。石組遺構S X19は、人頭大の石材を組合せ、長軸0.55m・短軸0.25mの空間を構築している。遺物が出土しておらず、造られた正確な時期は不明である。内部には炭化した木材の痕跡が確認でき、櫃のようなものが納められていた可能性がある。木棺墓S X21は、墓壇規模長軸2.4m・短軸1.2m、棺痕跡長軸1.9m・短軸0.7mである。釘などは出土しておらず、組合せ式木棺であったと考えられる。棺外から須恵器杯・短頸壺、土師器杯が出土している。飛鳥時代中頃のものと考えられる。法貴北5号墳は、無袖式の横穴式石室を埋葬施設とする直径8mの円墳で、墳丘は高さ約1m残存していた。墳丘内には列石を確認した。列石は、斜面上側で1段、斜面下側で2段認められた。列石は、1m程度の石材とこぶし大の礫を組み合わせ、石垣状に配列していた可能性がある。地層観察からも袖部を境に墳丘の盛り方が変わることや須恵器蓋、土師器台付皿が出土することから、古墳の構築過程で祭祀を行っていた可能性がある。石室は南東方向に開口しており、石室長5.3m、玄室長3.5m、奥壁幅0.9mの規模を測る。石室からは、須恵器杯・台付長



頸壺・平瓶が出土しており、古墳時代後期に初葬、飛鳥時代中頃に追葬が行われたと考えられる。7号墳は、裾部のみが調査対象であったため、墳丘規模等は不明である。堆積状況から築造後さほど時間経ずに墳丘の流出が始まっていると考えられる。20号墳は、7号墳の北西斜面に築造された直径6mを測る円墳である。石室は北東方向に開口する無袖式石室である。石室規模は石室長3.2m、玄室長2.8m、奥壁幅0.8mを測る。墳丘は約0.6m程度残存しており、5号墳ほどしっかりとした構造ではないものの石材が意識的に配されていることが分かった。石室床面付近からは鉄鏃と耳環が出土しているが、築造時期を確定できる遺物は出土していない。隣接する7号墳との前後関係だが、地層観察から、7号墳の流出土を削って20号墳の周溝が掘削していることが確認できることから、7号墳→20号墳の順で築造したと考えられる。また7・20号墳へ向かう墓道S X30を検出した。総延長約23m、幅約1mを測り、7号墳と20号墳へ向かうように分岐している。

今回の調査で検出した古墳は、5・7号墳→20号墳→5号墳(追葬)・木棺墓の順で造られたことがわかった。5号墳と同じ時期に築かれたS X21は、しっかりした墳丘を築かずに木棺を直葬しており、両者の埋葬方法の違いは被葬者の階層差と考えられる。横穴式石室を採用せずに埋葬行為を行うことと古墳に向かう墓道が見つかったことは、法貴北古墳群の被葬者や古墳群の形成を考える上で重要な成果となった。

(竹村亮仁)



写真1 法貴北5号墳全景(南東から)



写真2 法貴北20号墳石室及び全景(南東から)



写真3 法貴北7号墳全景(南東から)



写真4 木棺墓S X21全景(北西から)

2. 小樋尻遺跡第14次

所在地 城陽市富野小樋尻

調査期間 令和4年5月9日～令和4年7月28日

調査面積 1,340㎡

はじめに 小樋尻遺跡は、城陽市のほぼ中央部の木津川右岸に位置し、木津川により形成された沖積平野部に立地する。これまでの調査で、縄文時代後期～弥生時代の流路、縄文時代晩期の集落、古墳時代前期の集落や導水遺構などを伴う流路、古墳時代後期の集落、奈良時代の集落、古墳時代後期～奈良時代の溝、中世以降の島畑群が確認されている。

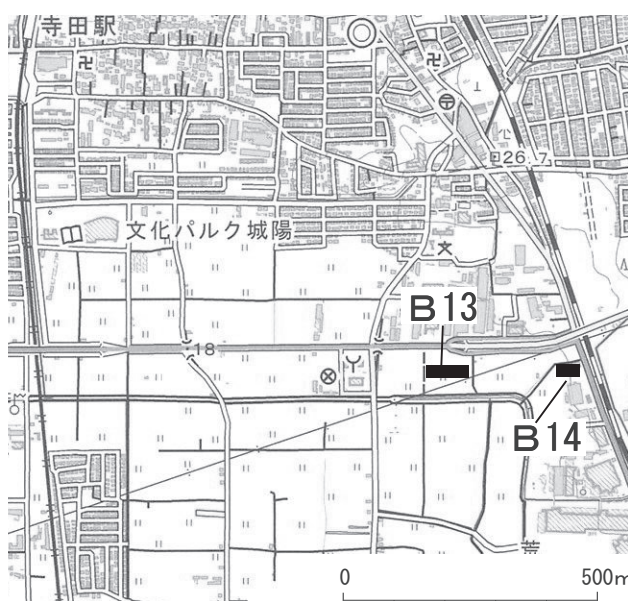
今回の調査は、国道24号寺田拡幅事業に先立ち、発掘調査を実施した。調査区は、小樋尻遺跡でB13区とB14区の2か所に分かれる。

調査概要 B13区では、井戸1基、土坑2基、溝4条を検出した。調査区西端で検出した井戸は、方形の素掘りの井戸で、一辺約2.6m、深さ約60cmを測り、底面は旧木津川の堆積層である砂層に達している。瓦器や土師器の破片が出土した。調査区東端で検出した方形土坑は、南北約1.5m、深さ約80cmを測り、底面は旧木津川の堆積層である砂層に達している。須恵器や土師器の破片が出土した。調査区東端で溝と重複して検出した不定形土坑は、長軸が約2.6m、短軸が約2.2m、深さが約30cmを測り、須恵器や土師器の破片が出土した。調査区中央で検出した北西から南東に延びる溝は、幅が0.5～1m、深さが約15cmあり、土師器が出土した。調査区東端で検出した北西から南東に延びる溝は、幅が0.7～1m、深さが約15cmあり、溝2条が北東から直交して合流する。須恵器や土師器の破片が出土した。

出土遺物から調査区西端の井戸は中世、調査区東端で検出した土坑と溝は、古墳時代末から飛鳥時代の遺構と考えられるが、遺構密度が低く遺物量も少ないことから、集落の縁辺部にあたると判断される。

B14区は、表土を除去して調査を行ったところ、調査区と重複して排水管が設置されていたことが判明した。遺構の検出は困難と判断し、埋め戻して調査を終了した。

(小泉裕司)



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 宇治)

3. 木津川河床遺跡第40次

所在地	八幡市八幡小字焼木
調査期間	令和4年4月25日～令和4年6月23日
調査面積	240m ²

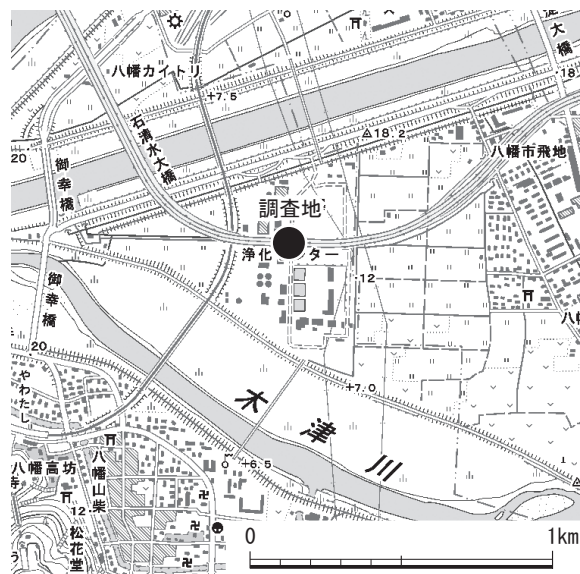
はじめに 木津川河床遺跡は弥生時代～中世の集落遺跡であり、桂川・宇治川・木津川が淀川となる合流部の東側に位置する。現在の木津川は河川改修により遺跡の中央を東西に縦貫するが、明治以前は木津川河床遺跡の北東側を流れ、遺跡は木津川左岸に位置していた。

今回の調査は、京都府洛南浄化センター建設工事に伴い京都府流域下水道事務所からの依頼を受けて実施した。調査地点は、洛南浄化センターと西側に隣接する城南衛生管理組合の境界部を南北に縦貫する道路敷地の中央付近、京滋バイパスと立体交差する地点である。前年度には調査地の北（B地区）と南（C1地区）で第39次調査を行っている。これらの調査区では上下2面の調査を行い、上層から中世～近世の島畑跡、下層から古墳時代初頭以降の土坑と2時期の異なる噴砂痕跡を検出した。

調査概要 今回の調査地C2地区は、トレンチの北側と南側が過去の工事により鋼矢板の攪乱を受けていた。第1面(標高8.9m)では、南のC1地区で検出した島畑1の北端部を検出した。これにより島畑1の規模は島畑上面で南北約53.0m、幅約14.5mを測ることが判明した。島畑面では小規模溝群、島畑の東西両辺と北辺を取り巻く大溝SD1を検出した。また、島畑北辺の大溝SD1では、溝埋没後の堆積土を切る湿地状堆積SX2を検出した。SX2は最下層から木製下駄等の木製品や江戸時代中期の土器・土製品が出土した。下層の第2面(標高7.65m)は無遺構・無遺物で、小規模な噴砂痕を検出した。

まとめ 今回の調査では、かつて洛南浄化センター内で確認された弥生～古墳時代の集落関連遺構は検出されていない。過去の調査で検出された竪穴建物などの遺構はC2区の南東及び南西にやや離れている。今回の成果としては、当地における中世以降の条理地割と土地利用の一端が判明した。前年度のC1地区と今回のC2地区検出の島畑1が、南北の半折型(54m)にはほぼ合致する状況を明らかにすることができた。

(竹原一彦)



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 淀)

4. 宇治市街遺跡第35次(川西地区)

所在地 宇治市宇治字文字2-12

調査期間 令和4年5月18日～令和4年10月5日

調査面積 410㎡

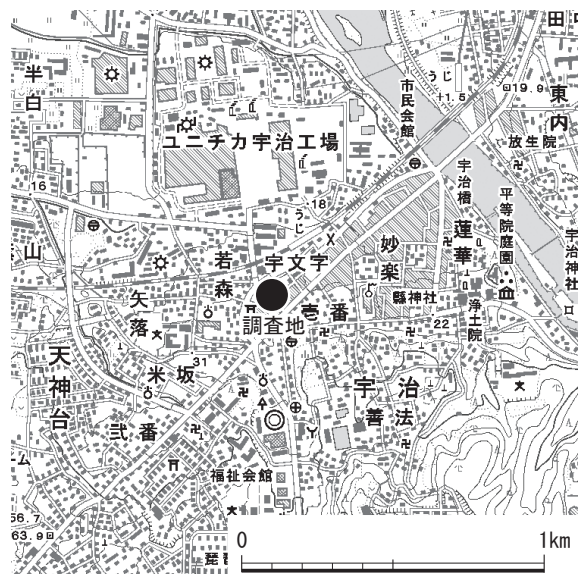
はじめに 宇治市街遺跡は宇治市の市街地を中心に、宇治川を挟んだ東西約1.6km、南北約1.3kmの範囲をもつ遺跡である。宇治川左岸では、これまでの発掘調査で古墳時代～近世の集落跡が見つかっている。今回の発掘調査は、宇治警察署の新庁舎建設工事に伴い京都府警察本部から依頼を受けて実施した。

調査概要 現地表下は現代の造成土(約60cm厚)、近代の廃棄物層(約20cm厚)、細片化した土師器を多く含む層(約45cm厚)の順にある。土師器細片を多く含む層は有機化しており、近世以降の茶畑耕作土と考えられる。茶畑耕作土を除去したところで大阪層群由来の地山を検出した。精査の結果、谷状地形・掘立柱建物跡・柱穴群を検出した。

谷状地形は北西－南東方向のもので、東肩のみを検出した。幅7m以上・深さ2.5m以上あり、自然堆積層からは12世紀と判断される白磁片が出土している。堆積の最終段階は人為的に土を入れていると判断される。土地利用のための整地と考えられる。

柱穴群は谷状地形を埋めた整地土、および地山上で検出した。検出数は100基以上あり、基底石が確認できるものもあった。柱穴の掘形は径0.4m程度の円形で、深さ0.4m程度で埋土が単層のものが多く、掘立柱建物跡に復元できるものは4棟程度あり、建物規模は3間×4間のものと、4間×4間のものがある。方位は北西－南東方向に主軸を持っている。柱穴から出土した遺物は土師皿が最も多い。時期は11～12世紀の編年的特徴を有するものである。その他、少量の瓦器・陶磁器・須恵器が出土している。これらは7世紀代や10世紀代、13～14世紀代のものである。

まとめ 今回の発掘調査で検出した谷状地形や掘立柱建物跡・柱穴群の時期は、1130年頃から実施される藤原忠実による宇治街区の別業整備の時期と重なる。調査地点は宇治街区の西外れにあたるが、調査事例が少ない状況であった。その中で宇治街区内と同時期の遺構が確認された点は大きな成果である。



(加藤雅士) 調査位置図(国土地理院 1/25,000 宇治)

5. 長岡京跡右京第1260次・開田遺跡ほか

所在地 長岡京市神足2丁目地内

調査期間 令和4年5月23日～令和4年7月4日

調査面積 190㎡

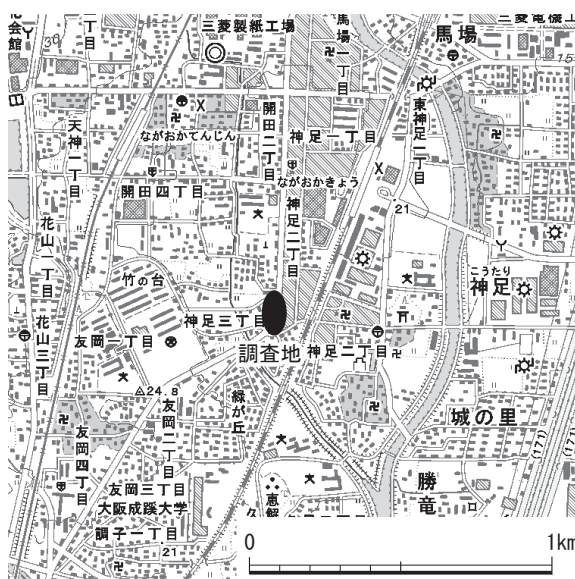
はじめに 本調査は、御陵山崎線無電柱化推進補助(街路)業務委託等に伴い、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて実施した。調査地は、長岡京跡の右京七条一坊十五町に位置しており、昨年度の調査では、西一坊大路の東側溝や宅地の区画溝、及び掘立柱建物を検出した。また、一昨年度の調査では、近世の遺構群や長岡京期の土坑・区画溝を検出している。調査対象地は、開田遺跡、神足遺跡及び中世勝竜寺城跡の範囲に含まれており、これまでの周辺の調査では、縄文時代から近世にかけての遺構・遺物が確認されている。

調査概要 調査対象地のうち、北側を1区、南側を2区として2か所のトレンチを設定し、発掘調査を実施した。1区は礫層によって構成される低位段丘、2区は犬川の後背低地に立地している。長岡京条坊復原によると、1区には七条条間北小路の南側溝が想定されていたが、遺構面の多くが攪乱による削平を受けており、最近まで使用していたという井戸や浄化槽などとともに基礎とみられる痕跡があるのみで、側溝の痕跡は見つからず、出土遺物も近現代のものだけであった。2区も攪乱が多く、遺構の残存は良くなかったが、地表面から0.9～1.2m掘削したところ、調査区中央付近で南北方向の溝状遺構を、その東側で柱穴を検出した。溝は、幅3.4m、検出長2.3m、深さ0.9mを測り、下層付近には砂や礫が堆積する層が認められたが、一昨年度の調査では同様の埋土を持つ北側に続くような溝状遺構は見つかっておらず、勝龍寺城に関わる堀の一部

と考えるには溝の幅や深さが小規模過ぎる。このことから、本調査区内で終結する南北方向の区画溝と考えられる。

まとめ 今回の調査では、1・2区ともに後世による攪乱が著しく、遺構面がほとんど残されていなかったが、2区で近世以降の時期と考えられる南北方向の溝と柱穴を確認した。今回は長岡京期の遺構・遺物の検出には恵まれなかったが、限られた調査区の中で、近世の遺構が西国街道の南側にも広がっていることがわかる貴重な成果となった。

(松井 忍)



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

6. 犬飼遺跡第12次

所在地 亀岡市曾我部町法貴茶屋下又はほか

調査期間 令和4年5月23日～令和4年8月10日

調査面積 670㎡

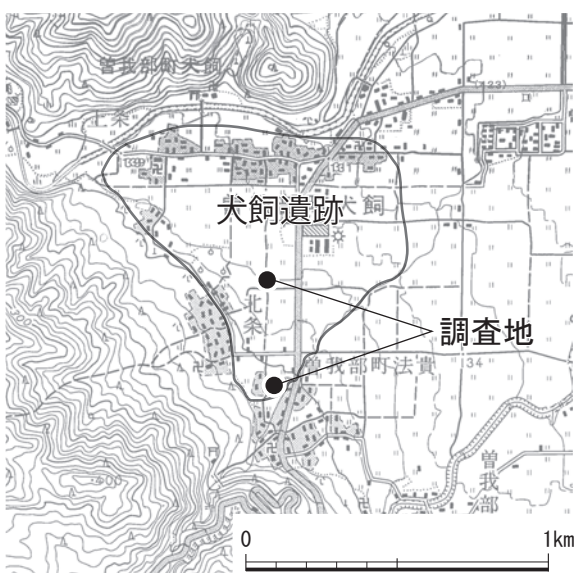
はじめに 犬飼遺跡は、亀岡市南東部の扇状地上に位置する古代から中世の集落跡である。これまでの調査で、古墳時代の水路・灌漑施設・集落のほか、奈良時代の集落、中世の居館・水路等を検出している。今回の調査は、国営緊急農地再編整備事業に伴い、近畿農政局の依頼を受けて実施したもので、昨年度実施の小規模調査の中から拡張対象となった範囲の本調査を行った。

調査概要 今回の調査は、昨年度実施した小規模調査の内、遺構・遺物などの兆候のあった1～3、7トレンチが対象となった。北側調査区の7トレンチでは、南東方向に並ぶ柱穴などの遺構や足跡の可能性のある砂の詰まった堆積層を確認した。並びが確認できる柱穴列は2つ確認できたが、建物規模は不明である。足跡状の堆積については長さが約15cmほどの大きさで、片足分のみの検出となった。遺物は、古墳時代の須恵器や土師器が出土した。

南側調査区では、N-1、N-2区として調査を実施した。両トレンチで掘立柱建物を1棟ずつ検出しており、N-2区の建物では一部柱材の残る柱穴も確認できた。遺物は、中世のものが多く出土しており、建物も同じ年代のものと考えられる。その他、N-1区では東側の谷状の落ち込みから角材などの材木が出土した。また、N-2区ではトレンチの北西で小形丸底壺が1点出土しており、調査区山手側の古墳群に関わるものかもしれない。

まとめ 今回は昨年度調査からの継続となり、北側では古墳～古代、南側では中世の遺構を確認するに至った。北側調査区ではトレンチ南東方向を主軸とした建物をはじめ、人びとの暮らしの様子を明らかにすることにつながる資料を確認した。また、南側調査区では街道沿いに建物が確認されたことで、摂丹街道やその周辺での集落の様子を考える貴重な発見となった。

(中尾真琴)



調査位置図(国土地理院 1/25,000 法貴)

7. 平遺跡

所在地 京丹後市丹後町平

調査期間 令和4年8月16日～令和4年10月7日

調査面積 350㎡

はじめに 本調査は、令和4年度に浜丹後線(上野平バイパス)民安関連道路新設改良業務委託に伴い、京都府丹後土木事務所の依頼を受けて実施した。平遺跡は昭和38年度に同志社大学、昭和40年度に帝塚山大学による調査が行われており、当センターでも過去3回にわたって発掘調査を行っている。過去の調査では、縄文時代草期から晩期にわたっての遺物包含層や、古墳時代の石敷遺構が確認されている。

調査概要 今回の調査では4か所のトレンチを設定して調査を行った。いずれのトレンチにおいても遺構の存在は確認できず、3・4トレンチにおいて古墳時代から縄文時代までの遺物包含層を2層検出した。平遺跡は宇川左岸の段丘上に立地し、円礫を多く含む段丘構成層の上に砂層が堆積している。3・4トレンチはその段丘斜面に位置している。遺物包含層は全て斜面堆積であり、古墳時代から縄文時代の遺物が混在していることから、二次的な包含層であると考えられる。包含層より上層は、現代に削平を受けてビニール袋やプラスチックなどが含まれるが、この攪乱層からも縄文土器などの遺物が多く出土する。

2層の包含層からはそれぞれ、縄文土器(前期後葉～後期後葉)、石鏃、磨製石斧、叩き石、玉類、須恵器、土師器などが出土している。

まとめ 今回の調査では、過去の調査において調査対象外となっていた斜面地において2層の二次包含層の広がりを確認できた。今回の最も標高の低い位置では地山を確認できていないため、



調査位置図

(国土地理院 1/25,000 「丹後平」「丹後中浜」)

二次包含層の下層に純粋な縄文時代の一次包含層を検出できる可能性がある。平遺跡は、縄文時代早期から晩期にわたって幅広い時期の遺物が出土しており、近畿北部の縄文時代を考える上で非常に重要な遺跡である。しかし、遺構や堆積環境の報告が乏しく、現状では遺跡の評価が困難である。過去の調査で出土した縄文土器や石器などの遺物に関しても、近年の研究の進展に伴って改めて評価を行う必要があろう。

これまでの調査における出土遺物を総合的に評価するという意味でも、今後の調査に期待するところである。

(大石雅興)

8. 岡ノ宮城跡

所在地 京丹後市大宮町周枳地先

調査期間 令和4年4月25日～令和4年10月4日

調査面積 950㎡

はじめに 岡ノ宮城跡は、丹後半島中央部の中郡盆地を南から北へ流れる竹野川の東方に位置する丘陵上部に立地する。周辺遺跡から縄文～中世段階の遺構、遺物がみつかっており、古くから土地利用がある地域である。今回の調査は、国土交通省福知山河川国道事務所の実施する一般国道312号大宮峰山道路事業に伴って行なった。

調査概要 調査では、中世後期の山城に伴うと考えられる建物や堀などに加えて古墳時代の埋葬墓を検出した。また中世前期の陶磁器類も出土した。なお、当地は戦時中に芋畑として利用されたことが知られている。

調査の結果、中世と古墳時代の2時期の遺構を検出した。中世には、岡ノ宮城跡では西側山頂の平坦面に建物が営まれ、その頂きの東側に堀切と横堀が尾根を切断するように作出されている。建物跡のみつかった平坦面には建物が建てられる以前に土坑が掘削されており、12～13世紀の景德鎮の合子や常滑の甕が出土した。

岡ノ宮城跡の西側山頂の平坦面の建物は、12基の柱穴から構成され、南北2間、東西3間の建物が復元できる。しかしながら、北側の柱列のかかる斜面には滑落した痕跡があり、建物は北側にさらに続いていた可能性もある。

山城として当地が利用される以前には、古墳時代の埋葬墓が築造されていた。斜面地には小規模な埋葬墓が4基、平坦面の上に北側の1基(S T34)、西側の一段下の平坦面に2基(S T32・S T33)が確認された。平坦面上に築かれたS T34は平坦面北側に築かれたようにみえたが、前述したように平坦面北側は後に滑落しており、本来は平坦面の中心に位置していたことがわかった。周辺からは須恵器片が出土しており、墓上に須恵器が供ぜられていたと考えられる。西側の一段下の平坦面に位置するS T32とS T33からは副葬品が出土した。S T32からは頭部側に鉄剣と思われる鉄製品と、左脇側に鉄鏃が数点まとまった状況で見つかった。S T33からは頭部側で勾玉2点、管玉4点、小玉3点が出土している。いずれも5世紀前葉ごろの造営と考えられる。(加藤雄太)



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 峰山)

9. 春日部遺跡第6次

所在地 亀岡市曾我部町中状使・前通

調査期間 令和4年6月7日～令和4年11月7日

調査面積 2,855㎡

はじめに 春日部遺跡は、東側および西側の山並みの間に開けた狭い平地部分に位置する、古墳時代から中世にかけての集落遺跡である。近年の調査では、竪穴建物や掘立柱建物、周囲を溝で囲まれた館跡などを検出している。今回の調査でも、竪穴建物や掘立柱建物などを検出し、集落域がさらに広がることを確認した。

今回の調査は、国営緊急農地再編整備事業に伴うものである。

調査概要 今回の調査では、古墳時代の竪穴建物や焼土坑、平安時代から中世にかけての掘立柱建物や柵列などを検出した。また、近世の耕作に伴うとみられるピット、土坑なども検出した。

古墳時代の遺構としては、竪穴建物3基と焼土坑がある。竪穴建物S H60は、一辺約5.5mの方形建物で、中央と西辺中央部に炉とカマドの痕跡と思われる焼土痕がある。出土遺物は、須恵器の杯身・杯蓋・小型鉢、土師器の甕・壺・高杯、手捏ね土器、製塩土器である。製塩土器は、大阪湾岸のものとみられ、今回の調査ではこの建物内のみから出土した。建物の時期は、古墳時代中期の5世紀と考えられる。竪穴建物S H280は、長辺約7m・短辺約6mの大型の方形建物で、北東辺中間部にカマドの痕跡とみられる焼土がある。出土遺物は、須恵器の杯身・杯蓋・甕、土師器の甕、手捏ね土器である。時期は古墳時代後期の6世紀後半と考えられる。竪穴建物S H270は、部分的な検出であるが、一辺約5mの方形建物である。古墳時代後期の6世紀後半頃の須恵器杯蓋と甕が出土した。このほか、焼土坑およびその痕跡と考えられる焼土を調査地内で8か所検出した。屋外に設けられた炉の痕跡と考えられるが、用途等は不明である。土師器や須恵器杯身などの土器が出土したものもあり、古墳時代後期の6世紀後半頃のものとみられる。

平安時代から中世にかけての遺構としては、掘立柱建物3棟、柵列2基がある。掘立柱建物S B45は調査区南端で検出した梁間2間(4.8m)、桁行3間(6.6m)の建物で、南西隅の柱穴内から



調査位置図(国土地理院 1/25,000 法貴)

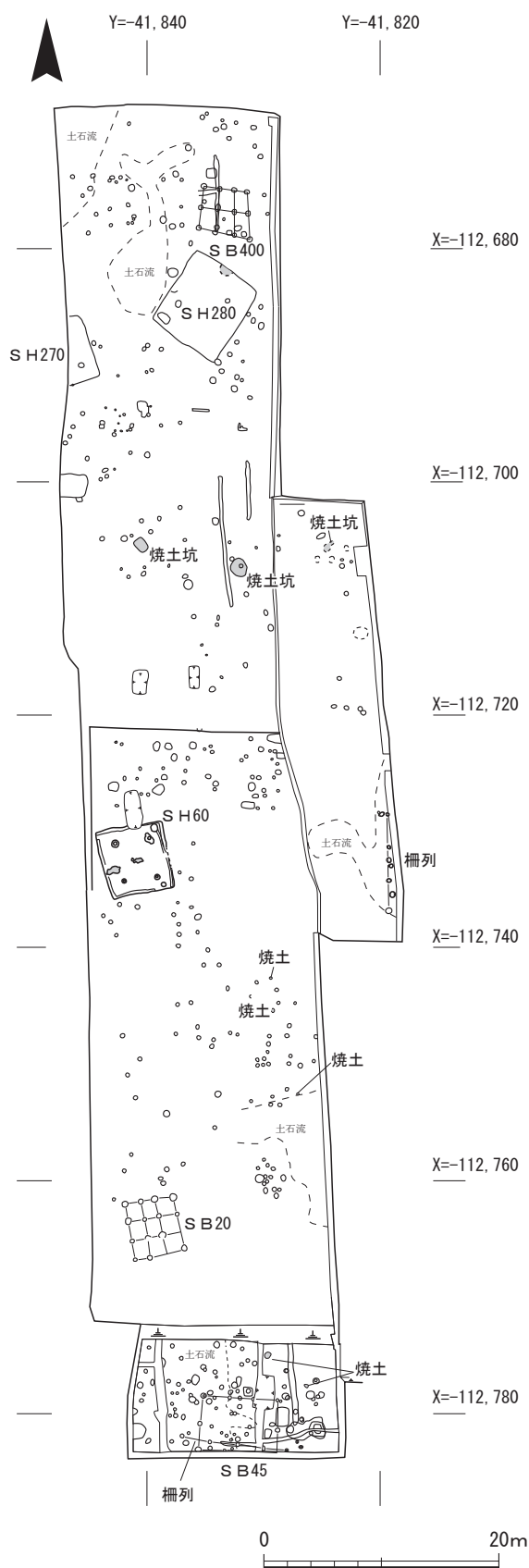


写真 竪穴建物 S H60

緑釉陶器片が出土した。時期は平安時代前半の10世紀と考えられる。掘立柱建物 S B20は、南北3間(5m)、東西3間(4.2m)の総柱建物である。高床式倉庫と考えられる。周辺から緑釉陶器片などが出土しており、平安時代の建物と考えられる。掘立柱建物 S B400は、梁間2間(3.8m)、桁行3間(4.2m)の東西に長い総柱建物で、柱穴内から瓦器片が出土した。中世の建物と考えられる。柵列は、調査地南側と中央東側の2か所で検出した。

まとめ 今回の調査では、古墳時代中期から後期の竪穴建物、平安時代から中世の掘立柱建物などの遺構を検出した。これにより、以前の調査で確認していた遺構分布範囲が、さらに東側および北側に広がることが明らかとなった。

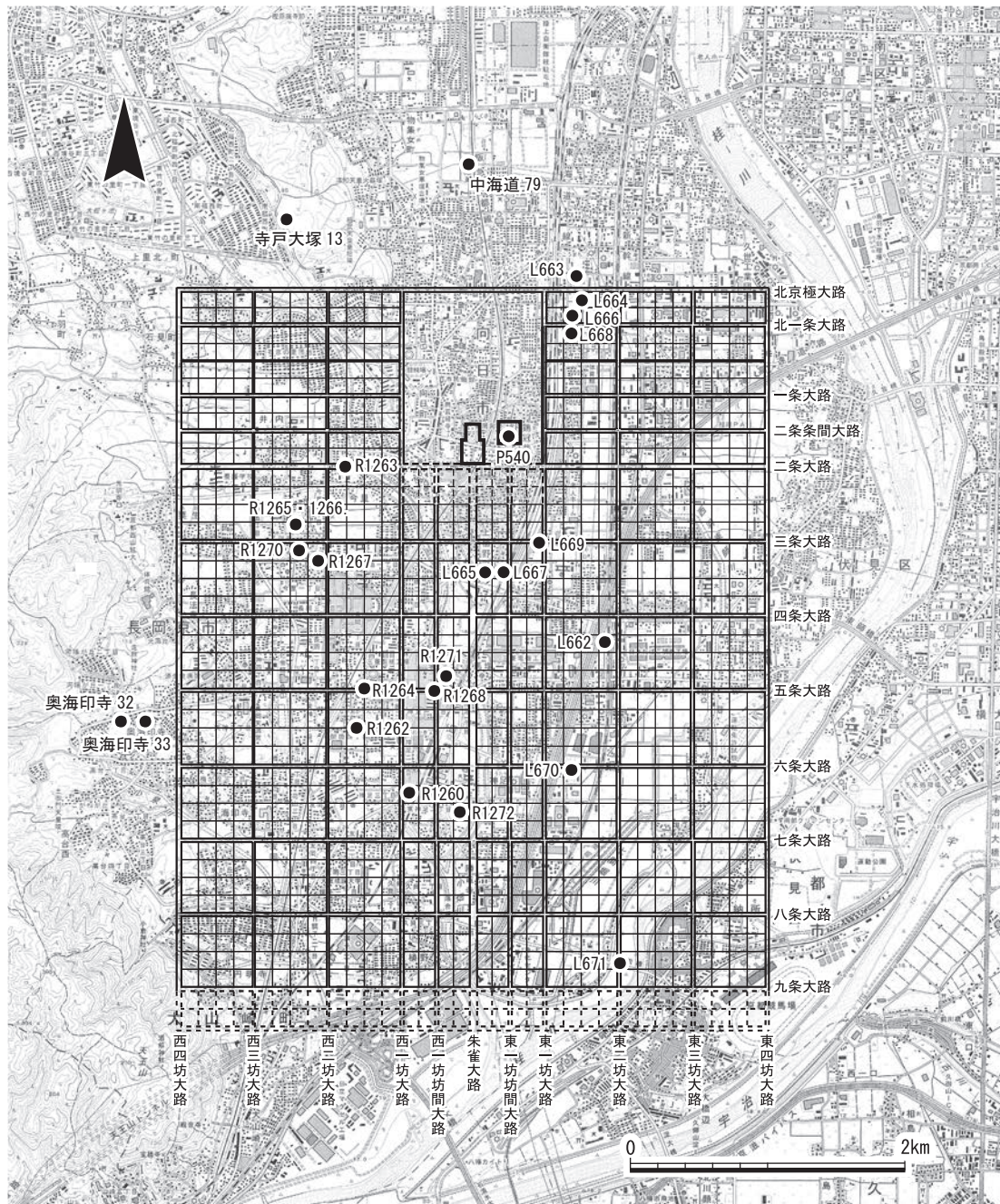
出土遺物で注目されるのは、古墳時代中期の竪穴建物から複数個体出土した製塩土器である。この製塩土器は、大阪湾岸から搬入されたものであり、そこで生産された塩がこの地に流通していたことを示す遺物と言える。春日部遺跡は、内陸部の平地である亀岡盆地と北摂(大阪府北部)山地の接点に位置している。現在も、北摂山地を經由して亀岡盆地と阪神地域を結ぶ道路が通じている。出土した製塩土器は、古墳時代中期の物流経路を示唆する遺物とも考えられる。(引原茂治)



第6次調査検出遺構図

長岡京跡調査だより・140

長岡京跡の発掘調査情報の交換および資料の共有化を図り、長岡京跡の統一的な研究に寄与することを目的に、毎月1回、長岡京域で発掘調査に携わる機関が集まり長岡京連絡協議会を実施している。令和4年7月から令和4年12月までの例会では、宮域1件、左京域9件、右京域11件、京域外4件の合計25件の調査報告があった。その中で、調査の終了したものを中心に略述する。



調査地位置図(1/50,000)

(向日市文化財事務所・(公財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図を基に作図)

調査地はPが宮域、Rが右京域、Lが左京域を示し、数字は次数を示す。

宮域 宮跡第540次調査は、昭和44年に内裏正殿で行われた第27次調査の再発掘調査である。正殿西半部で行われた第27次調査では、内裏正殿が隅を欠く四面庇付き掘立柱建物であることが確認されている。今回の調査では身舎南西隅端の2柱穴付近を調査し、柱穴の構造、凝灰岩地覆石抜き取り跡、基壇外の石敷きを再確認するために実施された。

左京 左京662次調査(向日市上植野町)では、厚い盛り土の下、地表下3mの遺跡を構成する土層が確認され、長岡京期の土師器、須恵器、製塩土器が出土した。**左京第663次調査**(向日市森本町)は京の北辺で実施された範囲確認調査で、長岡京期の遺構は検出されなかった。**左京664・666・668次**(向日市森本町)は向日市教育委員会による区画整理に伴う調査で、古墳時代前期の落ち込みや中世の柱穴などが確認された。弥生時代中期の土器も出土している。4年間続いた一連の調査はこれで終了した。**左京665次調査**(向日市上植野町)では、中世と古代の遺構面が確認され、最終段階の瓦器椀などが出土した。**左京669次調査**(向日市森本町)では三条大路南側溝が確認された。**左京670次調査**(長岡京市神足・雲宮遺跡)では六条大路の南北両側溝を確認中である。このほか、昨年度古代の淀津ではないかと報告された弥生時代から近世にいたる多くの知見を得た淀水垂天下津町遺跡の調査が、**左京第671次**(京都市伏見区淀水垂町)として10月から再開されている。

右京 右京第1262次調査(長岡京市開田)の調査では、六条条間小路南側溝とそれに斜交する奈良時代の3条の溝が検出され、乙訓寺と同範の軒丸瓦が出土した。**右京第1263次調査**(長岡京市今里)では、二条大路南側溝と西二坊坊間西小路の東側宅地内の南北溝を検出した。**右京第1264次調査**(長岡京市開田)では、五条大路北側溝と中世の掘立柱建物2棟を検出している。**右京第1265次・1266次・1270次調査**(長岡京市今里・乙訓寺)は、古代乙訓寺の範囲・内容確認調査に伴うものがある。右京第1265次調査では、講堂跡の調査で礎石を支えたこぶし大の礫からなる事業痕跡と、その下から柱痕跡が見つかり、講堂が掘立柱建物から礎石建物へ移行した可能性が明らかになった。寺域西端で行われた右京第1266次調査では、鎌倉時代の南北溝が確認された。**右京第1268次調査**(長岡京市一里塚・開田古墳群)の調査では、西一坊坊間大路の西側溝は検出できなかったが、1辺4mの方墳が確認された。**右京1271次調査**(長岡京市馬場)の調査では、五条大路南側溝や近世の溝・土坑などが検出された。

京域外 寺戸大塚古墳第13次調査(向日市寺戸町)では、昨年度に引き続き後円部の北東側で内容確認調査が実施された。葺石・埴輪がいずれも原位置を保たず、墳丘の崩壊に伴ったはらんだ状況で検出されたが、墳丘裾部の礫敷きは確認されていない。阪急洛西口駅西側で計画された区画整理事業に先立ち**中街道遺跡(第79次調査)**で範囲確認調査が実施された。中世以前の遺構面と中世の遺構面が確認されている。**奥海印寺遺跡**(長岡京市奥海印寺)では、**第32次・33次**の2回の発掘調査が実施された。平安時代から中世の溝や飛鳥時代の土坑が確認されている。

(肥後弘幸)

現地公開

(令和4年7月～令和4年12月)

当調査研究センターでは、埋蔵文化財の発掘調査成果を広く府民の方々に報告し、地域の歴史への関心を深めていただくため、当調査研究センターが実施している京都府内の発掘調査の成果について、現地説明会などの現地公開を行っている。

現在、当調査研究センターでは、令和2年の年頭から全世界規模で猛威を振るった新型コロナウイルスに対する感染拡大防止の観点から、現地説明会などの現地公開にあたっては、その都度情勢を見極めつつ、実施の方法・可否を判断しているところである。

現地説明会

法貴北古墳群 国道423号・法貴バイパスの建設に先立って昨年度から調査を開始している。亀岡盆地は、古墳時代後期の群集墳が府内でも多い地域のひとつで、近接する法貴古墳群で51基、法貴北古墳群で27基の古墳が確認されている。当調査研究センターとしても久しぶりの群集墳の調査であり、注目される遺跡である。7月7日(水)に記者発表を行い、7月9日(土)に現地説明



春日部遺跡現地説明会



佐屋利遺跡現地説明会

会を実施した。

気温30度を超える暑さの中、62名の方々に、直径8mの横穴式石室からなる円墳、墳丘外に営まれた小石室、木棺直葬墓など、古墳時代後期から飛鳥時代にかけての遺構を見学いただいた。

春日部遺跡 桂川(大堰川)右岸では近畿農政局による大規模なほ場整備事業に伴う発掘調査が続いており、地元の多くの方々に作業員として調査に協力いただいている。令和4年度は古墳時代後期の竪穴建物、平安時代の掘立柱建物が見つかった春日部遺跡で現地説明会を実施した。10月22日(土)に実施し、36名の方々が調査員の説明を熱心に聞いていた。

佐屋利遺跡 昨年度弥生時代中期の集落跡や中世の流路が検出されたが、今年度の調査では平安時代から鎌倉時代にかけての荘



熱心に説明を聞く小学生

官クラスの館跡が発見された。10月20日に記者発表を行い10月22日に現地説明会を実施した。丹後半島におけるはじめての中世館跡の発見ということで、関心が高く80名の方が現地を訪れた。

現地公開・学校見学

古代の大形の掘立柱建物が見つかり、同時期の墨書土器などが出土した綾部市北野台遺跡の調査では、地元の豊里小学校の高学年41名を対象とした現地見学会を12月6日に実施した。また、翌日には、地元の方を対象に現地公開を実施し、33名の参加を得た。

(肥後弘幸)

普及啓発事業 (令和4年7月～令和4年12月)

当調査研究センターでは、文化財活用の一環として埋蔵文化財の発掘調査成果や最新の研究成果を分かりやすく紹介し、府民の方々に文化財に対する理解をいっそう深めていただくため、埋蔵文化財セミナーや発掘調査速報展をはじめ、出前授業、「関西考古学の日」関連事業への参加などの普及啓発活動を行っている。

現在、当調査研究センターでは、現地公開と同様、新型コロナウイルスに対する感染拡大防止の観点から、埋蔵文化財セミナーをはじめとする普及啓発事業について、実施方法を工夫しながら行っている。工夫の一つとして、席数に対して定員を2分の1以下とするため、大会場での実施が必要となり、会場の確保に苦慮しているところである。

なお、埋蔵文化財セミナーと展覧会の実施、普及啓発冊子「もっと知りたい京都の遺跡」の作成にあたっては、京都府教育委員会からの委託事業として実施している。

(1)埋蔵文化財セミナー

埋蔵文化財セミナーは、京都府教育委員会と共催で年3回実施している。

第149回埋蔵文化財セミナー 「発掘された京都の歴史2022」展が山城郷土資料館で開催中の令和4年9月12日(土)に城陽市文化パーク城陽の大会議室で、城陽市教育委員会の後援を得て実施した。展覧会での南山城での成果の中心が、古墳時代であったため、「近年明らかになった南山城の古墳時代」をテーマとした。3人の講師からそれぞれ調査成果の報告をいただいた。まず最初に、城陽市教育委員会文化・スポーツ推進課の浅井猛宏氏から、南山城最大の前方後円墳久津川車古墳の発掘調査の成果について報告いただいた。続いて、京田辺市市民部文化・スポーツ



第149回埋蔵文化財セミナー聴講風景



第150回埋蔵文化財セミナー聴講風景

振興課の上野あさひ氏から、昨年度開発に伴う事前の発掘調査で前期の前方後円墳が発見され、「綴喜古墳群」として国史跡に指定されることが決まった天理山古墳群（令和4年11月10日指定）の調査成果について報告いただいた。最後に、当調査研究センターの小泉裕司が当調査研究センターが新名神高速道路建設と国道24号線拡幅に伴い発掘調査した城陽市小樋尻遺跡の成果について、周辺の城陽市教育委員会が実施した成果とともに報告した。

参加者は64名である。ベテラン、新人の講義となり、わかりやすく、新鮮だったとの感想を得た。

第150回埋蔵文化財セミナー 当調査研究センターは、京丹後市内で京都縦貫道の延伸部にあたる山陰近畿自動車道建設に関連する大規模な発掘調査を実施中である。

また、昨年度京丹後市教育委員会による日本海側最大の前方後円墳の発掘調査が終了した。これらのことから、京丹後市教育委員会の後援を得て京丹後市アグリセンター大宮で、「古墳時代の丹後」と題して第150回埋蔵文化財セミナーを開催した。花園大学文学部教授の高橋克壽氏から「丹後三大古墳の時代」と題して、最新の研究成果を踏まえて、なぜ丹後にこのような巨大古墳が築かれたかについて講演いただいた。講演に先立って、当調査研究センターの肥後弘幸が「この40年の発掘調査で明らかになった丹後の歴史～三大古墳誕生の背景～」と題して、また、京丹後市教育委員会文化財保護課の新谷勝行氏が「網野銚子山古墳の発見～丹後郷土史研究の幕開け～」と題して報告を行った。参加者は80名である。「丹後の三大古墳」と題したことで関心が高く、岐阜県、愛知県、徳島県、鳥取県と他府県からも来場者があった。

(2) 展覧会等

発掘された京都の歴史2022 当調査研究センターでは、毎年前年度の府内の発掘調査成果を一堂に報告する展覧会を、向日市文化資料館、ふるさとミュージアム山城（京都府立山城郷土資料館）、ふるさとミュージアム丹後（京都府立丹後郷土資料館）で巡回して実施している。展示は、速報展示と企画展示から構成される。速報展は、当調査研究センターが調査した13遺跡と京都府教育委員会の1遺跡および府内各機関が調査した13遺跡の計27遺跡から構成される。展示品は、旧石器、有舌尖頭器、縄文土器、弥生土器、勾玉等の装身具、埴輪、土師器、須恵器、金銅製品、瓦器、陶磁器など多岐にわたり、計187点（組）である。京丹後市鶴尾遺跡から、九九木簡などの

木簡と墨書土器が出土したこともあり、展示全体を通じて墨書土器や文字瓦などの文字資料に焦点をあてた。また、京丹後市網野銚子山古墳、向日市五塚原古墳、城陽市久津川車塚古墳、京田辺市天理山3号墳などの埴輪は関心を集めた。企画展示は、前年度「京都遺跡さんぽ」を作成したこともあり、「遺跡さんぽに行こう」と銘打って、調査が行われたのち保存された府内の遺跡をパネルと遺物で紹介した。会期は、向日市文化資料館が8月6日(土)から8月28日(日)まで、ふるさとミュージアム山城が9月6日(火)から9月19日(月)まで、ふるさとミュージアム丹後が9月27日(火)から10月10日(月)までである。開館日は46日で、入館者は1,709人であった。新型コロナウイルスが蔓延していることもあり、年配の方の来場が、コロナ前に比べて大きく減少しているように感じた。

歴彩館パネル展示 昨年度に引き続き京都府立京都学・歴彩館京都学ラウンジで、共催事業として「発掘された京都の歴史2022」パネル展を開催した。巡回展示中の「発掘された京都の歴史2022」展の内容を当調査研究センターがパネル20枚としてデジタル作成の上、歴彩館で印刷・掲示いただいた。合わせて亀岡市法貴北古墳群に副葬されていた耳環や須恵器を展示した。会期は令和4年10月1日～10月30日である。また、会期中に3回のミニ講座の実施にあたり、職員を派遣している。入場者は524名であった。

府庁2号館1階展示ロビー 京都府庁の職員及び来訪者向けの展示スペースにおいて、埋蔵文化財の保護の啓発と当調査研究センターの活動報告を兼ねて、毎年ミニ展示



向日市文化資料館での展示解説風景



ふるさとミュージアム山城での展示風景



ふるさとミュージアム丹後での展示風景



歴彩館京都学ラウンジにおけるパネル展示

付表 発掘された京都の歴史2022 出品目録

展示品				点数	出土地	調査機関						
速報展示 発掘された京都の歴史2021						18.長岡京跡右京1220次						
1. 稚児野遺跡						土師器皿	2	長岡京市	長岡京市教育委員会			
サヌカイト剥片石器				5	須恵器杯B	1						
大型剥片（石核）				1	須恵器杯蓋	1						
刃部磨製石斧				4	須恵器盤	1						
					須恵器壺G	1						
2. 壬生遺跡						19.長岡京跡右京1241次						
尖頭器（後期旧石器時代）				1	京都市	京都府埋蔵文化財研究所	土師器杯	1	長岡京市	京都府埋蔵文化財調査研究センター		
有舌尖頭器				2	土師器皿	1						
3. 水主神社東遺跡						墨書のある杯B「十」ほか	1					
局部磨製石器（トロトロ石器）				1	円面硯	1						
					蓋	1						
縄文土器深鉢片				2	長岡京市	長岡京市教育委員会	20. 佐屋利遺跡					
石鏃				10			呪符木簡（写真）	1	京丹後市	京都府埋蔵文化財調査研究センター		
石鏃				2			黒色土器碗	1				
碧玉製玉未成品				6			土師器皿	1				
石棒				1			緑釉陶器高台	1				
注口土器（縄文時代後期）				1	円面硯	1						
					墨書土器「西」	1						
4. 佐屋利遺跡						青磁碗	1	紡錘車			1	
弥生土器壺口縁部				1	京丹後市	京都府埋蔵文化財調査研究センター	21. 平安京右京三条一坊六町					
絵画土器				1			墨書土器 皿 「七条院」	1	京都市	京都市埋蔵文化財研究所		
大型石包丁				2			墨書土器 杯 「酒」	1				
上野遺跡出土大型石包丁				1			墨書土器 文字多数	1				
5. 五塚原古墳							墨書土器 須恵器杯B 「天」	1				
二重口縁壺片				6	向日市	向日市埋蔵文化財センター	緑釉陶器碗	1				
異形朝顔形埴輪				1			灰釉陶器碗	1				
6. 寺戸大塚古墳							灰釉陶器壺蓋	1				
パネル展示							向日市	向日市埋蔵文化財センター			須恵器杯蓋	1
7. 幾坂東古墳群・幾坂古墳群											須恵器杯B	1
滑石製勾玉（幾坂東3号墳）一連36点				1	京丹後市	京都府埋蔵文化財調査研究センター					土師器碗	1
ガラス小玉（幾坂1号墳）4点				1							緑釉陶器皿	1
瑪瑙勾玉（幾坂40号墳第1主体）				2							刻印瓦「右坊」「木工」「在」	3
滑石勾玉（幾坂40号墳第1主体）				2			銭貨「隆平永寶」「富壽神寶」	2				
蛇紋岩製そろばん玉				4			22. 大冢遺跡					
滑石製白玉一連431点				1			青白磁壺	1	亀岡市	京都府埋蔵文化財調査研究センター		
瑪瑙勾玉（幾坂40号墳第2主体）				1			青白磁壺蓋	1				
緑色凝灰岩製管玉（幾坂40号墳第2主体）一連14点				1			白磁碗	1				
緑色凝灰岩製管玉（幾坂40号墳第2主体）白玉2点				1			青磁皿	1				
							土師器皿	1				
8. 天理山古墳群						23. 井手遺跡						
天理山3号墳出土円筒埴輪				1	京田辺市	京田辺市市民部	土師器皿	1	亀岡市	京都府埋蔵文化財調査研究センター		
9. 網野鏡子山古墳						甕	1					
丹後型円筒埴輪				1	京丹後市	京丹後市教育委員会	須恵器壺	1				
10. 久津川車塚古墳						瓦器碗	2					
朝顔形円筒埴輪3片				3	城陽市	城陽市教育委員会	白磁碗	1				
盾形埴輪片				1			土師器皿	1				
鞍形埴輪片				3			24. 富ノ森城跡					
11. 小堀尻遺跡							井戸44出土土師器皿	3	京都市	京都府埋蔵文化財調査研究センター		
弥生土器甕				2			墓556出土土師器小皿	2				
小形器台				1	墓556出土土器碗	1						
小形丸底壺				3	墓556出土須恵器壺	1						
小形壺				1	溝340出土土師器碗	1						
複合口縁壺				1	亀岡市	京都府埋蔵文化財調査研究センター	溝340出土土器碗	1				
布留式甕				1			溝340出土土器壺	1				
須恵器杯				1			溝340出土土師器蓋	1				
須恵器杯 墨書土器				1			25. 伏見城跡					
12. 法貴北古墳群							金箔・巴文軒丸瓦	2	京都市	京都府埋蔵文化財研究所		
台付長頸壺				1	金箔・唐草文軒平瓦	1						
杯G蓋				1	金箔・蜀文軒丸瓦	1						
杯G身				3	金箔・剣花菱文方形飾り瓦	1						
平瓶				1	26. 御土居							
13. 蔵尾遺跡						榎印摺	1	京都市	京都府埋蔵文化財研究所			
九九木簡						1	京丹後市	京都府埋蔵文化財調査研究センター	27. 木津川河床遺跡			
荷札木簡				1	土師器小皿	2			八幡市	京都府埋蔵文化財調査研究センター		
習書木簡				1	埴付碗小	1						
墨書土器杯「野」「天」「上」「政所」など				6	埴付碗	1						
14. 上奈良遺跡						合 計			187	企画展示 遺跡さんぽに行こう		
須恵器杯B				1	八幡市	八幡市教育委員会	1. 国史跡赤坂今井墳墓					
須恵器皿				1			パネル展示					
円面硯				1			京丹後市	京都府埋蔵文化財調査研究センター	2. 私市円山古墳			
墨書土器 鉢「考所」				1			パネル展示					
墨書土器 杯B「乙女」・則天文字				1			綾部市	京都府埋蔵文化財調査研究センター	3. 保津車塚古墳			
墨書土器 杯 則天文字				2					石見型盾形樹物		亀岡市	京都府埋蔵文化財調査研究センター
墨書土器 壺（転用硯）「大」				1					4. 築紫第跡			
墨書土器 杯A「遠」				1					パネル展示			
									1	京都市	京都府埋蔵文化財調査研究センター	5. 大山崎瓦窯跡
15. 恭仁宮跡						軒丸瓦	2	大山崎町	大山崎町教育委員会			
恭仁宮式文字瓦				5	木津川市	京都府教育委員会	軒平瓦			2		
						刻印瓦「理」「三川」	2					
16. 栢ノ木遺跡						6. 平等院旧境内遺跡						
恭仁宮式文字瓦				4	井手町	京都府埋蔵文化財調査研究センター	軒丸瓦	4	宇治市	京都府埋蔵文化財調査研究センター		
線刻文字瓦				1			宇治市	京都府埋蔵文化財調査研究センター	7. 大津市			
銅製金具				2			8. 大津市					
金銅製釘				1			9. 大津市					
不明金銅製品				1			10. 大津市					
17. 乙訓寺						11. 大津市						
パネル展示					長岡京市	長岡京市教育委員会	12. 大津市					

を実施している。今年度は12月19日(月)～12月23日(金)の間、「京都・古代の瓦をみる」と題して、京丹後市倭野廃寺、亀岡市佐伯遺跡、宇治市平等院旧境内遺跡、井手町栢ノ木遺跡(井手寺塔跡)の瓦を展示した。

(3)体験学習・出前授業

夏休み考古学体験講座 勾玉をつくろう！ 当調査研究センター研修室において、令和4年8月16日(火)～18日(木)の間、午前・午後の2回にわたって計6回開催した。感染予防のため1講座10人程度の少人数制で実施している。昨年度は5・6年生を対象にして、申込者が定員を超えたこともあり、今年度は6年生のみを対象とした。参加人数は52名である。

出前授業 「身近な長岡京跡の歴史と昔の人の道具について学びたい」という向日が丘特別支援学校の生徒の意向を受けて、隣の向日市文化資料館で長岡京について職員が説明したのち、当調査研究センター研修室で縄文時代から江戸時代までの出土品について説明を聞きながら触れていただいた。弥生時代の森本遺跡について学んでいる第3向陽小学校から、4年生50名を対象とした勾玉教室の依頼があり、職員3名が対応した。



京都府庁展示ロビーでの展示状況



向陽第3小学校での勾玉教室実施状況



ベテラン職員による考古学講座第1回
「旧石器人はどこからきたのか」実施状況

関西考古学の日関連講座 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックの1機関として、夏から秋にかけて「関西考古学の日」として、埋蔵文化財の普及・啓発事業に取り組んでいる。例年小人数を対象としたミニ講座を実施してきたところであるが、3年ぶりに「ベテラン職員による考古学講座」と題して、9月24日(土)、10月8日(土)、11月5日(土)の3回実施した。

(4)普及啓発誌「もっと知りたい京都の遺跡」の刊行

当調査研究センターでは、府内の埋蔵文化財の普及啓発を目的にA4二つ折りのカラーリーフレットを毎年2号刊行している。今年度は、1号目の第11号は「竪穴建物」と題して、縄文時代から古墳時代に至る府内の発掘調査で検出された竪穴建物について紹介している。5000部印刷し、府内を中心に900機関へ送付している。

(肥後弘幸)

センターの動向

(令和4年7月～令和4年12月)

- 7 4 長岡京跡右京第1260次(長岡京市)現地調査終了(5月23日～)
- 5 城陽市文化財講座講師派遣「城陽市最新文化財情報—小槌尻遺跡の発掘調査成果」(於：文化パーク城陽)小泉副主査
- 7 令和4年度第1回全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者会議(於：堺市、小池課長、筒井補佐出席)
- 9 法貴北古墳群(亀岡市)現地説明会(参加者62名)
山城郷土資料館文化財講演会講師派遣「木津川河床遺跡の成果」大石調査員
近畿弥生の会(於：和歌山市)講師派遣「八幡市美濃山遺跡の調査について」荒木主任
- 10 城陽市歴史民俗資料館友の会総会講師派遣「久津川古墳群を考える」小池課長
- 27 長岡京連絡協議会(於：当調査研究センター)
- 28 小槌尻遺跡第14次(城陽市)現地調査終了(5月9日～)
- 8 6 「発掘された京都の歴史2022」展開始(於：向日市文化資料館 ～28日)入館者1,121名
- 12 犬飼遺跡第12次(亀岡市)現地調査終了(5月23日～)
- 16～18 「夏休み考古学体験講座 勾玉をつくろう！」(於：当調査研究センター 参加者52名)
- 16 平遺跡(京丹後市)現地調査着手
- 24 長岡京連絡協議会(於：当調査研究センター)
- 9 6 「発掘された京都の歴史2022」展開始(於：山城郷土資料館 ～19日) 入館者222名
- 8 北野台遺跡(綾部市)現地調査着手
- 17 第149回埋蔵文化財セミナー「近年明らかになった南山城の古墳時代」(於：城陽市文化パーク城陽)参加者69名
- 20 女布遺跡(舞鶴市)現地調査開始
- 21 法貴北古墳群第2次(亀岡市)現地調査終了(5月6日～)
- 24 「関西考古学の日」ベテラン職員による考古学講座「旧石器人はどこから来たのか」(於：当調査研究センター)講師中川課長補佐
- 27 「発掘された京都の歴史2022」展開始(於：丹後郷土資料館～10月10日)入館者366名
- 28 長岡京連絡協議会(於：当調査研究センター)
- 29 向日が丘特別支援学校出前授業(於：向日市文化資料館、当調査研究センター)
- 10 1 丹後郷土資料館文化財講座講師派遣「発掘された京都の歴史2022のみどころ」肥後課長補佐
「発掘された京都の歴史2022」パネル展開始(於：京都学・歴彩館 ～31日)入場者524名
- 4 第3向陽小学校出前授業「勾玉づくり」(於：向日市立第3向陽小学校)
- 5 宇治市街遺跡(宇治市)現地調査終了(5月18日～)
- 6 歴彩館パネル展関連ミニ講座講師派遣「縄文人の死生観」小池課長
- 7 平遺跡(京丹後市)現地調査終了(8月16日～)
- 8 「関西考古学の日」ベテラン職員による考古学講座「弥生王墓と日本海交易」(於：当調査研究センター)高野課長補佐

- 9 「関西考古学の日2022」記念講演会「奈良仏教と政治の世界」職員派遣小池課長、筒井課長補佐
(「報告3 木津川市神雄寺跡―建立者は橘諸兄か―」講師筒井課長補佐)
- 10 大阪府立狭山博物館歴史セミナー講師派遣「導水祭祀の系譜―弥生時代に遡る地域王権の祭儀―」
高野課長補佐
- 13 歴史館パネル展関連ミニ講座講師派遣「東アジアからみた鶴尾遺跡出土の九九木簡」小池課長
- 19 立山古墳群(京丹後市)現地調査開始
- 20 歴史館パネル展関連ミニ講座講師派遣「長岡京遷都の背景と完成度」小池課長
- 22 春日部遺跡(亀岡市)現地説明会 参加者36名
佐屋利遺跡(京丹後市)現地説明会 参加者80名
- 23 春日部遺跡(亀岡市)現地調査終了(6月7日～)
京丹後市周枳地区公民館祭出土品展示
- 26 長岡京連絡協議会(於：センター)
- 11 1 立山古墳群(京丹後市)現地調査開始
全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会(於：長野県)名村調査員参加
- 5 「関西考古学の日」ベテラン職員による考古学講座「邪馬台国時代の諸国の事情」(於：当調査研究センター)肥後課長補佐
第30回大中まつり古代体験フェスティバル出展(於：兵庫県立考古博物館・大中遺跡公園)
- 8 平野古墳群(亀岡市)現地調査開始
- 16 長岡京連絡協議会(於：当調査研究センター)
- 23 第150回埋蔵文化財セミナー「古墳時代の丹後」(於：京丹後市アグリセンター大宮)参加者80名
- 12 1 幾地城跡(与謝野町)現地調査開始
- 5 柘榴遺川遺跡(精華町)現地調査開始
- 6 北野台遺跡(綾部市)市立豊里小学校5・6年生現地見学 参加者41名
- 6 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック事務担当者会議(於：八尾市)鍋田課長補佐出席
- 7 北野台遺跡(綾部市)地元説明会 参加者33名
- 18 令和5年4月採用職員採用選考試験(第一次審査)
- 19 京都府庁2号館ロビー展「京都・古代の瓦をみる」開始(～12月23日)
- 21 長岡京連絡協議会(於：当調査研究センター)
- 23 第44回理事会(於：京都市)
佐屋利遺跡(京丹後市)現地調査終了(5月9日～)
北野台遺跡(綾部市)現地調査終了(9月6日～)
平野古墳群(亀岡市)現地調査終了(11月8日～)

編集後記

新しい年号が早くも5年目を迎え、今年はこの3年間悩まされてきた新型コロナウイルスとも違った形で向き合うことになりそうです。ここに『京都府埋蔵文化財情報』第144号が完成しましたので、お届けします。

本号では、京都府教育委員会文化財保護課の方から3本のご寄稿いただき、例年になく大部なものになりました。論文、研究ノート、資料紹介とも充実した内容になっておりますので、ご一読いただきますようお願いいたします。

新しい年が、平和な年になり、かつての日常が戻ってくることを願うばかりです。今後ともみなさまのご指導・ご鞭撻をよろしくお願いします。

(編集担当 肥後弘幸)

京都府埋蔵文化財情報 第144号

令和5年1月31日

発行 公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷





KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER